2014年度
慶應義塾大学体育研究所
基盤研究報告書

慶應義塾大学体育研究所

はじめに

体育研究所所長
石手　靖

皆様、年度末の何かとご多忙の時期に失礼申し上げます。先ずは今年度も体育研究所の諸々の活動に対して多分なご理解とご協力を頂きましたこと所員を代表して心より御礼申し上げます。

さて、この度 2014 年度慶應義塾大学体育研究所基盤研究報告書をまとめさせて頂きました。第一報ですのでまだまだ核心には至りませんが、是非ご一読頂き様々な視点からのご意見をお聞かせ頂ければ幸いに存じます。

先般発行致しました基盤研究レポートにてお知らせしましたように、体育研究所では 2012 年に本研究を立ち上げ、社会および大学、あるいは慶應義塾における体育教育の果たす役割について再検討しております。今回は 3 つのコアテーマについてこの 2 年間の研究成果を記述致しました。

人間形成の場としての大学において、我々体育研究所に課せられた責務を十分に認識し、「未来を切り拓くための行動力に溢れた塾生を育てる」為に今後も努力を重ねてまいります。分野の異なった先生方からのご意見が、本研究が自己満足的な研究にならない為に必要不可欠であります。これからもご指導ご鞭撻の程、何卒宜しくお願い申し上げます。

慶應義塾大学体育研究所基盤研究報告書

はじめに　体育研究所所長　石手　靖　1

基盤研究報告書発刊にあたって　基盤研究座長　近藤明彦　3

コアテーマ①　FD 実践としての体育授業プログラムの在り方
「自己効力感及び社会的スキルの向上に寄与する体育実技プログラムの開発」……5
班長：村松憲　班員：村山光義・板垣悦子・野口和行・（体育研究所）、東海林祐子（総合政策学部）

コアテーマ①　FD 実践としての体育授業プログラムの在り方（その 2）…… 14
「大学体育において教員は履修者の運動・スポーツに対する内発的な動機づけに貢献するか？――大学体育における動機づけ雰囲気の検討――」
班長：山内賢　班員：永田直也・佐々木玲子・加藤大仁・近藤明彦（体育研究所）

コアテーマ②　学生スポーツの行動と大学におけるスポーツ
「研究を通じた塾体育会の支援策～タレント識別手法の検討～」…… 21
班長：石手靖　班員：鳥海崇・坂井利彰・加藤幸司・須田芳正・吉田泰将・山内賢（体育研究所）

コアテーマ③　大学体育の教育理念とカリキュラム
「大学体育の今日的課題の検証と本塾の課題へのアプローチを探る」…… 25
班長：村山光義　班員：植田史生・奥山靜代・福士徳文（体育研究所）、佐藤正伸（文教大学）

基盤研究報告書発刊にあたって

座長　近藤明彦

平成24年12月に慶應義塾大学体育研究所設立50周年を記念して「慶應義塾の体育・スポーツを問い直す」というタイトルのシンポジウムが開催され様々な議論が成された。このシンポジウムをきっかけに大学における体育・スポーツはどうあるべきか、そして大学体育研究所という教育・研究組織がこの問題にどのように取り組むかについて組織的・継続的に取り組むべき課題であるということが確認された。そして体育研究所「基盤研究」という位置づけのプロジェクトを平成25年より展開することとなった。

プロジェクトのテーマは、これまでに所内で展開されていた研究課題も含め「FD実践としての体育授業プログラムの有りかた」、「学生スポーツ行動と大学に於けるスポーツ」、「大学体育の教育理念とカリキュラム」の3つを設定した。これらの研究テーマは取りも直さず体育研究所自身が実施している授業やサービスプログラムの教育的意義やその効果に対する検証を進めることであり、これは大学体育に対する要・不要論に対してもエビデンス・ベースで明確な答えを出すことが期待される。

平成25年度の研究成果は「慶應義塾大学体育研究所平成25年度基盤研究レポート」という形でその概略を公表してきたが、2年度目の今年は報告書の形で研究成果を公表することとなった。三つの研究テーマに対して今年度は四つのプロジェクト･グループによる報告が成された。

「FD実践としての体育授業プログラムの有りかた」のプロジェクト・テーマにおいては二つの研究グループからの報告が成された。一つ目は従来からの研究課題を継続・発展させた研究プロジェクトとして「自己効力感及び社会的スキルの向上に寄与する体育実技プログラムの開発」として行われたものである。このプロジェクトでは平成23年度からの研究状況についてその概略が報告された。それは、「学生の成長に寄与する体育科目の再構築に向けた基礎的研究――一般性自己効力感、社会的スキルの変化に着目して――（平成23年）」、「体育実技履修学生の社旗的スキルおよび自己効力感の水準に関する基礎的研究（平成25年）」、「学生の社会的スキル向上を目指した体育実技実践の試み（平成25年）」、「体育実技履修学生の社会的スキル及び自己効力感の変容に関する検討――授業形態の違いによる比較――（平成26年）」についてである。これら一連の報告はいずれも広く用いられている心理的尺度である“一般的自己効力感尺度（General Self-Efficacy Scale：GSES）”および”社会的スキル尺度（Kikuchi's Scale of Social Skills-18 items：Kiss-18）”を用いた報告である。

二つ目のプロジェクトは「大学体育において教員は履修者の運動・スポーツに対する内発的動機付けに貢献するか？――大学体育における動機付け雰囲気の検討――」である。スポーツ・運動への参加そしてその継続の鍵は自己選択･自己決定にあるという自己決定理論に基づき“動機付け尺度”と“動機付け雰囲気尺度”の関連について検討した「動機付けの状態と動機付け雰囲気を測定する尺度の検証」、同じく“動機付け尺度”と“動機付け雰囲気尺度”を用い授業初回と最終回における変化について検討を加えた「教養体育が履修者の運動やスポーツ活動に対する動機付けに及ぼす影響の検証」、そして動機付け雰囲気と達成指向性（熟達指向性・成績指向性）との関連を検討した「教養体育における動機付け雰囲気が、履修者の運動やスポーツ

活動に対する動機付けに及ぼす影響の検証」が平成26年度に行われた。

「学生スポーツ行動と大学に於けるスポーツ」のプロジェクト・テーマでは「研究を通じた塾体育会の支援策――タレント識別法の検討――」として幾つかの部を対象として身体計測ならびにパフォーマンスの測定が行われた。まだ研究の緒に就いたばかりで有り今後の研究の展開が期待される。

そして、「大学体育の教育理念とカリキュラム」のプロジェクト・テーマでは「大学体育の今日的課題の検証と本塾の課題へのアプローチを探る」とプロジェクトが展開された。このグループは（公社）全国大学体育連合との共済でシンポジウムを開催した。今回の報告書にはこのシンポジウムの成果が報告された。シンポジウムでは上智大学、師岡氏による「上智大学共通必修科目“ウエルネスと身体”のめざすもの――保健体育2つの授業目標の達成に向けて――」、筑波大学、木内氏による「大学体育の論と証拠と満足度」、流通経済大学、田簑氏による「体育が育てる大学生――ミャンマーの伝統スポーツ“チンロン”を教材として――」、体育研究所、石手氏による「活力ある塾生の育成」の4つの演題が発表された。全体討論は慶應義塾大学文学部長の関根氏をディスカッサントに迎えて行われこの議論も報告書に収録した。また、この研究グループは各種文献調査も継続的に行っており報告書には書籍一覧と「グローバリゼーション」、「日米英大学比較」「授業デザイン」のキーワードから見た大学教育・体育への作用についてのまとめを示した。

平成26年度の体育研究所基盤研究報告書では、以上4つの研究プロジェクト・グループからの報告を収録することが出来たが、それぞれの報告内容はいずれも基礎的調査段階のものであった。今後これら報告された知見を礎に、各研究プロジェクト･グループが、効果的な体育･スポーツ教育プログラムの開発や、体育研究所が持つ科学的ノウ・ハウを如何に実践の場に生かしていくかを具体的に示す研究成果が期待される。

コアテーマ①　FD 実践としての体育授業プログラムの在り方

「自己効力感及び社会的スキルの向上に寄与する体育実技プログラムの開発」

班長：村松憲　班員：村山光義・板垣悦子・野口和行・（体育研究所）、東海林祐子（総合政策学部）

本グループではこれまで、体育実技が自己効力感や社会的スキルにどのような影響を及ぼすのか、そしてまたどのようなプログラムが有効なのかというテーマの下、研究を続けてきた。本稿では本グループがこれまでに発表した４つの論文を紹介し、現状の成果と課題をまとめた。

【報告 1】学生の成長に寄与する体育科目の再構築に向けた基礎的検討――一般性自己効力感、社会的スキルの変化に着目して ――（慶應義塾大学体育研究所紀要第 50 巻、2011 年）

体育科目を履修することでどのような効果を得られるのか、という点を把握しておくことは、大学における体育を考えるときに是非とも必要であると考えられる。その際の指標として我々が選んだのが自己効力感（以下 GSES）と社会的スキルである。自己効力感は行動の遂行可能性の認知を意味しており（Bandura 1977）心身の健康維持増進を考える上で重要であると考えられており（高田 2003）、変容可能と考えられるために教育の場でも重視されるようになりつつある。一方社会的スキルとは対人関係を保っていくためのスキルであり、社会心理学や行動分析学の分野で研究課題とされているものである。菊池（2007）は社会参加性としての社会的スキルが重要であるとし、多様な社会的スキル項目の中から「問題解決」「トラブル処理」「コミュニケーション」に関する行動に注目した評価尺度 KiSS-18 を作成した。円滑な対人関係を構築する能力や、言語的・非言語的コミュニケーション能力は社会人として身に着けるべきスキルとして重要視されるとともに、大学に期待される教育内容と考えられる。このような背景から自己効力感と社会的スキルに関する実態の把握は重要な課題であり、ここに体育科目がどのような関係性を持つか、体育実技のような身体の実体験を中心とする教育活動がどのように寄与できるか検討することは極めて意義のあることと考える。

調査用紙（表 1）は、1）運動実施状況・体育実技の履修状況などの個人プロフィール、2）スポーツ活動に対する意識に関する質問項目、3）一般性自己効力感テスト項目、4）社会的スキルテスト項目、を含む構成とした。平成 22 年の春学期の初旬と下旬の計 2 回にこの調査用紙によりアンケート調査を実施した。実施種目は「集団種目」としてサッカー、バスケットボール、バレーボール、テニス、卓球、「個人種目」としてエアロビクス、ボディーメイクエクササイズ、体力 UP コース、ウォーキングエクササイズ、陸上競技、フライングディスク、ニュースポーツ、「講義科目」として英語、文学、スポーツ科学、体育学講義であった。学籍番号による 2 回の合致が得られた有効回答は 658 名分であった。講義科目調査軍の中で当該学期に体育実技を履修していない者を「実技なし」とし、「集団種目」「個人種目」を合わせて「実技あり」として、履修しているが種目の特定ができないものは除外した。その結果、実技ありは 386 名（個人 180 名、集団 206 名）、実技なしは 176 名となった。この 3 グループを対象に、GSES、社会的スキル、スポーツ意識項目の比較分析を行った。各グループ内の 1 回目と 2 回目の得点比較には対応のある T 検定、グループ内の比較には等分散を仮定した対応のない T 検定を行った。有意水準は 5% とした。

図 1 は GSES の 1 回目と 2 回目の得点の平均値と標準偏差について、実技なし、個人種目、集団種目ごとに示したものである。実技なしでは 1 回目と 2 回目の得点に有意差は見られなかったが、個人種目と集団種目では 1 回目に対して 2 回目の得点が有意に上昇した。個人種目と集団種目を合わせた「実技あり」グループ

と実技なしの比較では、1回目には有意差が見られないが、2回目では実技ありグループが有意に高い得点を示していた。

図2は社会的スキルの1回目と2回目の平均得点と標準偏差について、実技なし、個人種目、集団種目ごとに男女別で示したものである。実技なし女子、個人種目男子および女子、集団種目男子においては1回目に対して2回目の得点が有意に上昇したが、実技なし男子、集団種目女子においては有意差が見られなかった。また個人種目と集団種目を合わせた実技ありグループ全体では、男女ともに1回目に対する2回目の得点の有意な変化は見られなかった。

図3～10は社会的スキルとGSESの得点の相関関係を示している。GSESは男女含めた評価であるが、社会的スキルとの関係を知るために、男女別のデータとして再集計した。すべてにおいて、社会的スキルとGSESの間に有意な相関が認められた。

以上の結果より、体育実技の履修によってGSESの向上が期待できることが示唆された。調査期間の3ヶ月程度の間、体育実技のみがGSESの得点変化に貢献したとは言えないが、実技を履修しないグループのGSES得点が有意に変化しなかったことからみると、少なからず体育実技の影響があったと考えられる。社会的スキルについては「集団種目女子」においては1回目に対する2回目の有意な得点上昇がみられなかったが、個人種目・集団種目男子および、個人種目女子においては有意な上昇が見られたことから、体育実技の影響が示唆される結果となっていた。しかしながら女子においては実技なしグループでも得点が有意に上昇していることから、体育実技以外においても他者との関わりや未知の授業体験なども、社会的スキルに影響を及ぼしている可能性が考えられる。

表1

以下の項目に、記入、または○をつけて、ご回答ください。

氏名：　　年齢：　　歳　　性別：　男　・　女

学部：　　学年：　　学籍番号：

これまで体育の授業以外で身体活動を行っていましたか。
1. はい　　2. いいえ

上記の質問で1と答えた方に質問します。体育の授業以外での運動頻度を教えてください。また、その種目名を教えてください。

高　校：週・月　　回（種目　　）　　大　学：週・月　　回（種目　　）

これまでに大学の体育実技を履修したことがありますか(2年生以上の方のみ回答して下さい)。
1年　コマ　　2年　コマ　　3年　コマ　　4年　コマ　　大学院　コマ

今年度、体育実技を履修していますか?
春学期　　コマ　　秋学期　　コマ

身体を動かすのが好きだ。	強くそう思う	そう思う	どちらでもない	そう思わない	全くそう思わない
スポーツは楽しむことが大切だと思う。	強くそう思う	そう思う	どちらでもない	そう思わない	全くそう思わない
スポーツをする時間があるなら勉強をする。	強くそう思う	そう思う	どちらでもない	そう思わない	全くそう思わない
スポーツは体力を高めることに役立つと思う。	強くそう思う	そう思う	どちらでもない	そう思わない	全くそう思わない
スポーツを通じて多くの友人を作ることができると思う。	強くそう思う	そう思う	どちらでもない	そう思わない	全くそう思わない
スポーツをすると、負けたり失敗して嫌な思いをする。	強くそう思う	そう思う	どちらでもない	そう思わない	全くそう思わない
人はスポーツを行なう必要があると思う。	強くそう思う	そう思う	どちらでもない	そう思わない	全くそう思わない
スポーツは何をやってもすぐうまくなる。	強くそう思う	そう思う	どちらでもない	そう思わない	全くそう思わない
スポーツは余暇の有効な活用方法だと思う。	強くそう思う	そう思う	どちらでもない	そう思わない	全くそう思わない
スポーツをする時間があるなら他の娯楽をする。	強くそう思う	そう思う	どちらでもない	そう思わない	全くそう思わない
スポーツをすることによって、他の人に自分を知ってもらうことができる。	強くそう思う	そう思う	どちらでもない	そう思わない	全くそう思わない
スポーツを通じてルールを守る精神を育てることができる。	強くそう思う	そう思う	どちらでもない	そう思わない	全くそう思わない
スポーツをすると、他のやりたいことができなくなる。	強くそう思う	そう思う	どちらでもない	そう思わない	全くそう思わない
スポーツは自主的に行なうので、体育の授業は必要ない。	強くそう思う	そう思う	どちらでもない	そう思わない	全くそう思わない
スポーツではリーダシップを発揮できる。	強くそう思う	そう思う	どちらでもない	そう思わない	全くそう思わない
スポーツでは勝ち負けが大切である。	強くそう思う	そう思う	どちらでもない	そう思わない	全くそう思わない
他にお金が必要だからスポーツのためには使えない。	強くそう思う	そう思う	どちらでもない	そう思わない	全くそう思わない
スポーツによって、気分転換を図れる。	強くそう思う	そう思う	どちらでもない	そう思わない	全くそう思わない
教室で行われる授業と比べ、体育の授業は仲間との関わり合いが強いものであると思う。	強くそう思う	そう思う	どちらでもない	そう思わない	全くそう思わない
スポーツはからだに悪いと思う。	強くそう思う	そう思う	どちらでもない	そう思わない	全くそう思わない
時間と場所があればもっとスポーツを行ないたい。	強くそう思う	そう思う	どちらでもない	そう思わない	全くそう思わない

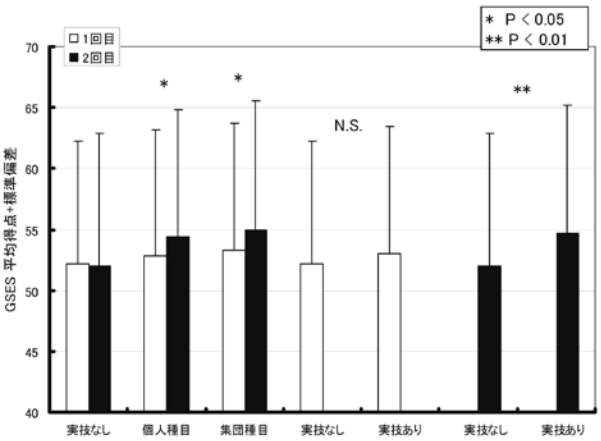


図1　CSESの1回目と2回目の得点および実技履修の有無の比較

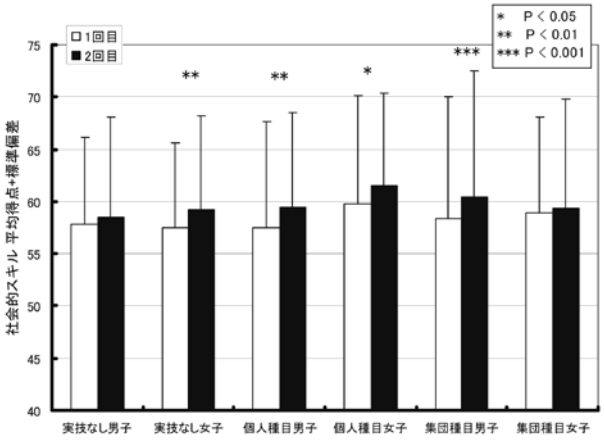


図2　社会的スキルの1回目と2回目の得点の比較

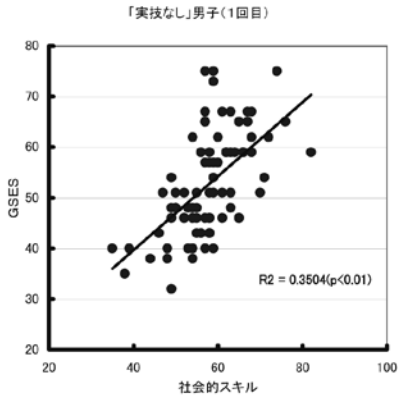


図3　社会的スキルとGSESの関係(実技なし男子1回目)

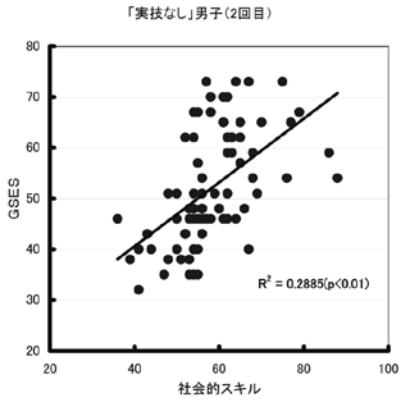


図4　社会的スキルとGSESの関係(実技なし男子2回目)

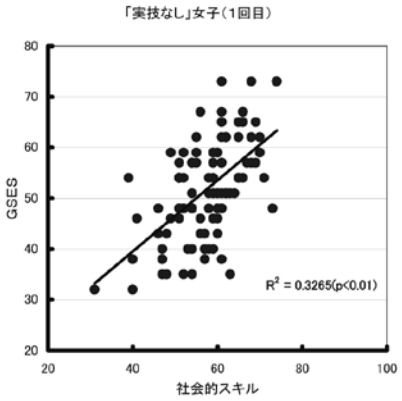


図5　社会的スキルとGSESの関係(実技なし女子1回目)

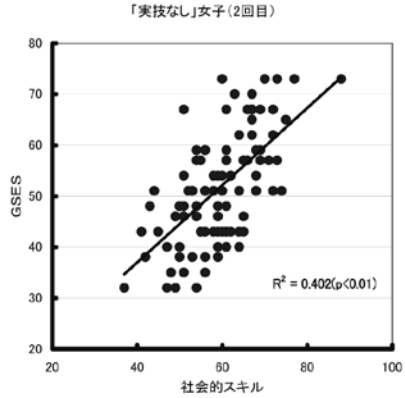


図6　社会的スキルとGSESの関係(実技なし女子2回目)

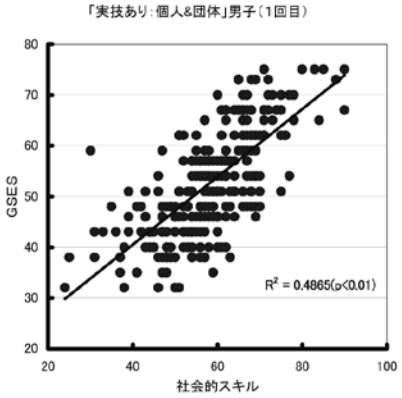


図7　社会的スキルとGSESの関係(実技あり男子1回目)

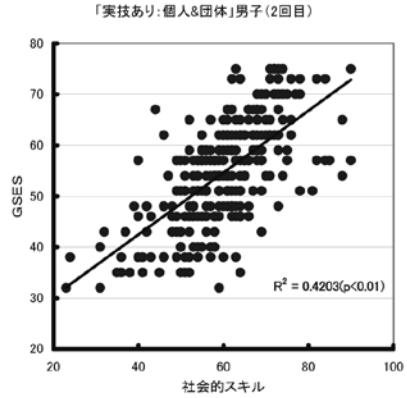


図8　社会的スキルとGSESの関係(実技あり男子2回目)

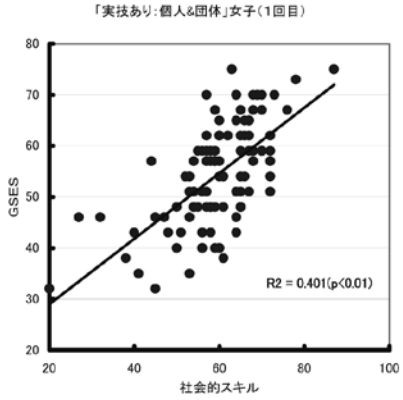


図9　社会的スキルとGSESの関係(実技あり女子1回目)

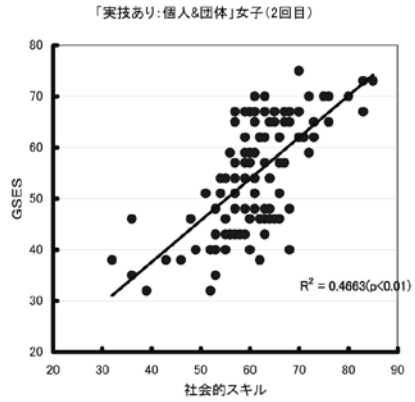


図10　社会的スキルとGSESの関係(実技あり女子2回目)

【報告 2】体育実技履修学生の社会的スキルおよび自己効力感の水準に関する基礎的検討（慶應義塾大学体育研究所紀要 第 52 巻、2013 年）

自己効力感がスポーツや運動実施の鍵になることを指摘した報告は数多くあるが、自己効力感を構成する要素は一様ではなく、体育の実施に関係してその向上を目指す上では更なる検討が必要である。また社会的スキルに関する報告も多いが、やはりスキルを構成する要素が多様であり、詳しく検討することが必要であると考えられる。本研究では慶應義塾大学（以下本塾とする）の学生の傾向は基準値に比較してどうなのか、また大学入学時と卒業時ではその水準に違いがないか、等の基礎的検討を行うことにより、教育を行う上での重要な基礎資料を得ることに焦点をあてた。本研究では、本塾における体育実技履修者を対象に、KISS-18（社会的スキルの指標）および GSES を実施し、特に年齢・学年の差、得点分布の実態、春学期と秋学期の変化の有無に関して基礎的検討を行うことを目的とする。

調査用紙（表 2）は 1）個人プロフィール（学年･性別･生年月日・これまでの身体活動の有無・体育実技履修コマ数）、2）社会的スキルテスト、3）自己効力感テスト、を含む内容とした。上記「報告 1」においては社会的スキルおよび自己効力感が向上したこと、またその向上に体育実技履修が関与する可能性を指摘したが、それ以外の日常生活の中にこのことに寄与する要因があることは否めない。それを考慮すると、2 ヶ月にわたる夏季休業を経た秋学期の開始時および学年末終了時が、春学期と比較してどのように異なるのかについては大変興味深い。そこで、春学期と秋学期を連続している者のデータ、両学期で別の者のデータについて比較を行った。得られたデータ数は春学期 534 名、秋学期 371 名、両学期連続の履修者（計 4 回に回答）は 97 名であった。

図 11-1 ～ 11-3 は、Kiss-18 男子、Kiss-18 女子、GSES 得点について年齢別に比較したものである。Kiss-18 男子では 21 歳が 18 ～ 20 歳に対して有意に高い得点を示し、Kiss-18 女子では over21 が 18 ～ 20 に対して有意に高い得点を示した。GSES では 21 歳と over21 が 18 ～ 20 歳に対して有意に高い得点を示した。同様に学年別に獲得点を比較したのが図 12-1 ～ 12.3 である。Kiss-18 男子では 3 年生が 1, 2, 4 年生に対して有意に高い得点を示し、Kiss-18 女子では 4 年生が 1, 2 年生に対して有意に高い得点を示した。GSES では 1 年生が他の学年に対して有意に低い得点を示し、2 年生は他の上級学年に対して有意に低い得点であった。

4 回の得点を比較したのが図 13-1 ～ 13-3 である。Kiss-18 男子および Kiss-18 女子において春 1 回目が有意に低い傾向が見られた。すなわち春 1 回目に対してその後向上し、維持される傾向が見られた。GSES については春 1 回目が春 2 回目と秋 2 回目に対して低い結果が示された。

本研究より、社会的スキルや自己効力感は経年による経験の影響、さらには体育実技の実施によりが高まり、しかもそれは連続履修によって強められる可能性が示唆された。

表 2　調査用紙

自己評価アンケート　　以下の項目に、記入、または○をつけて、ご回答ください。

学年：　性別：　生年月日：

履修授業：　曜日　時限　科目名（種目名）　年　男・女　西暦　年　月　日

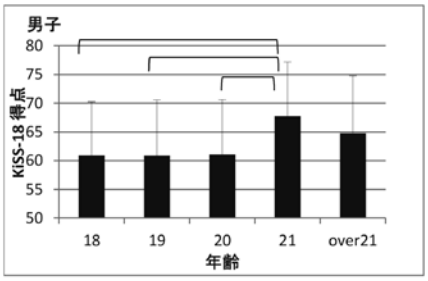
これまで体育の授業以外で身体活動を行っていましたか。　今年度、体育実技の履修数を記入してください。

1. はい　2. いいえ　春学期＿＿コマ　秋学期＿＿コマ

他人と話していて、あまり会話が途切れないほうである。	いつもそうだ	たいていそうだ	どちらともいえない	たいていそうでない	いつもそうでない
他人にやってもらいたいことを、うまく指示することができる。	いつもそうだ	たいていそうだ	どちらともいえない	たいていそうでない	いつもそうでない
他人を助けることを、上手にやれる。	いつもそうだ	たいていそうだ	どちらともいえない	たいていそうでない	いつもそうでない
相手が怒っているときに、うまくなだめることができる。	いつもそうだ	たいていそうだ	どちらともいえない	たいていそうでない	いつもそうでない
知らない人とでも、すぐに会話を始められる。	いつもそうだ	たいていそうだ	どちらともいえない	たいていそうでない	いつもそうでない
まわりの人たちとの間にトラブルが起きても、それを上手に処理できる。	いつもそうだ	たいていそうだ	どちらともいえない	たいていそうでない	いつもそうでない
こわさや恐ろしさを感じたときに、それにうまく対処できる。	いつもそうだ	たいていそうだ	どちらともいえない	たいていそうでない	いつもそうでない
気まずいことがあった相手と、上手に和解できる。	いつもそうだ	たいていそうだ	どちらともいえない	たいていそうでない	いつもそうでない
仕事をするときに、何をどうやったらよいか決められる。	いつもそうだ	たいていそうだ	どちらともいえない	たいていそうでない	いつもそうでない
他人が話しているところに、気軽に参加できる。	いつもそうだ	たいていそうだ	どちらともいえない	たいていそうでない	いつもそうでない
相手から非難されたときにも、それをうまく片付けることができる。	いつもそうだ	たいていそうだ	どちらともいえない	たいていそうでない	いつもそうでない
仕事の上で、どこに問題があるかすぐに見つけることができる。	いつもそうだ	たいていそうだ	どちらともいえない	たいていそうでない	いつもそうでない
自分の感情や気持ちを、素直に表現できる。	いつもそうだ	たいていそうだ	どちらともいえない	たいていそうでない	いつもそうでない
あちこちから矛盾した話が伝わってきても、うまく処理できる。	いつもそうだ	たいていそうだ	どちらともいえない	たいていそうでない	いつもそうでない
初対面の人に、自己紹介が上手にできる。	いつもそうだ	たいていそうだ	どちらともいえない	たいていそうでない	いつもそうでない
何かに失敗したときに、すぐに謝ることができる。	いつもそうだ	たいていそうだ	どちらともいえない	たいていそうでない	いつもそうでない
まわりの人たちが自分とは違った考えをもっていても、うまくやっていける。	いつもそうだ	たいていそうだ	どちらともいえない	たいていそうでない	いつもそうでない
仕事の目標を立てるのに、あまり困難を感じないほうだ。	いつもそうだ	たいていそうだ	どちらともいえない	たいていそうでない	いつもそうでない

何か仕事をするときは、自信を持ってやるほうである。	はい	いいえ
過去に犯した失敗や嫌な経験を思い出して、暗い気持ちになることがよくある。	はい	いいえ
友人より優れた能力がある。	はい	いいえ
仕事を終えた後、失敗したと感じることのほうが多い。	はい	いいえ
人と比べて心配性なほうである。	はい	いいえ
何かを決めるとき、迷わずに決定するほうである。	はい	いいえ
何かを決めるとき、うまくいかないのではないかと不安になることが多い。	はい	いいえ
引っ込み思案なほうだと思う。	はい	いいえ
人より記憶力がよいほうである。	はい	いいえ
結果の見通しがつかない仕事でも、積極的に取り組んでいくほうだと思う。	はい	いいえ
どうやったらよいか決心がつかずに仕事にとりかかれないことがよくある。	はい	いいえ
友人よりも特に優れた知識を持っている分野がある。	はい	いいえ
どんなことでも積極的にこなすほうである。	はい	いいえ
小さな失敗でも人よりずっと気にするほうである。	はい	いいえ
積極的に活動するのは、苦手なほうである。	はい	いいえ
世の中に貢献できる力があると思う。	はい	いいえ

ご協力ありがとうございました。



11-1　KiSS-18(男子)の年齢別得点(春学期1回目)
実線　p<0.01

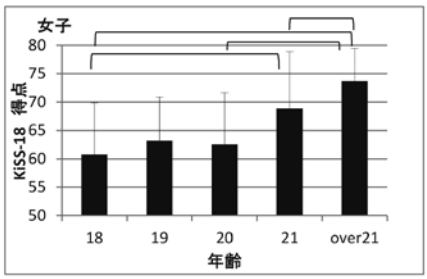


図11-2 KiSS-18(女子)の年齢別得点(春学期1回目)
実線　p<0.01

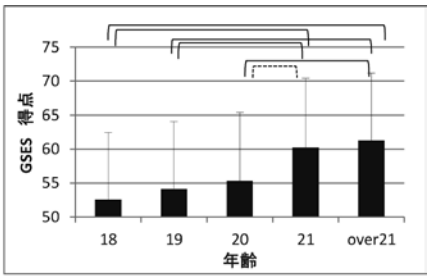


図11-3　GSESの年齢別得点(春学期1回目)
実線　p<0.01　点線　p<0.05

図 11

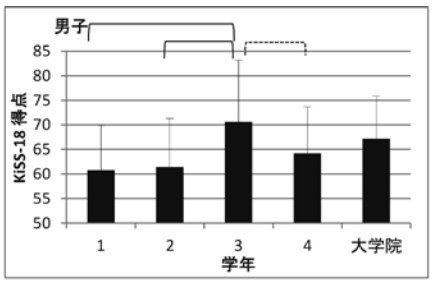


図12-1　KiSS-18(男子)の学年別得点(春学期1回目)
実線　p<0.01　点線　p<0.05

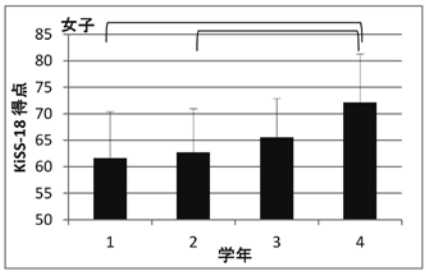


図12-2 KiSS-18(女子)の学年別得点(春学期1回目)
実線　p<0.01

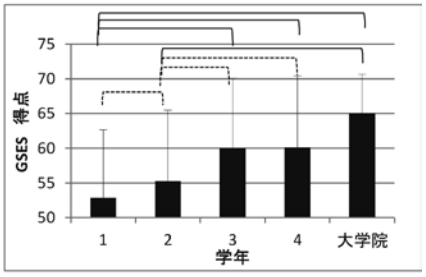


図12-3　GSESの学年別得点(春学期1回目)
実線　p<0.01　点線　p<0.05

図 12

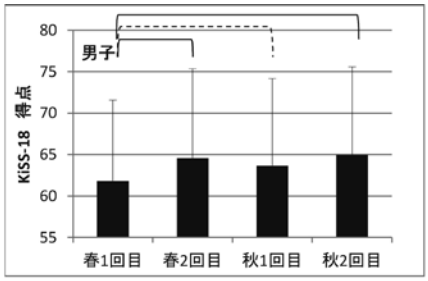


図13-1
KiSS-18(男子)の4回の平均値(回答者のべ)
実線　p<0.01　点線　p<0.05

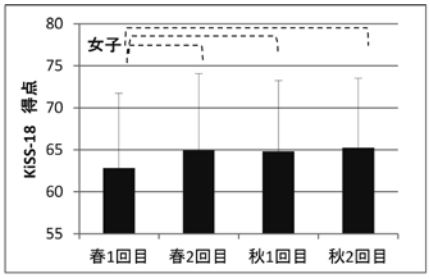


図13-2
KiSS-18(女子)の4回の平均値(回答者のべ)
点線　p<0.05

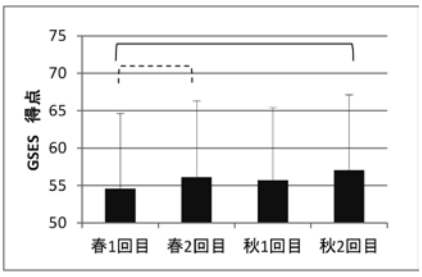


図13-3
GSESの4回の平均値(回答者のべ)
実線　p<0.01　点線　p<0.05

図 13

【報告 3】学生の社会的スキル向上を目指した体育実技実践の試み（慶應義塾大学体育研究所紀要 第 52 巻、2013 年）

上記「報告 1」により体育実技の履修により学生の自己効力感（GSES）が向上する可能性が示唆されたが、社会的スキルについては全体に学期終了時点で得点が上昇する傾向が認められたものの、体育実技履修の有無による有意差は認められなかった。そこで本研究においては大学における体育実技実施の効果に関して対人関係能力の向上を意図し、コミュニケーションの促進を図るプログラムを取り入れることによる社会的スキル及び自己効力感の変化を検討することを目的とする。

調査用紙は上記「報告 2」と同一のもの（表 2）であり、調査は春学期の 4 月下旬および 6 月下旬から 7 月上旬（春学期の最終授業付近）の 2 回実施した。調査を実施した授業はサッカー、フットサル、バスケットボール、テニス、バレーボール、卓球、エアロビクス、ボディーメイクエクササイズ、体力ＵＰコース、フライングディスク、ニュースポーツであった。このうち本研究グループ構成員の担当するサッカー、フットサル、バスケットボール、テニスにおいて社会的スキル向上を目指した授業プログラムを実施した。これらのクラスをプログラム群とし、それ以外のクラスを一般群として比較した。

プログラム群ではこれまで実施してきた授業展開の中に、コミュニケーション作りやグループワークを意

識した内容を毎時間加え、社会的スキルの向上を意図して授業を展開した。授業期間を初期、中盤、終盤と3段階に分割し目標やテーマを以下のように設定した。

初期：アイスブレイクを取り入れたウォーミングアップ

「クラス全員の名前と顔を覚えよう」「仲間を知ろう・自分を披露しよう」

中盤：グループワークを課題として練習する

「リーダーシップ・メンバーシップを共に発揮しよう」

「多様な役割を体験しよう」

終盤：クラス全体の相互作用（リーグ戦・固定チーム）を利用したプログラム

「クラス全体の活性化・盛り上がりを創出する」

欠損値が無く、かつ生年月日による学期の最初と終了時2回の合致が得られたデータを有効回答とし、得られたデータ数は534名であった。その内18－20歳は454名、プログラム群が131名（男子117名、女子14名）、一般群が323名（男子167名、女子156名）であった。この454名を分析対象とした。

図14-1～14-3は、それぞれKiss-18男子、Kiss-18女子、GSESの1回目の得点について、プログラム群と一般群を比較したものである。いずれも両群間に有意差は見られなかった。図15-1～15-3は1回目と2回目の得点についてプログラム群と一般群を比較したものであるが、Kiss-18男子ではプログラム群の1回目に対し2回目が有意に向上していた。一方一般群の1回目と2回目の間に有意差は見られなかった。Kiss-18女子では一般群のみ、2回目が1回目に対して有意に向上した。GSESについては男子のKiss-18と同様にプログラム群の1回目と2回目の間に有意差が見られた。

図16-1～16-3はプログラム群の1回目の得点と2回目の増加得点について、それぞれKiss-18男子、Kiss-18女子、GSES別に示したものである。さらに図17-1～17-3は一般群について同様に1回目の得点と2回目の増加得点について3つのテスト別に示したものである。図18-1～18-3は1回目の得点下位25%（以下下位群）と上位25%（以下上位群）の2回目の増加得点の平均値について、Kiss-18男子、Kiss-18女子、GSES別に示したものである。Kiss-18男子においてプログラム群は一般群に対して2回目の増加得点が大きく、また下位群の方が上位群に対して同じく増加得点が大きかった。一方Kiss-18女子、GSESにおいてはプログラム群と一般群の有意な差は見られなかった。プログラム群において1回目のKiss-18得点が低い者が2回目に顕著に向上したことから、アイスブレイクやグループワークによるクラス内コミュニケーションの促進のための活動は、あらかじめそうしたスキルの低かった者に効果的であったと考えられる。一方GSESの場合にはプログラムの介入に関わらず1回目の得点が低かった者が2回目で有意に向上した。

体育実技が学生のメンタルヘルスの維持や積極的な社会参加に寄与できること、また授業内容を工夫することによってその効果をより高められることが示唆された。

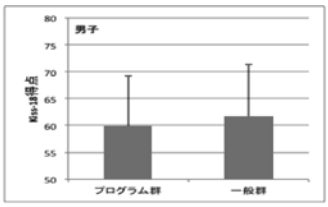


図14-1　プログラムの有無による1回目の比較
Kiss-18男子（18-20歳）
有意差なし

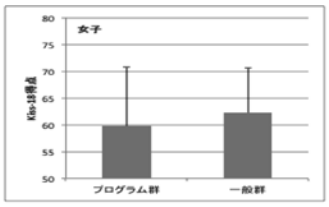


図14-2　プログラムの有無による1回目の比較
Kiss-18女子（18-20歳）
有意差なし

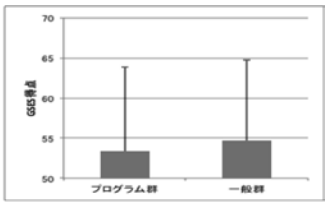


図14-3　プログラムの有無による1回目の比較
GSES（18-20歳）
有意差なし

図 14

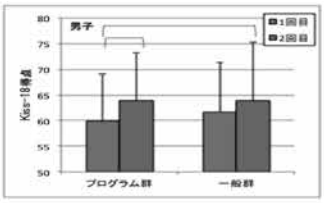


図15-1　プログラムの有無による1、2回目の比較
Kiss-18男子（18-20歳）
実線　p<0.01

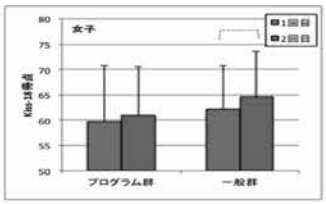


図15-2　プログラムの有無による1、2回目の比較
Kiss-18女子（18-20歳）
点線　p<0.05

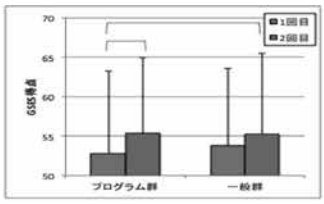


図15-3　プログラムの有無による1、2回目の比較
GSES（18-20歳）
実線　p<0.01

図 15

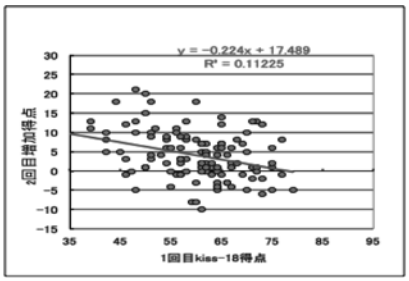


図16-1　1回目の得点と2回目の増加得点の関係
プログラム群のKiss-18男子(p<0.05で回帰直線の傾きが負である)

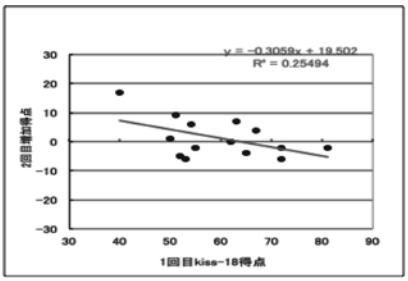


図16-2　1回目の得点と2回目の増加得点の関係
プログラム群のKiss-18女子

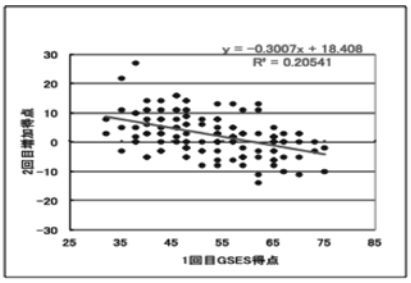


図16-3　1回目の得点と2回目の増加得点の関係
プログラム群のGSES(p<0.05で回帰直線の傾きが負である)

図 16

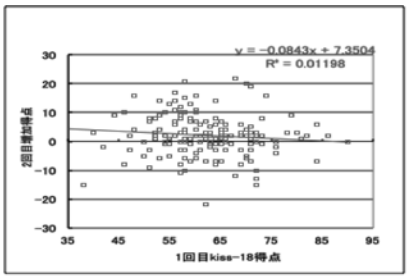


図17-1　1回目の得点と2回目の増加得点の関係
一般群のKiss-18男子

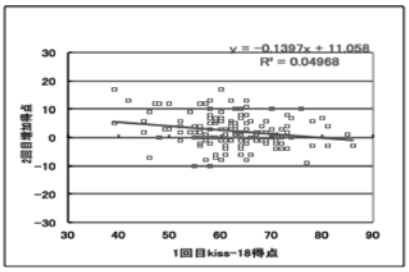


図17-2　1回目の得点と2回目の増加得点の関係
プログラム群のKiss-18女子(p<0.05で回帰直線の傾きが負である)

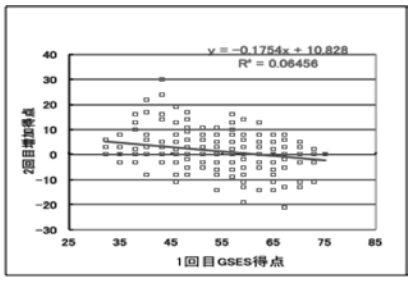


図17-3　1回目の得点と2回目の増加得点の関係
一般群のGSES(p<0.05で回帰直線の傾きが負である)

図 17

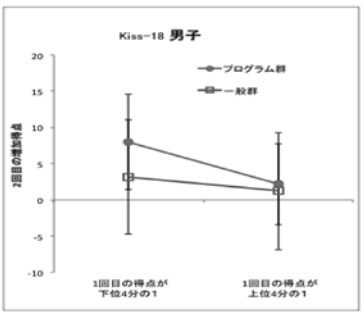


図18－１　1回目1回目の得点が下位4分の1に属した群と、
上位4分の1に属した群との間の比較および、
プログラム群と一般群との間の比較。
p<0.05でプログラム群と一般群との間に有意差有、
p<0.01で上位群と下位群の間に有意差有
（Kiss-18男子）

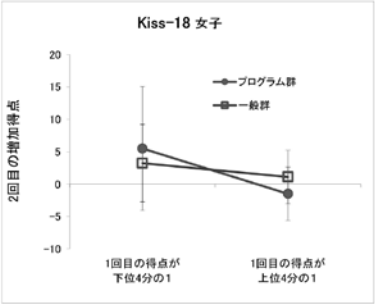


図18－２　1回目の得点が下位4分の1に属する群と
上位4分の1に属した群との間の比較および、
プログラム群と一般群との間の比較。
プログラム群と一般群との間には有意差無し、
p<0.05で上位群と下位群の間に有意差有
（Kiss18-女子）

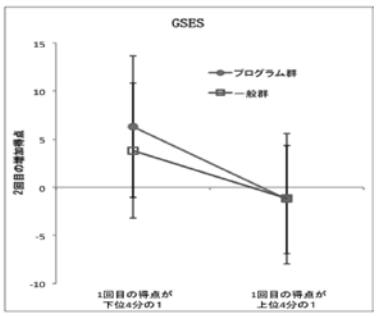


図18－３　1回目の得点が下位4分の1に属する群と
上位4分の1に属した群との間の比較および、
プログラム群と一般群との間の比較。
プログラム群と一般群との間には有意差無し、
p<0.01で上位群と下位群の間に有意差有
（GSES）

図 18

【報告 4】体育実技履修学生の社会的スキル及び自己効力感の変容に関する検討――授業形態の違いによる比較――（慶應義塾大学体育研究所紀要 第 54 巻、2015 年）

慶應義塾大学では体育実技の一環として週 1 回実施の授業（以下ウィークリースポーツ）と夏季または春季休業中に 7 日間または 3 泊 4 日程度の合宿形式で行う集中授業（以下シーズンスポーツ）を実施している。本研究ではシーズンスポーツ受講者を対象に社会的スキル及び自己効力感の変容を検討し、以前収集した講義科目、ウィークリースポーツの得点との比較をすることを目的とする。

調査用紙は上記「報告 2」と同一であった（表 2）。シーズンスポーツ各種目の開講式前および授業終了後解散前の計 2 回実施した。各種目の概要を表 3 に示す。欠損値が無く生年月日による授業前と授業後 2 回の合致が得られたデータを有効回答とし、得られたデータ数は 130 名であった。

図 19 は調査時期及びシーズンスポーツの種目による Kiss-18 得点の変化を比較したものである。2 要因分散分析の結果、種目の違いに関わらず Kiss-18 得点が 1 回目に対して 2 回目に有意に向上したことが明らかになった。図 20 は同じく GSES 得点の変化を比較したものである。Kiss-18 と同様、種目の違いに関わらず GSES 得点が 1 回目に対して 2 回目が有意に向上したことが明らかとなった。種目の内容よりも合宿生活がこれらのスコア向上に寄与した可能性がある。

次に授業形態の違いによる得点変化を比較するために、上記「報告 1」における講義科目受講者のデータ（N=124）および「報告 3」におけるウィークリースポーツ受講者データ（N=534）を使用し、シーズンスポーツ、ウィークリースポーツ、および講義科目の比較を試みた。Kiss-18 においても GSES においても、講義科目では 1 回目と 2 回目の間に有意差は見られなかったが、シーズンスポーツとウィークリースポーツにおいては有意な差が見られた。Kiss-18 の 1 回目も 2 回目も、講義科目とウィークリースポーツの間、および講義科目とシーズンスポーツの間に有意差が認められた（図 21）。講義科目受講者と実技科目受講者の間にもともと差があったことを示唆している。GSES については 2 回目において講義科目とウィークリースポーツの間、及び講義科目とシーズンスポーツの間に有意差が認められた（図 22）。これらのことから講義科目に比べてウィークリースポーツやシーズンスポーツといった実技科目が社会的スキルと自己効力感を向上させていることが示唆された。

シーズンスポーツの各種目では、授業担当者の他に体育会 OB や現役部員等の補助スタッフが配置され、小集団による実技の指導が中心となっている。例えば、スケートでは技術レベル別に班を構成し、スタッフが指導に当たる。また、チーム対抗でアイスホッケーのゲームや氷上運動会を実施する。馬術では 1 頭の馬に 1 名のスタッフと 4 名の受講生が割り当てられ、馬上での技術向上とともに、馬の世話や厩舎作業などの体験型プログラムを通して総合的な馬の管理を体験する。このような、小集団による体験学習が相互のコミュニケーションを促進し、合宿による受講生の共同生活が社会的スキルの向上に寄与していることが考えられる。

またシーズンスポーツは、非日常的な環境の中で、その種目に特有な技術を習得しながら、課題を達成する体験が多く含まれている。早朝から歩き始めて目的とする山頂を目指す登山や、自然現象である風を読み、セールでとらえて進むヨットは、自然の素晴らしさと厳しさを体験しながら達成する体験を味わうことができる。また、ロッククライミングやカヤック、マウンテンバイク等の種目を選択して体験するアウトドアレクリエーションでは、挑戦する活動を受講者のニーズや意欲で選択するため、より達成感を得やすい側面がある。スキーにおける技術習得の場面で同じ班の仲間が滑走する様子を見ることや、指導者や仲間からの励ましを得ることで代理体験や言語的説得の機会を得ることができる。自然の中での合宿生活という体験は、自然とのふれあいや仲間とのふれあいを通して受講者に強い情動的喚起を経験することができるであろう。このような経験がシーズンスポーツ履修者の自己効力感を高める要因となっていると考えられる

本研究では授業前及び授業後の 2 回しか調査していないため、効果が持続しているかどうかを検討することができなかった。また自由記述欄を設けていないため、質的データを収集していない。今後はこれらの課題を考慮し、行動観察やインタビューなど質的データも収集しながら検討を続けていくことが必要であろう。

表３　シーズンスポーツ種目の概要

科目名	実施期間	実施場所	主な授業内容	人数
マリンスポーツアクティビティ	2013年8月2日～8月5日	千葉県館山市塩見海岸	透明度の高い大海原を利用して水泳、シュノーケリング、シーカヤック等のマリンスポーツを行う	19
山岳	2013年8月2日～8月5日	長野県北アルプス周辺	北アルプスを舞台にした縦走形式のトレッキング（山小屋泊）を行う	7
馬術	2013年8月3日～8月6日	長野県望月馬事公苑	馬術技術の習得を目指すとともに、馬の世話・厩舎作業など、馬と関近で接することのできる体験型プログラムを通して、総合的な馬の管理を体得する	17
ヨット	2013年8月2日～8月5日	神奈川県葉山海岸	小型艇（ディンギー）、大型艇（クルーザー）を使用したセーリング実習を通して、自然の素晴らしさと厳しさを体験し、理解する	11
アウトドアレクリエーション	2013年8月2日～8月6日	長野県八ヶ岳周辺	周辺の豊かな自然環境を利用したさまざまなプログラム（ハイキング、カヤック、ロッククライミング等）を通して、自然環境の理解、各活動に関する知識と技術の習得、人間関係の理解を図る	21
スキー	2014年2月8日～11日	長野県志賀高原	合宿形式のスキー実習を通じ、雪山での自然体験と集団生活・グループ活動を体験するとともに、個人の技術的課題を認識するとともに、設定された達成目標をクリアするための努力実践をする	39
スケート	2014年2月4日～7日	長野県軽井沢町風越公園アイスアリーナ	アイススケート（スピード、フィギュア、アイスホッケー）に関する知識及び技術を習得するとともに、合宿生活の経験及び他学部の仲間との懇親を図る	18

【総括】

これら４つの論文から「体育実技授業の履修により、社会的スキルや自己効力感を高めることが期待される」と考えることができる。一般的に体育実技は体力や技術を高めることが期待されてきたと考えられるが、実際にはそれらに加え、社会的スキルや自己効力感という、生きていくうえで非常に重要な能力を高める可能性が期待できることが明らかとなった。

本研究においては「体育実技の中のどのプログラムが社会的スキルや自己効力感を高めることに貢献したのか」「体育実技の履修によって向上した社会的スキルや自己効力感はその後、維持または向上するのか、それとも履修の終了に伴って下落してしまうのか」といったことに関しては明確にすることができなかった。今後の課題としたい。

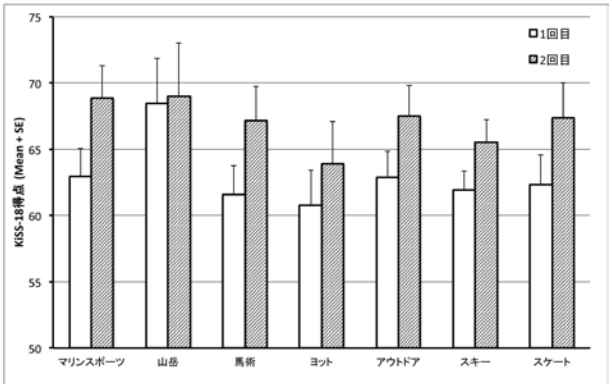


図１９　シーズンスポーツ種目別のKiSS18得点の変化

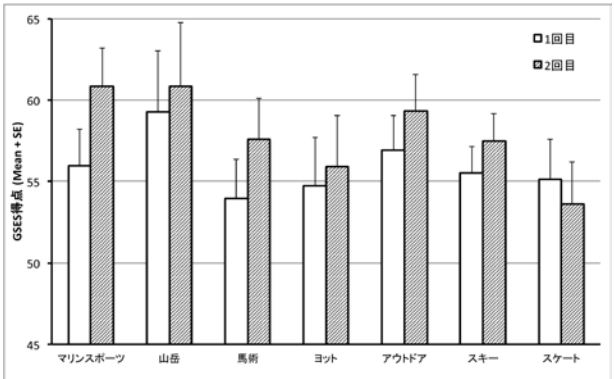


図２０　シーズンスポーツ種目別のGSES得点の変化

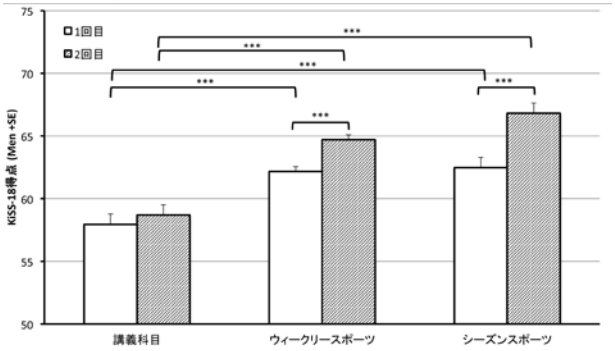


図２１　授業形態の違い（講義，ウィークリー，シーズン）によるKiSS-18得点の変化

***p<.001 **p<.01

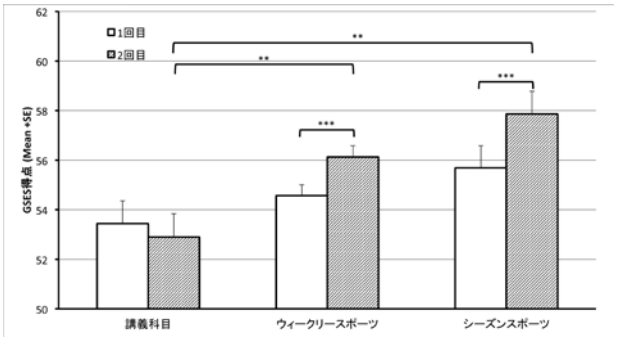


図２２　授業形態の違い（講義，ウィークリー，シーズン）によるGSES得点の変化

***p<.001 **p<.01

コアテーマ①　FD 実践としての体育授業プログラムの在り方（その 2）

「大学体育において教員は履修者の運動・スポーツに対する内発的な動機づけに貢献するか？
――大学体育における動機づけ雰囲気の検討――」

班長：山内賢　班員：永田直也・佐々木玲子・加藤大仁・近藤明彦（体育研究所）

はじめに

大学における体育科目担当教員は、履修者が更に運動やスポーツ活動に参加したくなるような働きかけができているのか。もしかしたら教員の指導は、履修者の運動やスポーツ活動への参加を、体育授業で途切れさせていないか。本班は、平成 25 年度より、上記の課題に対する検証に取り組んでいる。本報告書では、平成 26 年度までのプロジェクト進捗状況を報告し、次年度以降に残された課題を明確にする。

大学における教養としての体育（以下、教養体育とする）において習得が期待されることのひとつに「運動やスポーツ活動を継続する態度」がある。継続的な運動やスポーツ活動は、がんや循環器疾患などの非感染性疾患のリスク低下（World Health Organization, 2010）や認知機能の向上（Hillman et al., 2008）などの効果を得ることができる。一方、運動やスポーツ活動の減少は、体力の低下や健康度の悪化のみならず、メンタルヘルスの悪化やコミュニケーション力の低下にも関連している（橋本 , 2012）。従って、生涯にわたって運動やスポーツ活動を継続することは、質の高い生活の基盤を支える重要な要因と考えられる。運動やスポーツ活動の重要性が示される中で教養体育は、履修者が教育機関において受ける最後の体育授業となる可能性が高く、運動やスポーツ活動を継続する態度を養う最後の機会かもしれない。また、単なる運動やスポーツ活動の実践の場に留まらず、最新の研究による知見やスポーツ文化を知ることができるなど、「知」を獲得する場としても重要な役割を持っていることは明白であろう。これらのことから教養体育は、生涯にわたって運動やスポーツ活動を継続する態度を習得するために重要な役割を果たしている。

運動やスポーツ活動の参加・継続には、運動やスポーツに対する内発的動機づけが良い影響を与えている（藤田・杉原 , 2007）。運動やスポーツに対する内発的動機づけとは、運動やスポーツ活動を「医者が薦めるから」や「健康のため」といった他の目的を達成するためではなく、「運動がしたい」や「スポーツが楽しい」などといったそれ自体を目的とすることである。この内発的動機づけは、運動やスポーツ実施中の目標を上達することや新しいスキルを獲得することとし、努力することを評価することで良い影響をもたらしている（Ames, 1992）。これらは熟達目標と呼ばれる。また、ともに運動やスポーツをする仲間が熟達目標を共有すること、すなわち集団が熟達志向的雰囲気を持つことによって、内発的動機づけが高まる（Gutiérrez et al., 2010）。そのため、体育において履修者を更なる運動やスポーツ活動へ促すためには、授業の雰囲気を熟達志向的雰囲気にすることが有効であると考えられる。一方、集団が他者との優劣や勝敗を重視する成績目標を持つ雰囲気（成績志向的雰囲気）である場合、内発的動機づけに負の影響を及ぼす。これら集団が持つ目標のことを「動機づけ雰囲気」と呼ぶ。また、動機づけ雰囲気は、指導者の意図的な指導によって操作することが可能であることが示されている（Papaioannou, 1998）。

上記の知見から、履修者の運動やスポーツ活動に対する内発的動機づけを高めるためには、教員の指導が重要な役割を果たしていると考えられる。しかし、従来の教養体育における授業研究では、履修者の動機づけに関連した研究はわずかである。教養体育が学生の卒業後の運動やスポーツ活動に大きな役割を担っているのであれば、その授業によって履修者の動機づけがどのように変化するか明らかにし、動機づけを高める指導となるよう改善・向上を図るべきである。そこで本研究プロジェクトでは、動機づけ雰囲気に着目し、学生が大学卒業後も運動やスポーツ活動を継続するよ

うに動機づける指導方法を開発することを目的とし検証を行った。

平成 26 年度の研究課題

課題 1. 動機づけの状態と動機づけ雰囲気を測定する尺度の検証

運動やスポーツ活動に対する動機づけを測定する尺度は、松本ほか（2003）が自己決定理論に基づく運動継続のための動機づけ尺度（以下､動機づけ尺度とする）を作成し、民間運動施設を利用する成人に対して実施している。自己決定理論とは、内発的動機づけから外発的動機づけ間を内発的調整、統合的調整、同一視的調整、取り入れ的調整、外的調整、無調整の連続した6段階とし、これらの中で変化するものと捉えた理論である（Deci and Ryan, 2002）。この動機づけ尺度では、6段階のうち統合的調整を除いた5段階で動機づけを評価した。

体育授業における動機づけ雰囲気を測定する尺度は、磯貝ほか（2008）が小・中学生を対象に作成した動機づけ雰囲気測定尺度（以下､動機づけ雰囲気尺度とする）を使用した。この動機づけ雰囲気尺度は、熟達志向的雰囲気・成績志向的雰囲気の2因子に分けられ、それぞれ教師の学習志向・学習志向・協同・公平さ、教師の成績志向・成績（競争）志向・失敗の恐れの下位因子で構成される。各下位因子は、質問4項目で成り立っており、回答には動機づけ尺度と同様に5段階のリッカート法が採用されている。

これらの尺度は、それぞれの研究対象に対して信頼性が確保されているが、大学生や教養体育においては検証がなされていない。本研究プロジェクトで使用するためには、大学生や教養体育を対象に信頼性を検証する必要がある。

課題 2. 教養体育が履修者の運動やスポーツ活動に対する動機づけに及ぼす影響の検証

従来の教養体育に関する研究は、効果的な技能習得や体力向上を図るための指導法に関する研究、入学時または授業前後における学生の体力に関する研究、ライフスキルなどの心理的側面に関する研究が行われてきた。しかし、授業が履修者の運動やスポーツに対する動機づけに及ぼす影響についての報告は見当たらない。現在の授業における指導が、履修者の動機づけに及ぼす影響を明らかにすることは、より効果的に動機づけを高める指導法の開発の第一歩として重要である。

課題 3. 教養体育における動機づけ雰囲気が、履修者の運動やスポーツ活動に対する動機づけに及ぼす影響の検証

従来の研究では、体育授業における動機づけ雰囲気と運動やスポーツ活動に対する動機づけの関係について、小・中学校において検証が行われてきた。小学校においては、技能の向上や勝敗の意味を理解することにより、熟達志向性の維持、成績志向性の低下が認められた（松田ほか , 2006）。また、中学校においては、熟達志向的雰囲気が生徒の学習意欲に影響することが示されている（中須賀ほか , 2012）。一方､教養体育では、動機づけ雰囲気に関する検討は皆無であり、動機づけに関連する研究もわずかである。上記、課題2において教養体育が動機づけに及ぼす影響を示した上で、課題3では動機づけ雰囲気がどのような影響を及ぼしたか検証を行う。

課題 1. 動機づけの状態と動機づけ雰囲気を測定する尺度の検証

1. 方法

1）対象者

調査は、選択科目である体育実技Aの各種目を履修した総数468名（18-25歳）に対して実施した。対象者が履修した種目は、バスケットボール、ハンドボール、エアロビクス、フィットネストレーニング、ジョギング、ウォーキングであった。対象者は、調査に先立ち、研究の目的、参加の任意性と撤回の自由、個人情報の保護等についての説明を受け、書面にて調査の参加に同意した。

2）調査紙

本調査では、次の2尺度を用い、教養体育履修者における信頼性を検討した。対象者の運動参加・継続に対する動機づけを測定する尺度には、松本ほか（2003）が作成した動機づけ尺度を使用した。

対象者が認知した授業の動機づけ雰囲気を測定する尺度には、磯貝ほか（2008）が小・中学生を対象に作成した動機づけ雰囲気測定尺度（以下、動機づけ雰囲気尺度とする）を使用した。動機づけ雰囲気尺度は小・中学生を対象に質問項目が設定されていたため、本研究では、教養体育に適した言葉遣いに変更した。

対象者は、第1回目授業日に動機づけ尺度を実施し、最終授業日に動機づけ雰囲気尺度を実施した。

3）分析方法

分析に先立ち、回答に欠損のある対象者を分析から除外した。その結果、動機づけ尺度の分析では351名（有効回答率75.0%）を、動機づけ雰囲気尺度の分析では227名（有効回答率48.5%）を対象とした。分析は、IBM SPSS22.0を用い、主因子法、プロマックス回転による確認的因子分析を行った。分析では、因子負荷量が.45以上となることを条件とした。また因子間の関係性については、Pearsonの積率相関係数を算出した。

2. 結果

1）自己決定理論に基づく運動継続のための動機づけ尺度

因子分析の結果、先行研究と同様に5因子に分類された。因子分析の結果は、表1で示した。尺度信頼性を検証するためクロンバックの α 係数を算出した結果、すべての因子において値が.70を越えており、尺度の内的整合性は高いと判断した。

2）動機づけ雰囲気測定尺度

因子分析の結果、5因子20項目に分類された。しかし、磯貝ら（2008）の研究では、上位因子が2、下位因子が7に分類されたことから、因子数を2に固定して繰り返し分析を実施した。項目数を整理した結果、2因子12項目を決定した（以下、この尺度を大学生用動機づけ雰囲気尺度とする）。因子分析の結果は、表2で示した。信頼性検証の結果、すべての因子において値が.70を越えていたことから、尺度の内的整合性は高いと判断した。

表1　教養体育において実施した動機づけ尺度の因子分析結果

項目	因子負荷量 F1	F2	F3	F4	F5
F1 内発的調整（α＝.76）					
運動すること自体が楽しいから	0.79	−0.05	−0.10	−0.05	−0.02
運動を習得する喜びがあるから	0.66	0.08	−0.01	−0.01	0.02
運動は自分を満足させる活動だから	0.63	0.10	0.01	−0.08	0.01
運動中はそれだけに没頭できるから	0.60	−0.09	0.06	0.17	−0.02
F2 同一視的調整（α＝.78）					
運動は良いと思うので行うべきだと思うから	−0.09	0.62	0.02	0.05	−0.04
運動することが自分自身を高めるためによい方法だと思うから	0.07	0.59	−0.04	0.04	0.08
運動することが私にとって重要だと思うから	0.07	0.55	0.02	0.02	−0.05
運動することで自分が良くなっていくと感じることができるから	0.09	0.52	0.12	−0.01	−0.02
F3 取り入れ的調整（α＝.71）					
運動しないと自分を悪く感じるから	−0.02	−0.02	0.82	−0.05	−0.06
運動しないと罪悪感を感じるから	−0.04	−0.02	0.70	0.01	0.04
運動を続けられなかったら駄目な人間だと思うから	−0.04	0.03	0.63	0.02	0.01
運動しないと堕落していくような気がするから	0.08	0.18	0.54	−0.04	0.02
F4 外的調整（α＝.76）					
周りの人（家族、友人、医師等）が運動を取り入れるべきだと言うから	−0.12	0.16	−0.16	0.82	−0.01
私が運動しないと周りの人（家族、友人、医師等）がよく思わないから	0.02	−0.18	0.24	0.68	0.01
私が運動することで周りの人（家族、友人、医師等）が満足するから	0.14	0.05	0.00	0.63	0.02
F5 無調整（α＝.85）					
運動する理由はわからない	−0.01	0.03	0.00	−0.08	0.91
なぜ運動しているか分からない	0.00	−0.03	0.06	0.02	0.82
運動する理由は何もない	−0.01	−0.01	−0.06	0.08	0.70

		F1	F2	F3	F4	F5
因子間相関	*F1*	−				
	F2	0.64	−			
	F3	0.33	0.47	−		
	F4	0.12	0.16	0.50	−	
	F5	−0.23	−0.37	−0.02	0.19	−

課題 2. 教養体育が履修者の運動やスポーツ活動に対する動機づけに及ぼす影響の検証

1. 方法

1）対象者

調査は、選択科目である体育実技 A の各種目を履修した総数 426 名（18-25 歳）に対して実施した。対象者が履修した種目は、バスケットボール、ハンドボール、エアロビクス、フィットネストレーニング、ジョギング、ウォーキングであった。対象者は、調査に先立ち、研究の目的、参加の任意性と撤回の自由、個人情報の保護等についての説明を受け、書面にて調査の参加に同意した。

2）調査紙

本調査では、動機づけ尺度（松本ほか , 2003）を用いた。対象者は、第 1 回目授業日と最終授業日に動機づけ尺度を実施し、最終授業日に大学生用動機づけ雰囲気尺度を実施した。

3）分析方法

分析に先立ち、回答に欠損のある対象者を分析から除外した。その結果、141 名（有効回答率 33.1%）を対象とした。分析は、IBM SPSS22.0 を用い、対象者の第 1 回目授業日と最終回授業日の動機づけ尺度の得点を対応ある t 検定によって比較した。統計的有意確立は、5% 水準と設定した。

2. 結果

第 1 回目と最終授業日において測定した動機づけ尺度の平均得点、標準偏差、t 値、効果量 r は、表 3 に示した。比較した結果、外的調整と無調整において有意な差が認められた。

課題 3. 教養体育における動機づけ雰囲気が、履修者の運動やスポーツ活動に対する動機づけに及ぼす影響の検証

1. 方法

調査は、課題 2 の調査と同時に実施した。調査対象ならびに有効回答数は、課題 2 と同じである。

表 2　教養体育において実施した動機づけ雰囲気尺度の因子分析結果

項目	因子負荷量 F1	因子負荷量 F2
F1 熟達志向的雰囲気（α＝.82）		
体育の学習では、クラスのみんなが協力しています	0.792	
このクラスでは、みんながうまくなるように、お互いに助け合っています	0.753	
何かを決めるとき、クラスやチームのみんなが意見を言います	0.615	
結果が悪くても、頑張ったり、努力したりする人がみんなから大切にされます	0.609	
教員は、記録や結果が悪くても、頑張ったり、努力したりする人を褒めます。	0.603	
運動ができない人がいても、みんなが励ましてくれます	0.580	
F2 成績志向的雰囲気（α＝.87）		
教員は、記録や結果のことばかり気にします		0.793
体育の学習で、他の人と同じようにできないことは、とても恥ずかしいことだと思われています		0.761
体育の学習で失敗すると友達からバカにされるので、みんなびくびくしています		0.729
体育では、勝敗や記録だけが成績になります		0.712
体育の学習では、運動が他の人よりできるかどうかが大切だと思われています		0.704
教員は、良い記録や結果を出した人ばかりを褒めます		0.680
因子間相関	*F1*	*F2*
F1	–	
F2	0.83	–

表 3　第 1 回授業日と最終回授業日において実施した動機づけ尺度得点

	第1回 *M*	第1回 *SD*	最終回 *M*	最終回 *SD*	*t*	*r*	有意差
内発的調整	17.28	2.55	17.36	2.38	−0.46	0.04	
同一視的調整	17.26	2.02	17.44	2.20	−1.14	0.10	
取り入れ的調整	12.13	3.72	12.42	3.84	−1.16	0.10	
外的調整	6.69	3.04	7.20	3.25	−2.00	0.17	*
無調整	5.72	2.55	6.29	3.31	−2.21	0.18	*

調査紙は、動機づけ雰囲気を測定する尺度として、課題１において検証した大学生用動機づけ雰囲気尺度を使用した。対象者は、最終授業日に大学生用動機づけ雰囲気尺度を実施した。

分析は、IBM AMOS を用いて、第１回目授業日と最終回授業日の動機づけ尺度と大学生用動機づけ雰囲気尺度の結果との関係を共分散構造分析によって検討した。統計的有意確立は、5% 水準と設定した。

2. 結果

1）授業における動機づけ雰囲気

最終授業日において測定した動機づけ雰囲気尺度の得点は、熟達志向的雰囲気が 23.3±4.2、成績志向的雰囲気が 10.8±4.5 であった。

2）授業前後における運動継続のための動機づけと動機づけ雰囲気

動機づけ尺度と動機づけ雰囲気の関係についての分析では、動機づけの因子ごとに動機づけ雰囲気との関係を検討した。動機づけの各因子における共分散構造解析の図は、図１に示した。内発的調整においては、第１回得点から最終回得点、第１回得点から熟達志向的雰囲気を媒介して最終回得点へ有意なパスが引かれた。同一視的調整においては、第１回得点から最終回得点、第１回得点から熟達志向的雰囲気を媒介して最終回得点へ有意なパスが引かれた。取り入れ的調整においては、第１回得点から最終回得点、成績志向的雰囲気から最終回得点へ有意なパスが引かれた。外的調整においては、第１回得点から最終回得点、第１回得点から成績志向的雰囲気を媒介して最終回得点へ有意なパスが引かれた。無調整においては、第１回得点から最終回得点、成績志向的雰囲気から最終回得点へ有意なパスが引かれた。

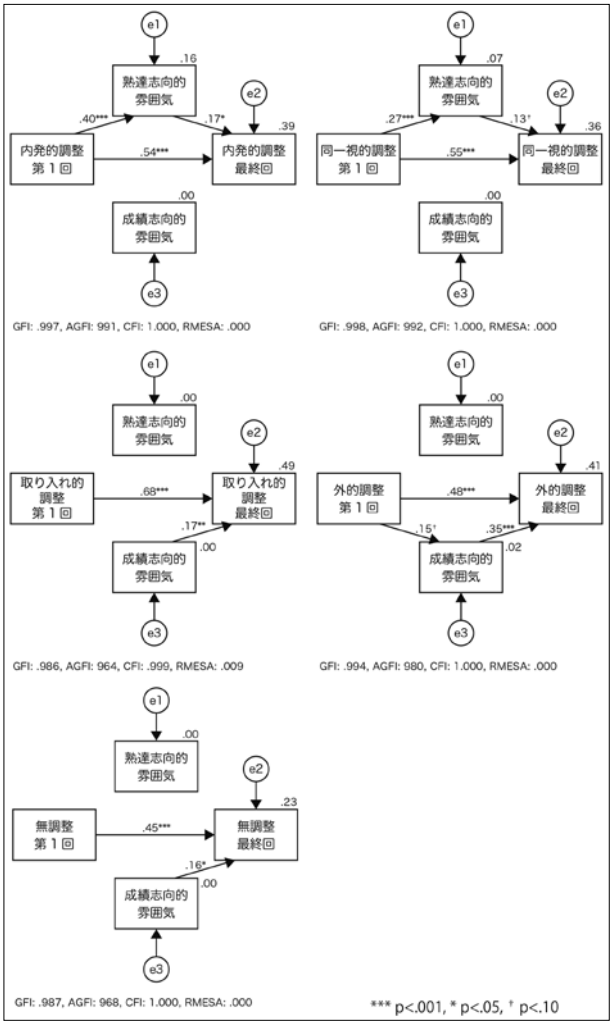


図１　各動機づけ得点と動機づけ雰囲気における共分散構造分析の結果

総合考察

平成 26 年度は、３つの課題に対した検証を実施した。

課題１では、先行研究において作成された２尺度が、大学生に対する測定においても信頼性を保つか検証した。その結果、動機づけ尺度は、松本ほか（2003）の研究と同様の結果が得られ、高い信頼性が得られた。これは、本研究で対象とした授業が選択科目であり、履修者の意思で参加を決定できる点が民間運動施設利用者の参加形態と近いことが、同様の結果を得た要因となったと考えられる。一方で、動機づけ雰囲気尺度は、磯貝ほか（2008）の研究と同様の結果とならなかった。これは、磯貝らの尺度が小・中学校における体育授業を対象にして作成された尺度であり、大学生を対象にした教養体育の動機づけ雰囲気を測定するには適していなかったと考えられる。そこで、確認的因子分析の結果を基に、熟達志向的雰囲気と成績志向的雰囲気に分類した。

課題２では、課題１において信頼性を確認した動機づけ尺度を用い、第１回授業日と最終回授業日の動機づけを比較した。その比較の結果、外的調整と無調整の得点が有意に増加した。しかし、効果量 r は 0.17、0.18 と低い値を示していることから、統計的には有意

な増加であっても、授業による動機づけへの影響は低いと考えられる（水本･竹内 , 2008）。また、内発的調整、同一視的調整の得点は、最終回授業日においても 17 点以上の得点を示し、第 1 回授業日の得点が維持された。しかし、維持されたという現象について視点を変えれば、学生の動機づけをより内発的な段階へ強化できていないことを示す結果とも考えることが出来る。元々高得点であったため、天井効果により得点が向上しづらいことも考えられるが、履修者の内発的な動機づけをより高めるは出来なかった。これらの動機づけの変化･維持の要因については、課題 3 において動機づけ雰囲気の観点から検証した。

課題 3 では、授業の動機づけ雰囲気が履修者の動機づけに及ぼす影響について検証した。共分散構造分析を用いて分析した結果、先行研究と同様に内発的に近い動機づけには熟達志向的雰囲気が影響を与え、非動機づけに近い動機づけには成績志向的雰囲気が影響を与えていることが示された。これは、大学生においても技能の上達などの自己の成長を重視することが運動やスポーツ活動への動機づけを高め、課題の成否や他者との比較などを重視することが動機づけを下げていることを示唆している。従って、履修者の動機づけを高めるためには、教養体育においても、授業雰囲気を熟達志向的雰囲気にすることが効果的だと考えられる。本研究では、熟達志向的雰囲気の得点が平均 23.3、成績志向的雰囲気の得点が平均 10.8 と、授業の雰囲気が熟達志向的であった。対象とした授業では、内容を記したシラバスにおいて「身体を動かすことの楽しさを実感することを目指す（エアロビクス）」、「ウォーキングの楽しみ方を理解し、……（ウォーキング）」と記載されている。また、トレーニング日記を記入して自己の体力をみつめていくこと（フィットネストレーニング）や経験者と初心者が協働すること（バスケットボール）が履修者に求められている。これらの内容から本研究において対象にした授業は、種目自体の楽しみ方に触れる内容や自己能力の向上、仲間との協働が重視されていることが読み取れ、熟達志向的雰囲気であったと推察できる。その結果、内発的調整・同一視的調整の得点が維持されたと考える。

今後の課題

本年度は、教養体育において、使用する尺度、教養体育が動機づけに及ぼす影響、授業の動機づけ雰囲気が動機づけに及ぼす影響の 3 つの課題を検証した。検証により、授業の動機づけ雰囲気を熟達志向的雰囲気にすることが、教養体育においても有効なことが示された。

研究プロジェクトの目標である「学生が大学卒業後も運動やスポーツ活動を継続するように動機づける指導方法を開発」に向けて、次年度以降に残された課題がある。まず、今回検証した動機づけ雰囲気尺度は、更なる検討を加えて、教養体育に適した形で開発する必要がある。慶應義塾体育研究所が設置する体育科目は、小・中・高等学校で実施される体育種目に留まらず多様な種目が存在する。そのため、質問語句の選定など、より教養体育に適した内容とする必要がある。

次に、授業履修者の動機づけを高める介入方法を検討する必要がある。中等教育やスポーツチームを対象にした研究では、熟達志向的雰囲気へ向けた介入として、TARGET 構造を参考にした教授法が実施されている（伊藤ほか , 2008）。この教授法が教養体育においても効果的であるかどうか検証することが、塾生の動機づけを高める方略開発の第一歩と考える。

本年度は、指導法の開発に向けた基礎的な資料を収集することができた。次年度以降は、さらなる資料収集に加えて学生の動機づけを高める直接的な働きかけをし、指導方法の開発へ段階を進めていきたい。

付記

本報告は、下記の 4 件の発表を基に作成した。

永田直也・山内賢・佐々木玲子・加藤大仁・近藤明彦（2015）大学教養体育における運動・スポーツに対する動機づけと授業における動機づけ雰囲気の関係 . 慶應義塾大学体育研究所紀要 , 54:17-24.

Nagata, N., Yamauchi, K., Sasaki, R., Kato, H., and Kondo, A.（2014）. Relationship between the motivational climate and motivation of participation for exercise in college physical education classes. Proceeding of the 9th German-Japan Sport Science Symposium: pp.21-22.

Nagata, N., Yamauchi, K., Sasaki, R., Kato, H., and Kondo, A.（2014）. A study of the validity of the motivational climate questionnaire for college physical education. CD Proceeding of 7th Asian-South Pacific Association of Sport Psychology International Congress.

永田直也・山内賢・佐々木玲子・加藤大仁・近藤明彦（2014）大学における教養体育の授業が学生の運動に対する動機づけに与える影響 . 日本体育学会第 65 回大会予稿集 : p.111.

文献

Ames, C.（1992）Achievement goals, motivational climate, and motivational processes. In Roberts, G.C.（ed.）Motivation in sport and exercise. Human Kinetics, pp. 161–176.

Deci, E. L., & Ryan, R. M.（eds.）（2002）Handbook of Self-Determination Research. University of Rochester Press.

藤田勉・杉原隆（2007）大学生の運動参加を予測する高校体育授業における内発的動機づけ . 体育学研究 , 52: 19–28.

Gutiérrez, M., Ruiz, L.-M., & López, E.（2010）Perceptions of motivational climate and teachers' strategies to sustain discipline as predictors of intrinsic motivation in physical education. The Spanish Journal of Psychology, 13: 597–608. doi:10.1017/S1138741600002274

橋本公雄（2012）体育実技授業にともなうメンタルヘルス効果の因果モデル . 橋本公雄ほか編著 , 未来を拓く大学体育 . 福村出版 , pp. 76–85.

Hillman, C. H., Erickson, K. I., & Kramer, A. F.（2008）Be smart, exercise your heart: exercise effects on brain and cognition. Nature Reviews Neroscience, 9: 58–65. doi: 10.1038/nrn2298

磯貝浩久・伊藤豊彦・西田保・佐々木万丈・杉山佳生・渋倉崇行（2008）体育における動機づけ雰囲気測定尺度作成の試み . スポーツ心理学会第 35 回記念大会研究発表抄録集 , pp. 194–195.

伊藤豊彦・渋倉崇行・磯貝浩久・西田保・佐々木万丈・杉山佳生（2008）体育・スポーツにおける動機づけ雰囲気研究の現状と展望 . 島根大学教育学部紀要（教育科学）, 42: 13–20.

松田泰定・木原成一郎・島本靖（2006）小学校体育授業における運動技能の習熟と競争の結果の認知に関する事例的研究――授業風土と目標志向性の認知を視点として . スポーツ教育学研究 , 26: 25–40.

松本裕史・竹中晃二・高家望（2003）自己決定理論に基づく運動継続のための動機づけ尺度の開発：信頼性および妥当性の検討 . 日本体育協会編 , 日本体育協会スポーツ医・科学研究報 , pp. 147–155.

水本篤・竹内理（2008）研究論文における効果量の報告のために――基礎的概念と注意点――. 英語教育研究 , 31: 57–66.

中須賀巧・杉山佳生・須崎康臣（2012）体育における動機づけ雰囲気が生徒の学習意欲に与える影響 . 健康科学 , 34: 55–62.

Papaioannou, A.（1998）Students' perceptions of the physical education class environment for boys and girls and the perceived motivational climate. Research Quarterly for Exercise and Sport, 69: 267–275.

World Health Organization.（2010）Global recommendations on physical activity for health. doi:10.1080/11026480410034349

コアテーマ②　学生スポーツの行動と大学におけるスポーツ

「研究を通じた塾体育会の支援策～タレント識別手法の検討～」

班長：石手靖　班員：鳥海崇・坂井利彰・加藤幸司・須田芳正・吉田泰将・山内賢（体育研究所）

はじめに

基盤研究2班の目的は「研究を通じた塾体育会の支援」である。これまでも体育研究所における研究を通じた体育会支援にはいくつか例がある。過去10年間において、ゲーム分析に関する研究（2011年加藤、2011年菊池ら、2010年菊池ら、2007年加藤）、動作分析に関する研究（2011年鳥海）、コーチングに関する研究（2005年吉田）、心理分析に関する研究（2004年大嶽ら）などが挙げられる。

ただし、これまでの先行研究では特定の競技種目や特定の選手を対象としており、複数の競技種目にまたがる、より大人数を対象とした包括的な研究を通じた支援はこれまで体育研究所ではほとんど実施してこなかった。

そこで今回は体育研究所における基盤研究として、より多くの競技種目やより多くの塾生を対象として研究を通じた体育会支援を実施するために、競技力向上と安全向上、受傷防止の2つを主要テーマとし、以下の3つの検討課題を設定した。

テーマ：競技力向上

1. 大学新入生を対象としたタレント識別手法の検討
2. データの保管、活用を目的とした産学連携の検討

テーマ：安全向上、受傷防止

3. マウスガード利用実態の調査

本報告では上記1. について報告する。

背景

体育研究所の基盤研究として、研究を通じた体育会支援をすること、特に本塾の大学新入生を対象としてタレント識別手法を検討することは重要である。これには大きく分けて二つの理由が挙げられる。一つ目の理由として挙げられるのは、大学新入生は自身の身体特性や競技種目との適合性を考慮せず体育会各部に入部している点である。大学新入生が体育会の各部に入部するきっかけは主に3つが挙げられる。

1. 過去に経験してきた競技種目を大学でも継続すること
2. 特定の競技種目へ興味があり、その種目を始めること
3. 友人、知人、先輩などからの勧誘によりその種目を始めること

このことから、新入生が大学において体育会に入部するためには、過去の競技経験か、特定の競技への興味、もしくは知り合いからの勧誘が重要な要素であり、馴染みのない競技種目やその関係者と出会えない場合は、新入生はその競技種目を選択しにくい状況にある。そして新入生は限られた選択肢の中から競技を選択しており、その選択の際には新入生自身の身体的及び運動的特徴や各競技との適合性はほとんど加味されていない。慶應義塾体育会には41部56部門と非常に多数の競技種目が所属しており、新入生はある種目に向いていなくても、他の種目に向いている可能性は十分にある。この点について研究面を通じて支援することにより以下のような利点が生まれると考えられる。

1. 新入生は自身の身体的及び運動的特徴に適合する競技種目を認識することができ、これまで継続してきた競技や興味のある別の競技に含めてより幅広い選択肢を得ることができる。
2. 新入生が自身の特徴に適合する競技種目を選択することで、大学時代に部活動で新入生自身の能力を十分に発揮できる可能性が高まり、ひいては大学生活をより有意義にすることができる。
3. 体育会各部はその競技種目に適合した新入生を獲得することができ、結果的に競技力を向上させることができる。

本塾においてタレント識別手法を検討することが重要な二つ目の理由として、体育会各部の所属部員数が多すぎたり少なすぎたりする点である。体育会各部の所属部員数を比すると、二極化の現状が見て取れる。

1. 部員が 100 人以上の部……6 部
2. 部員が 30 人以下の部……21 部

上記の点や、関係者の聴取から、部員数が多すぎるあまり、練習時間や場所の確保が困難な部がある一方、部員数が少なく、十分な新入生を確保、育成できていない、もしくはチーム競技の場合は人数不足のため十分な実戦練習を積むことができない部があることが示される。これらはいずれも部の競技力向上を阻害する要素であり、この点に対して本研究で介入することで、体育会各部が能力に応じた適正人数になることで、練習時間、場所、及び実戦練習を十分確保することができ、結果として競技力向上を果たすことができると考えられる。

以上をまとめるとタレント識別手法の検討は以下の点で重要である。まず新入生に対しては、相対的に自分の能力を発揮できる競技種目を知ることで選択肢に幅ができること、そしてその競技種目を選択し、自分の能力を生かすことで大学や部に貢献できることである。次に体育会各部に対しては相対的にその競技種目との適合性を有する新入生を獲得することができること、また、部員数が適正化するために、時間、場所、実戦相手を十分に確保でき、ひいては競技力向上を果たすことができる。

以上のことから、本研究では新入生を対象としたタレント識別手法の実施に向けて検討することを目的とする。

方法

タレント識別の指標となる、判断項目とその基準について検討する。

今回の項目については、専門技術に代表される競技経験と、身体的特徴に代表される筋肉量に着目する。筋肉量は体組成分析から得られ、部位別（腕、体幹、脚）、及びその左右別の筋肉量になる。運動的特徴に代表される項目（走力、筋力、敏捷性、投力、跳躍力、全身持久力、筋持久力、柔軟性等）については体力テストの実施検討として今後の課題とする。

タレント識別の対象とする競技種目は、試験的に体育研究所の教員が競技力向上に携わっている部及び部員とする。具体的には以下の通りである。

男子：飛込、競泳、水球、剣道、ソッカー、準硬式野球
女子：飛込、競泳、剣道、バドミントン

以下の手順によりタレント識別のための項目および判断基準を検討した。

1. 専門技術

体育会各部において、専門技術が重要な割合を測定した。具体的には高校までその競技を経験し、大学でも継続している者が試合のレギュラーとして出場している割合を基準とした。この割合が大きいほど専門技術が重要であると判断できる。

2. 筋肉量

各部において、筋肉量が重要な割合を測定した。レギュラーと非レギュラーとの筋肉量を比較し、有意な差が生じているか否かを調べた。有意な差があり、その差が大きいほど筋肉量が重要であると判断できる。

結果

・専門技術の重要度について

専門技術の重要度を調べる目的で、経験者が部員、レギュラーにいる人数を調べた結果が表１である。水球にのみ大学から競技を始めた者がレギュラーにおり、それ以外の競技種目においてはそもそも部員の全員が経験者のみで占められていた。また、飛込、競泳は個人競技であるため、レギュラーがいなかった。それ以外の競技については各競技の早慶戦にスターターとして出場した者と定義した。

・筋肉量の重要度について

レギュラー・非レギュラー間での筋肉量の比較の結果は表２の通りである。レギュラー・非レギュラー間で筋肉量において有意に差があったのは男子サッカーと女子剣道であった。なお、女子バドミントンは部員数が少なく全員がレギュラーとなっているため、今回の測定からは除外した。

表１　体育会各部の部員及びレギュラー人数とその構成

男子	被験者数	初心者数	経験者割合[%]	レギュラー数	初心者数	経験者割合[%]
飛込	5	2	60			
競泳	17	0	100			
水球	21	5	76	7	1	86
剣道	68	0	100	20	0	100
ソッカー	92	0	100	11	0	100
準硬式野球	68	0	100	9	0	100

女子	被験者数	初心者数	経験者割合[%]	レギュラー数	初心者数	経験者割合[%]
飛込	3	2	33			
競泳	9	0	100			
剣道	14	0	100	7	0	100
バドミントン	4	0	100	4	0	100

表２　体育会各部の部位別左右別の筋肉量

男子		身長[cm]	体重[kg]	右腕[kg/m]	左腕[kg/m]	体幹[kg/m]	右脚[kg/m]	左脚[kg/m]
飛込	全平均	169.6	57.3	1.61	1.56	13.24	4.82	4.80
競泳	全平均	174.6	66.2	1.89	1.87	14.93	5.22	5.19
水球	レギュラー	177.4	70.1	2.00	1.96	15.39	5.38	5.34
	非レギュラー	175.3	69.0	2.02	1.97	15.49	5.40	5.37
剣道	レギュラー	172.8	66.0	1.94	1.85	14.99	5.27	5.27
	非レギュラー	172.8	65.2	1.92	1.82	14.84	5.30	5.30
ソッカー	レギュラー	175.7	69.6	1.84*	1.83	14.62*	5.67	5.77*
	非レギュラー	173.1	66.6	1.70*	1.87	13.86*	5.45	5.41*
準硬式野球	レギュラー	174.6	70.8	1.89	1.90	15.02	5.50	5.50
	非レギュラー	173.7	72.0	1.89	1.89	14.98	5.48	5.47

*p<0.05

女子		身長[cm]	体重[kg]	右腕[kg/m]	左腕[kg/m]	体幹[kg/m]	右脚[kg/m]	左脚[kg/m]
飛込	全平均	157.0	52.2	1.23	1.20	11.1	3.99	3.98
競泳	全平均	163.1	56.1	1.36	1.36	12.0	3.98	3.97
剣道	レギュラー	163.7	59.5*	1.44*	1.36*	12.30*	4.50*	4.52*
	非レギュラー	164.4	50.6*	1.28*	1.22*	11.43*	4.20*	4.17*
バドミントン	全平均	158.3	56.6	1.37	1.23	11.4	4.24	4.15

*p<0.05

考察

・専門技術の重要度について

今回調査した競技種目においては、その大半は専門技術が重要であるという結果であった。また、そもそも部員全員が経験者で占められている部が大半という結果であった。このことから、今回調査した競技種目においては現状では大学から競技を始める者がほとんどいないことがわかった。タレント識別を通じて大学で競技を始めた者が、その後の競技生活を充実したものにできるかどうかは、競技を始めた初期にきめ細かい初心者指導を受けられるかが重要と考えられる。ただし、大学から競技を始める者がいない部においては、十分な初心者指導を与える体制が整っているか不明である。このことから、今後は新入生のタレントを識別することだけでなく、各部の側においても、初心者に対するきめ細かい指導を与える体制が整っているかも本塾におけるタレント識別手法においては検討を加えるべきと考えられる。

・筋肉量の重要度について

レギュラー・非レギュラー間で筋肉量において女子剣道とサッカーに有意な差があった。このことから両競技においてはレギュラーになるためには筋肉量が重要な要素であると判明した。一方、レギュラー・非レギュラーを問わず学年別での筋肉量の比較には有意な差は見られなかった。このことから両競技は大学の部としては筋肉量が増えやすくはないと考えられる。今回の両部に関しては部員全員が経験者で占められていたが、大学から競技を始めた者でもレギュラーになれるような素地のある部の中で、今回のようにレギュラーが非レギュラーに対して有意に筋肉量が多いタイプの部に対しては、筋肉量のある新入生であれば技術を身につければ将来レギュラーになる見込みが強くなると考えられる。また逆に、これまで競技経験を有していても、筋肉量が少ない者はレギュラーを獲得することが難しくなるため、そのような者は、筋肉量の獲得に練習時間を割くようアドバイスするか、他の筋肉量が必要ない競技種目に転向するようアドバイスした方が

新入生自身のタレントを発揮できると考えられる。

なお、学年毎の筋肉量の比較については、今回は水球にのみ有意な差があった。しかし水球ではレギュラーと非レギュラーとでは筋肉量に有意な差は生じていなかった。このことから、水球は競技種目として筋肉量を獲得しやすいスポーツであること、しかしながらレギュラーとして必要なのは筋肉量よりも重要な要素があると予想される。水球競技において、筋肉量よりも重要な要素については今回の調査からは確認できないが、これは今後スポーツテスト等を通じて明らかにし、タレント識別に盛り込むべき課題である。

結論

大学新入生を対象としたタレント識別手法について専門技術と筋肉量を対象として検討を加えた。専門技術については今回対象とした部に関しては水球以外の全ての部で大学から競技を始めた者がレギュラーになっていなかった。また大半の部で大学から競技を始めた者がいなかった。筋肉量については男子サッカーと女子剣道においてレギュラーと非レギュラーとで有意な差が生じており、これらは筋肉量が重要な部であると判定した。また水球については筋肉量よりも重要な要素が存在することが予想された。

今後の課題

1. 体育会全ての部を対象として経験と筋肉量について測定を実施し、判断基準を策定する。
2. 今回測定した部も含め、全ての部を対象として体力テストを実施することで、専門技術と筋肉量以外の項目についても判断項目及びその基準を作成する。
3. 新入生を対象として過去の競技経験及び体組成の測定、及び体力テストを実施し、これまで得られたタレント識別手法を用いて、身体的及び運動的特徴により適合する競技種目を紹介する。

参考文献

1. 加藤 幸司 , バドミントン・シングルスのゲーム分析 : 時間的要素からの分析 , 体育研究所紀要 .50,1（2011.1）,p.1-8
2. 菊地 啓太 , 中島 宣行 , 綿田 博人 , 大学野球における配球について : カウント 0-0 における投球の分析（2）, 体育研究所紀要 .50,1（2011.1）,p.41-51
3. 菊地 啓太 , 中島 宣行 , 綿田 博人 , 大学野球における配球について : カウント 0-0 における投球の分析 , 体育研究所紀要 .49,1（2010.1）,p.15-25
4. 加藤 幸司 , バドミントン競技における時間分析 : 大学生プレーヤーのダブルスについて , 体育研究所紀要 .46,1（2007.1）,p.25-31
5. 鳥海 崇 , 森下 愛子 , 大学水球部員の巻き足動作の運動学的分析 , 体育研究所紀要 .50,1（2011.1）,p.33-39
6. 吉田 泰将 , 植田 史生 , 福本 修二 , 佐々木 玲子 , 村山 光義 , 望月 康司 , 剣道における指導内容の相違による正面素振りの変化 : 振り上げ最高時の剣先位置の指導法について , 体育研究所紀要 .44,1（2005.1）,p.35-42
7. 大嶽 真人 , 須田 芳正 , 依田 珠江 , 石手 靖 , 古賀 初 , 田中 博史 , 慶應義塾大学体育会ソッカー部員のエゴグラムについて , 体育研究所紀要 .43,1（2004.1）,p.33-36

コアテーマ③　大学体育の教育理念とカリキュラム

「大学体育の今日的課題の検証と本塾の課題へのアプローチを探る」

班長：村山光義　班員：植田史生・奥山靜代・福士徳文（体育研究所）、佐藤正伸（文教大学）

本研究班のねらいは、現在、様々に語られている大学教育を取り巻く課題を系統的にまとめ、大学体育への課題として検証するとともに、慶應義塾の実情との関係にも考察を加え、今後の諸策を検討することである。そのため、まず関連文献･書籍の洗い出し、文献レビューから課題の分類、細部のテーマ抽出を行ってきた。これに加え、平成 26 年 11 月 29 日に（公社）全国大学体育連合関東支部と連携し、「大学生をどう育てるか　教養体育からの発信」と題してシンポジウムを企画した。以下、このシンポジウムの記録、文献レビューの記録および数テーマのまとめを掲載する。

1. 慶應義塾大学体育研究所・（公社）全国大学体育連合関東支部共催シンポジウム「大学生をどう育てるか　教養体育からの発信」全記録

【趣旨およびシンポジウムのレジュメ（パンフレット掲載内容より）】

趣旨　昨年刊行された、岩波書店の「シリーズ　大学」の第５巻「教育する大学――何が求められているのか」の中で、吉見俊哉氏は「現在日本の大学は、大学の量的拡大と少子化、グローバリゼーションの加速的進行、知識の複雑化と流動化という課題への対応を迫られる三重苦の状態にある」と述べている。すなわち、少子化と大学数増加によるユニバーサル化した大学運営は、かつてのエリート養成機関から多様化し、生き残りをかけている。また、「世界で最も勉強しない」といわれる大学生をグローバリゼーションが押し寄せる社会にどのように送り出すのか、各大学はその具体策を示し、実践することが急務となっている。そしてそこには、21 世紀の複雑化社会において、大学における知の変容にも対応するという課題が同時に存在している。

図１　シンポジウムチラシ

この現状に対して「大学の質保証」が求められ、大学はアドミッション・カリキュラム・ディプロマポリシーを掲げ、その認証を受けながら、大学の機能を果たすことになっている。しかし、しばしばこのプロセスはトップダウン的であり、学生の育成を担う現場と十分に連携できているか、その理念の達成に機能的なシステムができているか、検討し続ける必要があろう。慶應義塾大学体育研究所では、こうした現状を踏まえ、将来の大学体育を見据えた課題研究（基盤研究プロジェクト）に継続的に取り組むこととした。本シンポジウムはこの基盤研究の１課題である「大学体育の教育理念とカリキュラムを考える」を基幹としている。また、（公社）全国大学体育連合関東支部においても、このような時代の大学教養体育のあり方について特に授業研

究を題材に検討しており、大学間での議論を深めるためにも、共催シンポジウムとして企画することとなった。

大学生をどう育てるか？　このテーマは１教科目に留まるものではない。しかし、我々教養体育の現場は、何より座学と異なる教員と学生の双方向作用を特徴に持ち、かつ「身体」を通じた実体験を享受させている。こうした体育の教育性を再考し、学生の育成について考えることは、大学体育の理念と意義を今ふたたび示すとともに、大学教育の充実に貢献することにつながるはずである。シンポジストには上智大学・師岡文男氏、筑波大学・木内敦詞氏、流通経済大学・田簑健太郎氏（大体連関東支部長）、慶應義塾大学・石手靖氏（体育研究所所長）を迎え、各大学における多彩な取り組みを紹介いただく。詳細は以下の発表概要を参照いただきたい。また、ディスカッサントには慶應義塾大学文学部長・関根謙氏を迎え、体育分野以外から大学教育全体を見据えた評価を頂きながら、総合的な議論を行いたいと考えている。

大学の主役は学び育っていく学生である。「大学生をどう育てるか」。我々の大きな使命感で今この課題に立ち向かう必要がある。　（コーディネーター：慶應義塾大学体育研究所　村山光義）

上智大学全学共通必修科目「ウエルネスと身体」のめざすもの――保健体育２つの授業目標の達成に向けて――

上智大学保健体育研究室　師岡文男

1. 上智大学の教育理念

・財団法人　上智学院の寄付行為の条文（設立目的）1911 年 4 月 6 日

「青年男子ヲ教育シ其智力上道徳上社交上及体力上ノ幸福ヲ増進スルニ在リ」

・上智大学創設者イエズス会教育使徒職国際委員会（編）、髙祖敏明（訳）『イエズス会の教育の特徴』中央出版社、26 頁、1988 年

「全人教育とは、身体的発達が教育の過程の他の側面とよく調和していることをも意味する。そのため、イエズス会の教育は、スポーツや体育についてのよく開発された教育課程を含む。スポーツの教育課程は、身体を鍛えるばかりでなく、男女の若人が成功と失敗の両方を、寛大に受容する多くの機会をも提供する。また、彼らは、グループ全体のより大きな利益に貢献するために、各自の最も優れた資質を活用して、他の人と協力して、働く必要に気づくようになる。」

・現在の上智大学の教育理念

Men and Women for Others, with Others の育成

2. 日本学術会議の提言

・「21 世紀の教養と教養教育」2010.4.5

「大学教育における体育・健康教育は、高校までのような多面的・包括的な教育課程によって制約されるものではないが、心身の健康維持や選択した種目の活動を通じての技量形成・仲間づくりに加えて、保健体育の意義、身体の理（ことわり）と自然や生活様式などとの関係についての理解を深めるという点でも重要である。さらに言えば、この教育・学習活動は、芸術関連の活動とともに、非言語的な（nonverbal）表現能力・コミュニケーション能力の形成という点でも重要である。学問知が主に言語を媒介にして事物・事象の本質を捉え思考し表現するのに対して、保健体育や芸術はそれらを含みつつ、情念・情意や感性と言われるものをはじめ、知性に収まりきらない人間性の深所を抉り出し、それを表出・表現する活動である。体育や芸術の活動における自己表出・自己表現の作用は自己発見や自己との出会いの契機として、また、体育・スポーツにおける集団活動や芸術鑑賞は他者との共感・連帯・対話の契機として、豊かな人間性・市民性を培うという点でも重要であろう。さらには、日常生活においても、表情・身振りや振る舞い方などの非言語的要素が対話や人間関係や集団的活動の場を豊かにすることも言うまでもない。そうした多様な意義を持つものとして、保健体育科目を豊かなものにしていくことも重要である。」

・「現代における学士課程の教養教育について（4）芸術や体育の持つ意義」2010.7.22

「教育は、頭（知育）と体（体育）と心（徳育）の三つをバランスよく育てることであるという点は、プラトン以来どの教育論でも述べられてきている。しかしながら、日本の大学は知育を偏重し、申し訳程度の体育を行い、徳育を司る芸術や宗教に関しては殆ど手をつけてこなかった。現在も、圧倒的に言語あるいは論理に偏った教育（知育）であることに無

自覚なままであるが、これは人間の発達過程において著しくバランスを欠く行為であり、自立した市民を生み出すという大学の機能からすれば、危機的な状況とさえ言える。」

3. 上智大学全学共通必修科目「ウエルネスと身体」

(1) 2つの目標

「ウエルネス（全人的健康――身体的・精神的・社会的に良好な状態）」と「身体の知（身体についての気づき・知識・知恵）」の理論学習と体験学習

(2) 4つの学習内容

＜実習＞

身体のレッスン：自分をひらき、自分で感じながら自分の身体を再発見したり、メディアとしての身体に気づき、身体を使った非言語コミュニケーションの機能や重要性を体験する

フィットネス：科学的な測定を行うことで自分の体組成や体力を知り、データをどう解釈するかを学ぶとともに、個人で生涯持続可能な健康・体力の維持向上のためのトレーニング方法を体験する

＜講義＞

健康のリテラシー：運動・食生活・ストレスについて、巷の俗説に惑わされない正しい知識や考え方を身につけるとともに、自分のライフスタイルにどう取り入れていくかを考える

スポーツと身体：身体の文化性・歴史性、身体文化としてのスポーツ、スポーツのメディア性や政治性などについて学び､議論することによって幅広い身体観･スポーツ観を身につけ、身体やスポーツのもつ機能や価値をより良く活かしていくことを考えていく

4. 必修である必要性

・受講後の無記名アンケートで90％以上の学生が「必修賛成」と回答。

・「必修でなければ絶対に履修していなかったが、これからの人生に必要な知識と体験を得ることができた。今後も必修であり続けるべき」とその理由を書く学生が多い事実。

・人間らしさを失わないために必要なアナログ文化である身体活動を体験学習する機会。

大学体育の論と証拠と満足度

筑波大学体育系　木内敦詞

■【授業評価＝授業成果か？】授業評価アンケートは受講者の「反応（満足度）」に過ぎず､「学習（理解度）」「行動（活用度）」「結果（影響度）」を十分に評価していない。

■【論＜証拠 → 論＆証拠】「技術、知識、態度」育成がシラバスに書いた餅であることがある。たとえ満点に近い授業評価や技能上達という事実が生まれたとしても、それは大学教育としての体育の存在意義＜論＞や教育効果＜証拠＞）を示したことにはならない。

■【論＆証拠 → 論＆証拠＆満足度】知識や態度についての学習成果についての学術的証拠を揃えることに挑戦し、健康教育としての大学体育の論と証拠に関するいくつかの成果を得た。しかし、学生による体育授業の効用認知は「健康づくり＜友達づくり」。→社会的スキルを内包するライフスキル教育としての大学体育授業の論と証拠の獲得に挑戦中。慶應大グループがより先進的に取り組んでいる。

■【教える内容 → 教える方法】そのシラバスや教材を他の教員にも採用してもらったところ、明確な効果は得られず（分析中）。→教える内容・教材だけではなく、教え方の問題か？→　インストラクショナル・デザイン（ID）の導入。

■【三位一体への指針】ID とは、教育の効果・効率・魅力を高める技術と科学の総和。論と証拠と満足度の三位一体なる大学体育への成長へ向けた１つの方略。

■【大学体育教員の養成・高度化】　筑波大学と鹿屋体育大学は、高度大学体育スポーツ指導者養成共同学位プログラム（3年制博士課程）を来年度より始動させる。体育スポーツ現場の教育と研究の循環を効果的に行える、高等教育における学術的職業人としての体育教員の養成・高度化を図り、大学体育教育の質保証を先導できる人材育成をめざす。

体育が育てる大学生――ミャンマーの伝統スポーツ「チンロン」を教材として

流通経済大学スポーツ健康科学部　田簑健太郎

1. 伝統スポーツを導入する背景

これまで大学教育におけるスポーツ教材は、高等学

校までの指導要領に示されている種目を中心に展開されることがほとんどであった。

流通経済大学でも同様である。さらに、教員養成も行っていることから、実技科目として開講している種目は全部で17科目あるが、ほぼ競技スポーツ（近代スポーツ）である。

しかし、少子化の現在、絶えず「自分」を中心に考える思考方法が定着している学生に対し、自分以外の他人をサポート（別言すれば、「競わないで協力する」）する重要性を経験する機会を「授業」で提示することが「いま」の学生にとって不可欠だと思われる。

そうした中、私が担当する「ニュー・スポーツ実習」においてミャンマーの伝統スポーツである「チンロン」を教材として導入することにした。

「チンロン」には、本学の学生が持つ以下の特徴に対し、応えることができると判断したからである。

①専門学部といっても、入学試験で実技を実施していないから実技レベルは決して高くない学生が入学している。

②幅広いスポーツを経験することによって、よい深くスポーツを理解する。

③留学する学生が少なくなった現在において、世界に興味・関心を示すきっかけを作る。

④誰もが「初めて」経験するスポーツのため、学生の実技レベルに差がない。

⑤「チンロン」は「協力」しなければ成立しない。

2. 授業の実際

まず、ウオーミングアップの後、「チンロン」は「型」を重視しているため、6種類の型の練習を行う。その後、2人組で10～20回を目標に蹴り、4人組に増やし、同様に蹴る。

最終的に6人組で輪をつくり蹴るが、ここでも30回程度を目標におくことによって、協力関係が生まれる。しかし、チンロンの醍醐味は何と言っても「技」にあることから、1コマごとに技を身につける時間を確保し、技の修得のための練習も途中で入れる。

6人組のうち3人ずつ入れ替えて、新しいチームを作り、練習することもオプションとして考えられる。

3. 伝統スポーツで学生を育てる

上記の理由で導入した伝統スポーツであるが、「チンロン」が協力を前提に成立しているため、ややもすると、実技を行うのが面倒くさいという学生も積極的に参加しなければいけない状況が生まれた。その結果として、1コマ（90分）の授業でしっかりとした運動量を確保できたとともに、学生同士のコミュニケーションもとることができた。

授業を通して、学生同士の協力関係を構築することができた上に、簡単な単語とは言え、ミャンマー語を使うことでミャンマーに興味・関心を持った学生が多少なりとも出てきたことは、教材として単に目新しいだけでなく、伝統スポーツを通して、世界を少しでも感じるきっかけ作りができたといえよう。

活力ある塾生の育成

慶應義塾大学体育研究所　石手　靖

慶應義塾大学体育研究所では「未来を切り拓くための行動力に溢れた塾生を育てる」と基本方針を打ち出し、体育・スポーツ分野の教育プログラムを展開し、塾生の心身に「感動」と「興奮」を与え、塾風を涵養することを目標に取り組んでいる。この体育研究所の姿勢をより多くの塾生に知ってもらうために「当世塾生気質」と題したリーフレットを作成し、この2年間新入学生を中心に配布した。その結果、他の要因との相互作用もあり体育科目の履修者数は増加傾向となった。

展開している教育プログラムの一つは、キャンパスに体育・スポーツ実践の場を作り、運動を習慣化し身近なものにするためのプログラムで、授業場面に限ったものではない。もう一つの教育プログラムとは「身体」をキーワードに人間を理解するためのプログラムであり、体育研究所の研究活動を土台として広く身体運動の文化までをも探る科学的アプローチである。この二つの教育プログラムは、常に慶應義塾の伝統と精神を基礎に塾風を涵養することを意識して実践している。

最近開催したスポーツイベントを二つ紹介する。一つは、今年10月に開催した「KEIO フットサルアドベンチャー2014」、二つ目は、今月8日から16日まで約1週間開催した「KEIO CHALLENGER INTERNATIONAL TENNIS TOURNAMENT 2014」である。両イベント共に塾生が自ら作り上げることを基本とし、塾生自身が大会を企画運営している。後輩のために良き伝統を残すということを実感し、スポー

ツを通じて多方面にわたる多くの方々との交流機会を得ることができる。また、自分達の通う大学キャンパスで開催するということ、参加者、学生スタッフ、教職員が一体となってイベントの成功に向けて取り組むことが愛塾心を育成すると考えている。

慶應義塾には、その会長に代々の塾長が就く体育会という組織がある。現在多くの大学でスポーツ関連の部（クラブ）活動を統括する組織の名称として体育会という言葉が使われており、慶應義塾もその例外ではない。大学を代表して競技に参加する言わばアスリート集団を指し、世間ではその学生を体育会系学生と表現したりもする。しかしながら慶應義塾における体育会の当初のあり方は現在のそれとは異なっていたと考えられる。その発足は明治25年、全塾生の健全なる身体の発育をめざして設けられた。初代会長は福澤捨次郎。福澤諭吉の二男である。はじめは①剣術②柔術③野球④端艇⑤弓術⑥操練（兵式体操）⑦徒歩の7部を置き、塾生達は幾部でも所属でき学問の合間をみて運動に励んだとされる。また全塾生が体育会費を納め（この体育会費については現在でも体育会部所属の学生は納めている。）運動の機会を得ていたのである。当時の会則によればその目的を「本塾学生に完全なる身体の発育を得さしむるを以って目的とす」と示されている。現行の会則では以下のように改められている。「スポーツにいそしみ義塾の発展に寄与しようとする塾生が、先輩塾員の協力のもとに、技をみがき、体位の向上をはかるとともに、品性を陶冶し、学生スポーツの本旨を全うするため協同すること」とある。

要するに体育会とはある特定の学生集団を指すのではなく、学生において人格形成あるいは学問の習得のためには運動が必要不可欠なものであるという基本的な考え方のもとに設けられたと考えられる。

近年、無感動・無関心といわれる現在の若者がメールやスマートホンに依存し、人間味あるコミュニケーションが不足する時代において、最も必要とされる教育こそ「人とつながれる教育」「人と語れる教育」「人を思いやれる教育」であり、我々が担う役割は体育を通じた豊かな人間形成である。

大学において国際社会で活躍できる人材の育成が期待されている中、主体性と積極性、チャレンジ精神、協調性と柔軟性をバランスよく備えた人材の育成に努めたいものである。

シンポジスト・ディスカッサント（プロフィール）

シンポジスト

師岡文男（もろおかふみお） 1954年東京都生まれ。1976年上智大学文学部史学科卒、1979年筑波大学大学院体育研究科修了後、上智大学文学部へ。1986-87年イリノイ大学客員講師を経て、2000年より教授。初代全学共通教育委員会副委員長、委員を6年務めた。1980年から体育実技科目「フライングディスク」を開講。日本フライングディスク協会（JFDA）・世界フライングディスク連盟に携わり2度の世界選手権大会招致（1992･2012年）、2001年World Games秋田大会招致（フライングディスク種目アルティメットとディスクゴルフを正式種目化）に成功。現在JFDA会長。その他、国際キャンプ会議事務局長、国際スポーツ団体総連合理事、日本オリンピック・アカデミー理事、（公社）全国大学体育連合理事、など32団体の役員を歴任。現在も国際ワールドゲームズ協会、日本レクリエーション協会、日本ウエルネス学会など多くの団体の理事を務める。2007年文部科学大臣「生涯スポーツ功労者表彰」受賞。2012年公社）全国大学体育連合「大学体育教育賞」受賞。

木内敦詞（きうちあつし） 1966年大阪府生まれ奈良県育ち。1989年筑波大学体育専門学群卒、1991年筑波大学大学院修士課程体育研究科コーチ学専攻修了。大阪工業大学助手・講師・准教授を経て、2014年3月より筑波大学体育系教授。博士（教育学）。日本体力医学会評議員、（公社）全国大学体育連合大学体育学編集委員。専門は大学体育論で、多数の研究論文がある。現在、筑波大学・鹿屋体育大学の共同プログラムである「高度大学体育スポーツ指導者養成大学院共同学位プログラム」のスタッフとして、新時代の大学体育を拓く指導者養成システムの構築にも取り組んでいる。

田簑健太郎（たみのけんたろう） 1972年兵庫県生まれ。1995年日本体育大学体育学部卒、1997年日本体育大学大学院体育学研究科修士課程修了。日本体育大学、国士舘大学大学院スポーツ・システム研究科を経て、2005年より流通経済大学スポーツ健康科学部へ。2013年より教授。 陸上競技部顧問。 日本体育学会スポーツ人類学専門分科会・日本スポーツ人類学会に所属しスポーツ史、スポーツ人類学を専門とする一方、公益財団法人 龍ケ崎市まちづくり・文

化財団理事のほか龍ヶ崎市のスポーツ振興・健康推進活動をリードしている。また、2013年より（公社）全国大学体育連合理事・同関東支部長として大学体育の活性化にも尽力している。

石手　靖（いしでやすし） 1961年東京都生まれ。1984年慶應義塾大学商学部卒、同年慶應義塾大学体育研究所へ。1990年順天堂大学大学院修士課程体育学研究科修了。1997-98年UCLAへ留学、同Volley Ball TeamのアシスタントコーチとしてNCAA優勝に貢献。その後、慶應義塾体育会副理事、慶應義塾大学学生総合センター副部長などを経て2013年より体育研究所所長。日本バレーボール学会理事・横浜ビーチバレーボール連盟理事。バレーボールの研究教育の他、数多くのスポーツイベントやシンポジウムの企画を実現。近年はブラインドサッカーの普及などにも取り組む。

ディスカッサント

関根　謙（せきねけん） 1951年福島県生まれ。1978年慶應義塾大学大学院文学研究科修士課程修了。埼玉県で公立高校教諭を務めたのちに、中国の西安外国語学院で日本語教育に従事、帰国後北陸大学外国語学部助教授、慶應義塾大学文学部助教授などを経て、2010年より慶應義塾大学文学部長。専門は中国現代文学。翻訳書に『飢餓の娘』など。

【シンポジウム記録】

コーディネーター：村山光義（慶應義塾大学体育研究所）

それでは皆さん、定刻となりましたのでシンポジウムの方を、早速始めさせていただきたいと思います。私、慶應大学体育研究所の村山と申します。本日は、大学生をどう育てるか、というタイトルで公益社団法人全国大学体育連合関東支部と共催シンポジウムということで企画をさせていただきました。足元の悪かった中、たくさんの皆様にお集りいただきまして、大変嬉しく思います。シンポジウムの主旨に関しましては、皆さんお手元の方に資料を添えさせていただきました。ホームページ、メールニュースなどでも発信させていただきましたけれども、大学の教育の課題について考えようという大きな目標に対して、教養体育という我々の枠組みの中から我々が今、何ができるかということを発信したいということが狙いでございます。本日は資料にありますように、上智大学の師岡先生、筑波大学の木内先生、大体連の関東支部長でもあられます流通経済大学の田簑先生、本研究所の所長の石手先生、をお招きして四名からそれぞれの立場でそれぞれの角度のご意見を頂戴します。それから最後に慶應の文学部長の関根先生にディスカッサントとしてご意見をいただきまして、総合的に体育を幹として、でも大学の教育がどんなことができるかということを今の現代の課題に合わせて議論できればと思っておりますので、二時間、ぜひよろしくお願いしたいと思います。

それでは、早速ではありますけども、師岡先生の方からまずはお話をいただきまして進めて参りたいと思います。まず、四名の方にお話しいただき、その都度簡単に質疑だけいただきますが、四名のお話を済ませまして、若干休憩を取って、前の方にシンポジストとディスカッサントの関根先生に来ていただきまして、第二部ということで後半始めます。第二部の初めに関根先生からご意見をまずいただく、という流れで進めたいと思いますので、よろしくお願いいたします。それでは師岡先生、早速よろしくお願いします。

●上智大学必修科目「ウエルネスと身体」のめざすもの

師岡文男（上智大学）

皆さんこんにちは。上智大学の師岡でございます。本日はお招きいただきありがとうございます。私ごと

き者が皆さんにお話をさせていただくのは恐縮至極なのですが、上智大学は1928年以来今日に至るまで86年間、体育必修をずっと続けてきております。教養体育を語る時、必修であるべきか否か、ということが必ず議論になりますが、上智大学では、「教養体育こそ必修でなければならない」、「必修であるからこそ価値がある」というポリシーを守っています。これには異論がある方もおられるかと思います。ここ慶應大学では体育は必修ではないですね。なので、まずトップバッターとして上智大学の必修体育の事例を発表させていただき、問題提起ができればと思っております。

皆さんもご存知の通り、1991年7月の「大学設置基準の大綱化・簡素化」までは体育はどこの大学でも必修が義務づけられていました。第2次世界大戦後、進駐軍の民間情報教育局（CIE）の強い要望が、時の大学基準協会を動かし、「大学は体育に関する講義及び実技各2単位以上を課することを要する」ことが承認されてそれがずっと守られてきました。ところが、大学数が増えたところに少子化の波が押し寄せ始めた91年、国は「規制緩和」を行ったわけです。今後、半分の大学がつぶれるかもしれないという状況の中で、国がいろいろ規制をかけていると責任が国にまわってくる。そうならないようにするために、これからはカリキュラムを自由にして良いから各大学の責任で生き残りの競争をしなさい、というのが「大綱化」の背景だと私は思っています。いずれにしても、「大綱化」をきっかけにどこの大学でも体育担当教員組織に一つの波乱が起きたと思います。それまでぬるま湯に浸かっていて、これからの体育はどうあるべきかを議論したり、毎年カリキュラムの中身を改革することなどあまりせずに、「昨年通り」を続けてきたやり方ががらりと変わったのがこの時です。上智大学でも体育を必修で残すかどうかが全学的な議論になり、保健体育研究室に民主化が起こり、ベテランも新人も平等に意見を述べ、決定したことには従うことが徹底されました。内輪もめもなくなりました。体育を原点から問い直す会議を毎週開き、それをまとめた結果を各学部教授会で発表する時間をもらって教員の体育に対する理解を深めていただき、必修の継続が認められました。その後も、1996年に「体育理論」と「保健教育」をやめ、新必修科目「ウエルネスの理論と実践」を立ち上げるなどの改革を続けていきました。大学生は、まだ身体的な問題で健康

を害することは少ない年齢で、どちらかと言えばメンタルやソーシャル（人間関係）で悩やむことが多い年代です。皆さんご存知の通り、WHOの健康憲章の中で、「健康とは、身体的にも、精神的にも、社会的にも良好な状態」と定義されています。この「全人的健康」は、間違いなく全ての学生の関心事であり、必ず学ぶべきことだと多くの教職員・学生に納得してもらえました。その後も少子化が進み、私学の先行き不安が叫ばれる度に「体育を必修から外せ」という意見を述べる人が全学共通委員会の中に現れ、その都度丁寧な議論をし、その都度逆に委員の皆さんに体育の重要性を理解していただいてきています。「体育は必修であるべきかどうか」について全教職員にアンケートを取ったこともありましたが、多くの教員が「必修であるべき」と回答してくれました。受講生に対する無記名アンケートでも、80～90%の学生が「必修賛成」と回答してきています。授業の最初の頃は、「なんで大学で体育やらなきゃいけないのか」という意見が圧倒的に多いのですが、授業終了後には、「必修でなければ絶対自分では選択してない科目だが、この授業内容はこれから生きていくのに必要な内容だと気づかされました」という意見に変わっている学生がほとんどです。最近、文部科学省が各大学に要求し続けているのが、学生の「コミュニケーションスキルの向上」です。これは、単に英語ができる、国語ができるということよりも、face to faceで、お互い言いたいことを言い合ってディスカッションができる能力、そしてお互いの違いを認め合って共に生きることができる能力を指しています。これは、テクニックと言うよりは、経験して体得していくことです。皆さんの大学にもいらっしゃると思いますが、うちの大学にも、「先生僕コミュ障なので人前でしゃべれません」と言ってくる学生がいます。「コミュ

障」、つまり「コミュニケーション障害」。まるで、うつ病のように、人前でしゃべれないのは自分が病気だからだと言うのです。勿論、それは病気ではなく、単にそういう経験をしていないからで単にしゃべることをしてこなかっただけのことです。スマートホンという箱の中の世界だけで生きているから、人の顔を見て話すことが苦手になってしまっただけで、それは慣れればいくらでもできることです。そういった学生には「私も人前でこうやってしゃべることは最初苦手だったが、今や人前でしゃべることが職業になっている。これは環境が人を変えるということであり、体力を意味する“フィットネス”ももともと“環境に適応する”という意味で、自分をとりまく環境を変えれば君の話す能力は間違いなく上がってく」という話をして、他人と話さざるを得ないゲームを行い、楽しみながら話すチャンスを体育の授業で作っています。

「体育が何故必修なのか」という理由の１つが、コミュニケーションスキルを、実際に効果的に上げられる科目としての体育の授業効果があります。目標に向かってグループで失敗と成功を共通体験する中で他者と言葉だけではなく身体表現も含めてコミュニケーションをとる必要が出てくるからです。他の科目でもコミュニケーション能力を高めることはできますが、全員が必修でコミュニケーションが苦手な学生も、得意な学生も一緒になって共通体験をしながら、人と人が共に生きることを体験的に学ぶ機会としては、体育にまさるものはありません。

上智大学の必修科目「ウエルネスと身体」という授業の中では一切スポーツ種目は教えていません。いわゆるグループワークトレーニングの中で、必ず相手としゃべったり、スキンシップをはかったり、身体的なコミュニケーションもはからないと達成できないような課題や、リーダーシップを発揮せざるを得なくなるイニシアチブゲームを体験する時間を設けています。今は、J1の監督になるにもこういったグループワークトレーニングプログラムが課せられている時代です。正に身体的なレクリエーションを通して、他者と関わらざるを得ないような状況を作ることで、他者と話す体験を持ち、共同作業の中で達成感を感じられたときに、自分にもできるんだという自信が生まれます。コミュニケーションが不得意な学生を変えていいけるのは、それこそ必修でやらざるを得ない環境を作れるからです。

またもう１つの大きな柱は「科学知」に対するところの「身体知」の体得です。あらゆるものがデジタル化されていく世の中で、五感、身体感覚を磨き、自分の身体で感じ、自分の身体で表現していく能力、「メディアとしての身体」をしっかりと体感することは「人間らしさ」を失わないためにも大変重要な学習目標としています。

それと保健体育が必修であることが必要なもう１つの理由は、以前、学生に高校の保健体育の内容をどのくらい学習してきたかを調べるアンケートを行った際、大きな格差があり、高校の保健の内容を学習していない学生が数多く存在することが分かったことです。多くの学生が当然高校時代に習っているべき知識、スポーツ文化やトレーニングの知識、健康科学の知識を、実はきちんと学んでいない、身につけていないということがはっきりしたのです。これもまた本学が保健体育を必修科目にしている大きな理由の１つです。

上智大学には、1980年代は全学８千人の学生に対して14人の保健体育専任教員がいました。それが今、1万２千人の学生に対して専任が６人、嘱託４人。来年度は１人嘱託教員を減らし、専任６人に嘱託３人になります。教員数は減らされていますけど、必修科目のクラスは35人１クラスで、非常にコミュニケーションが取りやすい形で理論を半分、実習を半分という形での演習科目２単位として開講しています。

お手元の資料の最初のページを見ていただくと、本学の教育理念が記されています。上智大学を創立するためにつくった財団法人上智学院の規則「寄付行為」の設立目的に、知育・徳育・体育が書かれているほかに「社交」の力を向上させることも書かれています。このことは、今でいう「コミュニケーション力」です。それとイエズス会という日本にキリスト教を伝えたフランシスコ・ザビエルの属する修道会が上智大学をつくったのですが、そのイエズス会が全世界に設立したすべての学校共通の教育の特徴、教育理念として、イエズス会の学校では、体育・スポーツは重要な科目であるとしっかり書いてあります。まさにこれは、”Men and Women for Others, with Others”の育成こそ重要で、「人のために人と共に生きる」ことを体験学習する科目として体育を高く評価しているのです。スポーツは必ず一人は勝者になるけど、他のみんなは負ける。

ほとんどの人は負けたり、失敗する。失敗したことを他の人が補う。いろんな助け合いをしながら、自分のチームを勝つという目標に誘う時に、必ず人と人とのかかわり合いが出てきて、そこで共に生きるということ。人のために奉仕すること、それを学ぶ教科だから大事だっていうことが書いてあります。しかもこの日本語訳は上智学院の理事長が翻訳したものです。この Men and Women for Others, with Others を育成するのに最適な科目は、キルト教人間学と保健体育だということになるのです。

そのあとに、日本学術会議の提言を載せておきました。この提言は、大体連で以前に報告していますが、日本学術会議が改めてこれからの大学の教養教育の中で、「非言語的な表現能力とコミュニケーション能力、これを形成するのに体育科目は大事だ」ということを記してくれていますし、「今の大学体育、大学教育自体が、知徳体のバランスを著しく欠いている」「特に体に関して。頭でっかちになりすぎているではないか」と記してくれています。この提言を日本学術会議が検討する際、検討委員会に体育人は一人も入っていないのです。日本学術会議のメンバーの方々がこういう提言を出していただいていることも私どもの必修をずっと今まで守ってこれたバックボーンともいえます。

さて、上智大学の必修科目「ウエルネスと身体」の中身ですが、二つの大きな目標を掲げています。1つは「ウエルネスの獲得」です。やはり生きていくうえで健康を保つことは大事だということです。その健康も「身体的、精神的、社会的に良好な状態」の獲得が重要です。ですので、例えば“社会的良好”を考える際に授業で取り上げるのが“ソーシャルコンボイ”です。自分にとって大切な人は誰かを考え、その人との距離を三重円の図の中に表現していきます。自分をとりまく人間関係は入学前と入学した後では変わってくる筈です。入学前、一番近い存在は親であったりしますが入学後は、友達やクラブの先輩や恋人に変化していきます。つまり、自分を取り巻く人間関係を見つめることは、重要な気づきを与えてくれるのです。自分に何があっても助けてくれる人、その外側でサポートしてくれる人、三重円で自分との関係を書くことにより自分にとっての必要な人間関係の構築ができているかを考えることも授業の課題に入れています。

それからいわゆるストレスマネジメントについても学びます。私自身の失恋、自殺未遂体験談を交えて、ストレス解消法の具体的方法を考えることも授業の一環です。

あともう一つ今大事な授業目標は身体の知、「身体知」の獲得です。この考え方は、正に慶應大学から始まったと記憶しています。私たちは現在デジタルでバーチャルな世界に生きている時間が長くなり、実感することが少なくなっています。また「科学知」だけを頼りに生き、自分の実体験で得られる「身体知」を軽んじてしまっています。この反省から、ブラインドウォークの様な目隠しをしてメンバーの一人と一緒に歩いてみることで視覚以外の四感を意識する体験など身体で感じ、身体で発信し、メディアとしての身体を体感するプログラムを「ウエルネスと身体」では大切にしています。

必修科目「ウエルネスと身体」では、4つの章を作り、各3時間ずつを割り当てています。実習＜身体のレッスン＞では、身体知を実体験し、その重要性を理解します。実習＜フィットネス＞はいわゆる体力要素の中でも持久力、筋力、柔軟性というスポーツをしない人でも必要な三つの基本的身体能力の維持向上法を体験し習慣化を目指すとともに、体組成計で自分の身体の分析を行います。理論＜健康のリテラシー＞では、世間の俗説に惑わされず、学術的に確かめられている身体の真実を知ると同時に、自分で自分にあったウエルネスライフスタイルをつくることを運動・食事・休養・ストレスマネジメント・人間関係を軸に考えます。理論＜スポーツと身体・身体文化論＞では、スポーツと身体の文化が人類の歴史の中で果たしてきた役割や影響を知り、オリンピズム・オリンピック憲章や、スポーツと教育、政治、経済、環境、ジェンダーなどとの関係を学びます。

体育が必修であることの必要性については、先ほど話をした通りですが、人間らしさを失わないための科目としても、アナログ文化の象徴的な存在である体育・スポーツは、それを実体験で学ぶことによる重要性の実感が、学生のアンケートで高い評価につながり、「なるほど役立った」、「自分はこれで変わった」とか、「気づいた」という感想につながっているのだと思います。

というところで時間がきましたので、これで発表は終わりますが、ご希望の方に「ウエルネスと身体」のテキスト『身体のリベラルアーツ』をまだ学期中で学

生に販売中なので、今校内で販売しているのと同じ値段830円で頒布いたします。このテキストは毎年全受講生の意見をアンケートで集め、授業の反省を行うと共に保健体育研究室全員で内容を毎回改訂してFDを行っています。とりあえず今、見本本を回覧します。
ご清聴ありがとうございました。

村山：師岡先生ありがとうございました。時間の関係もありまして十分にシンポジストの皆さんのご紹介もしないまま進めますけども、プロフィールは資料の方にございます。師岡先生はここに書ききれないほどの多彩なご活躍をしておられ、大学体育以外に、特に東京オリンピック・パラリンピックのお仕事をされていまして、大変多角的にスポーツを考えられている先生です。今回のシンポジウムでは、上智ではあえてスポーツを教える前にやることがあるという形で、この「ウエルネスと身体」という授業を必修でやるということを続けられてきているということでした。何かご質問あれば簡単に、一つ、二つ受けたいと思いますが。

水野哲也（東京医科歯科大学）：東京医科歯科大学の水野といいます。内容がなかなか意義のあるというか、我々が本当に基本的な理解をした上でやる、本当に基本の基本をまた改めて示しておられたかなと思うのですが、一つ先生にお聞きしたいというか、もし取られていれば、我々って教育効果を、要するにこういう内容をやったらこういう効果があった、短期的であったり、長期的であったりっていう。我々はそれも合わせてしないといけないかなと思っていて、この内容をやられて例えば前後とか、これが何年間か継続するとか、そういったような、今出たようなヘルスリテラシーの問題とかコミュニケーションスキルの問題とかっていうのがどのように変化したかっていうことが、もし客観的なデータをお持ちであれば教えていただけるとありがたいのですが。

師岡：ご質問ありがとうございます。大事なポイントを指摘していただきました。私は、体育授業の評価は知識を身につけるだけでは不十分で、学生自身の行動が変わらないと意味がないと思っています。ウエルネスにしても身体知にしてもその知識を得ただけで終わってしまったら本当の意味での教養、必修でやるべき教養教育にはならないと思っています。最近はやっていないのですが、以前は無記名の授業後の行動変容調査を行い、自分のライフスタイルがより良く変容し、スポーツに対する考え方、健康に対する考え方が変化した学生がより良く変わったと回答しています。いま正確なデータを持ち合わせていないんですが、83～85%くらいの学生がこの授業を受けたことによって考え方が変わったとか、少なくとも食生活に変化が出たとか、そういうより良い変化が起きたと回答していたと思います。言ってるだけで本当に変わってるかどうかはよくわかりませんけども、少なくとも本人の自覚としては行動がより良く生きるウエルネスの方向に変えることが出来た、と肯定的に評価しています。一方、この程度のことでは私の人生は変わらないって答えてくる学生も数％は必ずいます。また、必修でなくて良いと答える学生も1クラス平均0.5人はいたかと思います。詳しいデータは探しておきます。

村山：他によろしいでしょうか。では先生ありがとうございました。次に進みたいと思います。続いて筑波大学の木内先生。

●大学体育の論と証拠と満足度

木内敦詞（筑波大学）

皆さんこんにちは。筑波大学の木内でございます。どうぞよろしくお願いいたします。今日はこのようなチャンスを与えていただき、ありがとうございます。本日のテーマ「大学生をどう育てるか？　教養体育からの発信」に関して何を話そうかと考えた結果、「大学体育の論と証拠と満足度」ということでお話させていただくことにしました。

まず、結論を最初に申し上げますと、大学に体育がある理屈としての「論」、それを証明する「証拠」、さらに学生の「満足度」、これら三位一体なる大学体育授業をめざしましょう！ ということです。私は今年で大学体育教員24年目になりますが、こう思い至ったこれまでの経緯、私の反省をお話しさせていただきます。「論より証拠」というのはよく聞く言葉です。以前、ある非常勤の先生とこんな会話がありました。「木内先生。シラバスでこう書いてくれ、ああ書いてくれといろいろ言われますけど、結局は学生にスポーツを上手

くさせたらそれでいいわけでしょ？　その学生が＜この授業を履修してよかった＞と言ってくれたら、もうそれでいいのではないですか？　論より証拠でしょ。」と。確かにそういう部分（技能上達と学生の満足度）も大切にしないとダメなのですが、それだけだったら大学の授業でやる必要はないだろう（テニススクールとどう違うのか）と思うのです。今日は大学体育の「論」と「証拠」と「満足度」。この３つについてお話しさせていただきます。

これが私の「論と証拠と満足度」曲線です（図２）。先ほど師岡先生からもお話のあった大学設置基準大綱化のあった1991年に、大阪工業大学一般教育科の助手に着任しました。当時の私は、教員というよりも野球部の指導者として採用されたようなもので、体育の授業はといいますと、実は学生と楽しく遊んで、それで私自身もすごく満足していました。私にとっても学生にとってもソフトボールや卓球をして遊んで、楽しくてそれでいいじゃないか、ということでやっていました。ただそこに一体どういう教育効果があったのだろうかと今振り返ると、なかったのではないかとはっきり思います。そういうことで、当時大学体育に関する私の「論」は、10段階の１くらいはあったかもしれませんが、「証拠」はゼロ。一方の学生の「満足度」というのはとても高かったと思います。当時はまだ学生による授業評価アンケートはありませんでしたが、あったらすごかっただろうなという気がします。その後、だんだん年月を経て、野球部の監督をしているどころではなくて大学の体育授業や自分の研究をちゃんとしなければならないと、そう考えて現場とは離れた副部長・部長の形で野球部に関わるようにしました。授業では体力測定をいろいろやったり、講義で筋肥大の仕組みなどを採りあげて、これで大学の授業っぽくなっただろうと、そういう自己満足をしていた時代もあったりしました。その後、1999年から「体育の宿題」という日常生活での課題を併用する授業を始めたりして、教育効果を狙う授業らしくなっていきました。しばらくして大学体育の論と証拠を徐々にそろえていくことができたのですが、一方の学生の満足度は確実に低下していったのではないかと思います。授業評価アンケートではそんなに低い評価ではないのですが、学生の様子を見ていると、ただ遊ぶ体育授業をしていた時の学生と比べると、どうも学生が生き生きしていない。そんな気がして、

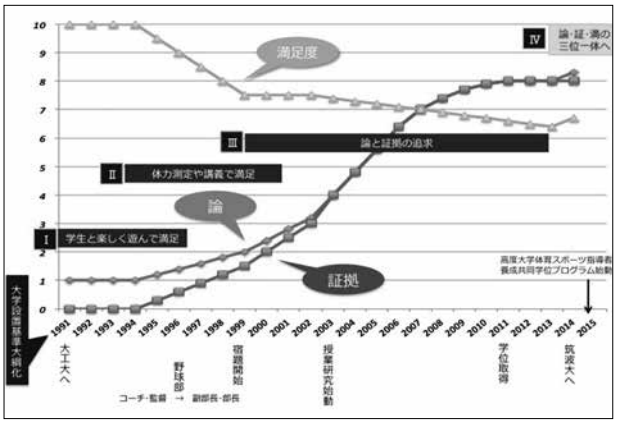


図２　大学体育に関する「私の論と証拠の自己評価と、受講学生の満足度」曲線

図３　Kirkpatrickの４段階評価モデル

その矛盾とこれまでずっと付き合ってきたような気がします。

ここで学生の授業「満足度」に関して、１つ情報を紹介したいと思います（図3）。これは、カークパトリックというアメリカの経営学者が提示した４段階の評価モデルです。最近では企業の研修において、その研修の評価に使われたりしているので、企業の方はこの辺のことをよくご存じです。このモデルでいうと、「反応→学習→行動→結果」の第一段階の「反応」というのが受講者の満足度評価ということになります。いわゆる大学で行っている授業評価アンケートがこれで、４段階の第１段階でしかないということですね。非常に大事ですが、この一つだけで私たちも満足してはいけない。第２段階が「学習」で、知識やスキルをどれだけ理解したかということです。これまでは体育の授業であっても最近、多くの大学で実施しているではないでしょうか。次の第３段階の「行動」は、得た知識やスキルを活用しているかということです。先ほど師岡先生のお話にも出てきましたが、行動変容まで学生を導いて

いるかどうか。さらに第4段階の「結果」は、組織などへの影響度、つまり自分たちの体育授業を受けた学生が行動変容するとともに、さらにそれが周りの友達や家族や職場などの組織に波及しているか。そういうところまでみることがカークパトリックのモデルでいう第4段階の評価なので、学生の満足度だけで評価するのはこの4分の1だということになります。

先ほど「論」と「証拠」の話がありましたので、ここでは大学体育をしたほうが断然いいということを支持する10の知見を挙げさせてもらいました（図4）。チェックマークがついているところは後ほどデータを示しますが、それ以外にも、大学生の生活習慣が非常に悪かったり、あと生活習慣と修学状況が関係しているとか、あるいは最近ではGPAと体力の間に正の相関があるとのデータも出てきたりしています。あと、低体力者は必修の体育しか履修しない（体育が選択であれば履修しない）ことが指摘されていたり、最近では週1回の体育授業でも体力を高めることができるという知見が出てきたりもしています。では、このチェックマークが入っている3つの知見（大学体育を実施した方がいいことを示唆するデータ）を紹介させていただきます。

まず、図5は、ある大学で1998年に体育授業が一切なくなった途端、それまで6%程度で推移していた初年度退学率が一気に倍増の12%になり、その後も継続したという事例を示しています。体育授業の廃止ということ以外にも要因はあるかもしれませんが、時期がドンピシャということで、これは無関係とは決して言えないのではないか、という状況証拠です。

そしてもう一つ（図6）は大学1年生の最後の授業時に、「この1年間を振り返って、友達づくりのきっかけとなった授業を挙げてください」という質問に複数回答してもらった結果です。数ある授業の中で、少人数教育の「英会話」「基礎ゼミ」が挙げられていましたが、それ以上に「体育」は9割の学生が友達づくりに貢献した科目として一番多く挙げていたということです。

体育授業というのはよく「ガス抜き」だといいますよね。確かに大切な要素ではありますけど、ここでは敢えてストレスマネジメントとしての身体活動あるいは体育実践、という言い方をさせていただきます。図7の縦軸は大学生のメンタルヘルスに関する抑うつスコアです。このスコアが高いほどメンタルヘルスが悪い、抑うつという深く沈んだ気分、そういうメンタルヘルスの状態を示します。8点以上で疑診、11点だと確診と判定されます。この抑うつスコアを運動ステージ別にみると、このような結果になりました（図7）。運動ステージとは、運動行動に対する実際の行動や準備性を5段階に区分するもですが、それが最も低位な人、すなわち前熟考ステージに分類される「現在運動してないし、この先もするつもりは全くないと言い切っているような人たち」は極端な身体活動不足になっていることが予想されます。彼らだけが他のステージ

図4　「大学で体育をしたほうが断然いい！」を支持する10の知見

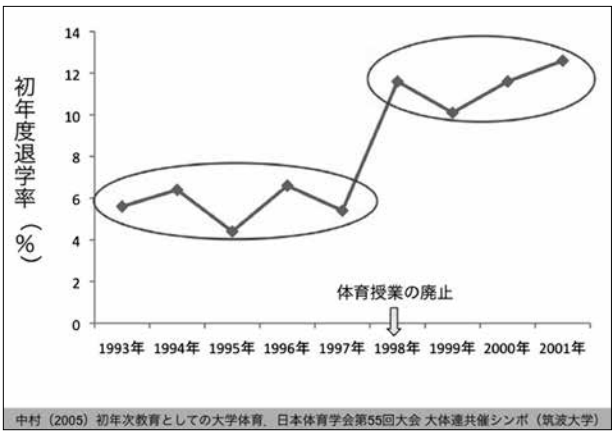


図5　体育授業廃止と退学率増加が同期

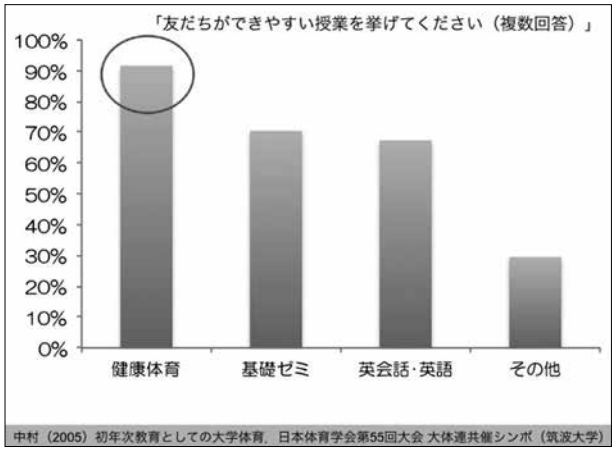


図6　友人形成の場として最も機能している大学体育

の人たちと比べて有意に高い抑うつスコア、つまりメンタルヘルスの状態が悪いということがわかりました。体育履修が一番必要なこういう人たちが、体育は必修じゃないと履修しないということです。近年の運動疫学研究は、体力を高めることの重要性を支持する証拠を次々に出しています。私たち体育教員は、このような運動疫学研究による知見を基に、体力増強の意義を説明できなければなりません。ですがこれだけでは不十分で、体力増強以外の身体活動そのものの効果、すなわち人間関係づくりやストレスマネジメントに体育は効果を発揮するのだということも、私たち体育教員は大学当局にしっかり提示していくべきだと思います。そういうことからこれまで私は、初年次教育としての体育ということを強調してきました。

ティントによると、初年次教育は大きく2つ（図8）。まず、学問的な適応ということで、大学に入ってしっかり単位を取って授業がわかるということ。もう1つは、社会的な適応ということで、人間関係についての適応、気の置けない仲間をしっかり持てるかどうか。この2つがそろわなかったらなかなか大学生活に馴染んでいけない。大学入学後のそういった不安な初年次にこそ、体育というのは友達づくりの場として直接的に社会的な適応に貢献できるし、さらに健康づくりということで健康教育をしっかりすることによって、（生活習慣が良好な学生ほど単位をしっかり取っている、というデータがあったりしますので、）健康づくりを通して間接的に学問的な適応に貢献できる。そんな役割があるということです。一般にこちらの人間関係への貢献はすぐに納得してもらえます。ですが、こちらの健康づくりをしっかり体育授業でやれているのかということになると「？」という見方をよくされるので、まずはこちらの健康づくりを体育はしっかり行っているのだという論と証拠を示そうと考えました。

そこで私は、体育でも宿題を出してみようと考えました（図9）。体育授業というのは授業時間内での実技とか講義だけでやろうとしてしまうのですが、授業時間外の日常生活の中でいかに健康行動を増やすことができるか、食行動、身体活動を含めた健康行動ができるようになるかということを含めてみよう、ということです。

これを行うことによって、行動変容といいますか、朝食の摂食頻度の低下が抑制されたり食事や睡眠の規則性が改善されたり、さらに身体活動・運動を継続できる見込み感やそのメリットを自覚する心理的な効果とか、あるいは筋持久力といった生理的な効果、さらに実際の行動すなわち日常生活での歩数や身体活動量、こういったことが有意に改善されるということがわかりました（図10）。このような授業を行った結果、大学体育授業による健康づくりの論と証拠がある程度そろってきたわけです。

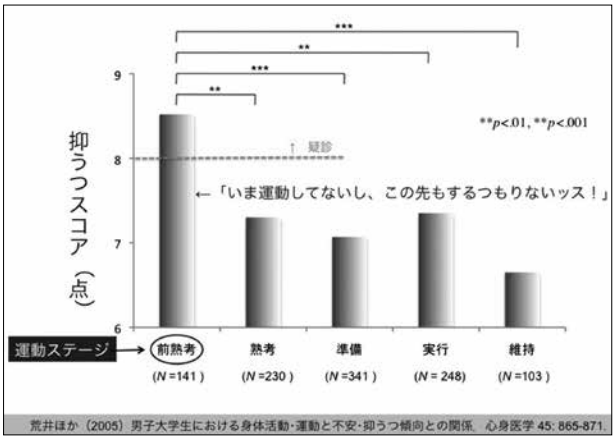


図7　ストレスマネジメントとしての身体活動の必要性

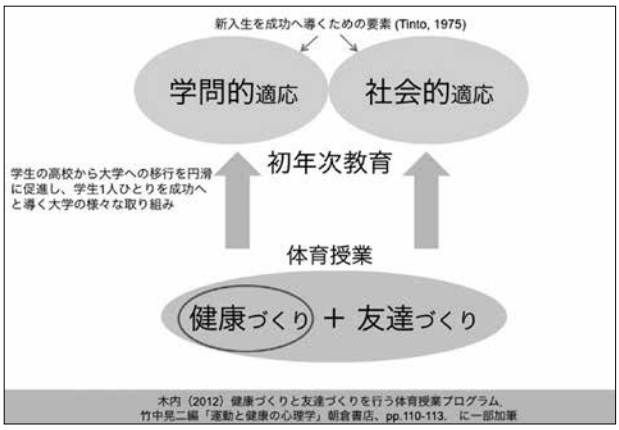


図8　初年次教育としての体育授業

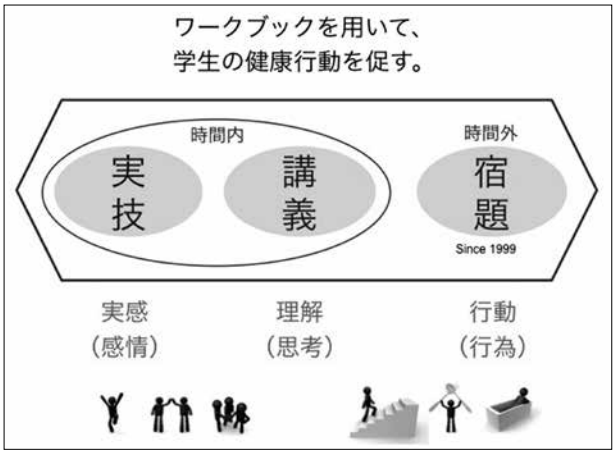


図9　宿題を含めて、体育授業ととらえる

そこで、学生たちはどういう評価をしてくれるのかな、ということで、「この授業の受講を通して得たもの・こと（メリット）を挙げ、あなたにとって重要と思う順に番号をつけてください」という質問に回答してもらいました（図11）。一般的な体育授業で同じ調査を行ったら、学生から見た体育授業の効用認知項目としては、運動実践そのものとか運動技能、体力向上が上位に来るのだと思います。私の授業ではどうかというと、一番力を注いだ健康づくりは2位で、1位は友達づくり、なんですね。学生はこのように体育授業を見ているということです。大学で体育が必修であることの論と証拠を持とうとすると、私たち体育教員は健康づくりばかりを強調しがちですが、やはり友達づくり、これも絶対捨ててはいけない、ということを教えてくれた結果だと思います。ただその、友達づくりを体育授業がしようとした時に「ちょっとそれ幼稚くさい言い方じゃないですか」とよく言われます。なので、私はいろいろ考えましたが「ライフスキル」という言葉を使って説得してこうと考えました。

ライフスキル（図12）というのは、普段の日常生活の中で起きるいろんな問題に上手に対処していく能力です。これはここに示すような個人的なスキル以外に、このような対人スキル、いわゆる社会的なスキルを含む、学習可能な心理社会的なスキルということで、「生きる力」に極めて近い概念です。これを高めるような授業として、毎回の体育授業終了時に、授業中の「スポーツ経験」を振り返り記述させるということを行っています。「自己開示」「他者協力」「挑戦達成」「楽しさ実感」という4つの経験がライフスキルの向上に貢献するということを、兵庫教育大の島本好平先生が縦断的な研究から明らかにされていて、それに基づいています。なかでも、自分の気持ちを他者に伝えるという「自己開示」が一番重要なようです。加えて他者協力、挑戦達成、楽しさ実感。こういった4つの経験に着目させて、その経験を具体的に記述・発表させて、ということを授業の中でやっていきました。この写真（図13）がその様子です。体育授業では一般に、整理体操をしてケガ人の有無を確認し、終了。という流れですが、授業の最後に息を整えながら少しの時間をとって、その日の試合の結果を集計したり、その日の経験を書かせたり発表したりという、まとめの時間を設けるわけです。こういうことをすると、それをしないで終わった授業

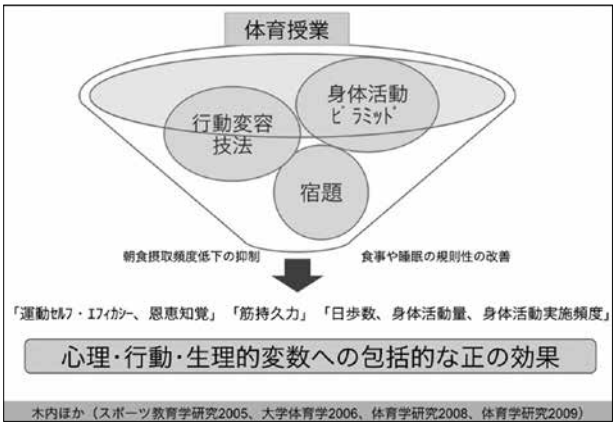


図10　行動科学に基づく宿題型体育プログラムは大学新入生の健康行動を改善する

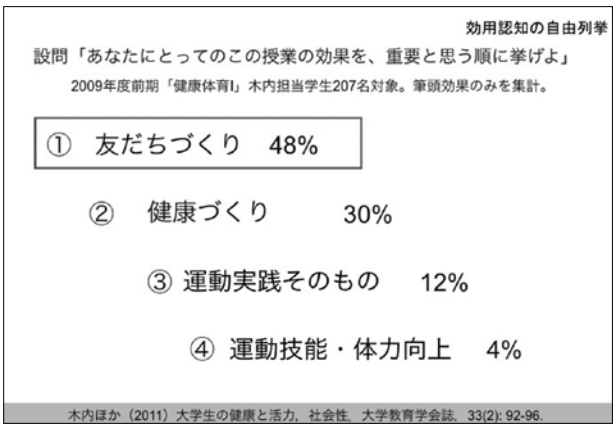


図11　体育授業の心理社会的な効果

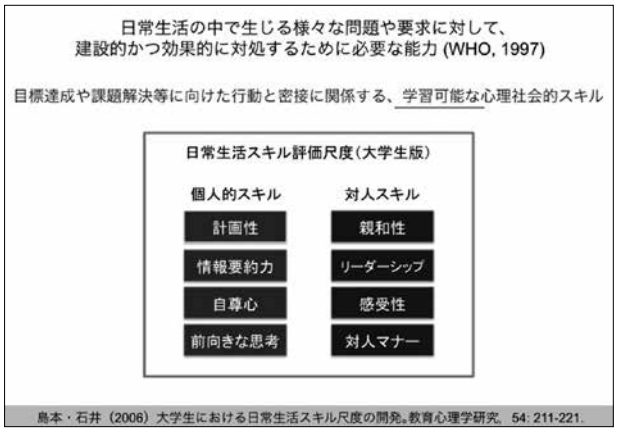


図12　ライフスキル

よりも、自己開示、他者協力、挑戦達成、に関する経験のスコアは高まったのですが、ライフスキルそのもののスコアには変化はみられませんでした。なかなかうまくいかないということを、今年8月に東京で開催されたASPASPというスポーツ心理学の学会で発表しました。

ライフスキル獲得には現段階では芳しい効果は発揮できていないものの、身体活動を含めた生活習慣改善

に一定の効果が確認できましたので、宿題やワークブック利用を非常勤の先生方にも統一して使ってもらうことにしました。私学というのは授業担当の非常勤依存率が5割以上と高いので、いかに非常勤の先生の授業をマネジメントするかということも非常に重要です。授業評価アンケートや健康行動変容などを現在分析中なので結論づけてはいませんが、順調ではありません。非常勤の先生方も、やれと言われたからやっているという感じもあるのだと思います。こういうシラバス、こういう教材を使って授業をやってくれと非常勤の先生方に渡しても、それだけではうまくいかないということです。どんなふうに教えるかということも含めたプログラムを考えていかなければダメだということなのかもしれません。

そこで今日は最後に「インストラクショナル・デザイン」を紹介したいと思います。教える方法の技術と科学の総和をいいます。教育工学の中の一つの分野で、効果的、効率的、魅力的に教える方法の技術と科学です。技術だけでもなく、科学だけでもなくその総和というところがすごくいいですよね。そして、この「教える方法」というのは、イコール「学ぶ方法」なので、学生にとっても私たち教員にとっても非常にメリットのある視点を提供してくれるわけです。ぜひ皆さん、インストラクショナル・デザインを調べていただきたいと思います。運動スキル、認知スキル、態度スキルにはそれぞれに適した教え方がある。みなさんドキッとしませんか？　論と証拠と満足度、三位一体の大学体育へ向けた問題解決の糸口として、私はこのインストラクショナル・デザインを捉えています。代表的なインストラクショナル・デザインのモデルを挙げました（図14）。1970年代から80年代に構築されて今も進化を続けているようです。古典的にはこの「ADDIEモデル」とか「ARCSモデル」とか「ガニエの9教授事象」、このあたりは聞いたことある人がいらっしゃるかもしれません。最近、言われてきているのがこの「メリルの第一原理、5つ星の教え方」です。この5つ星の教え方を自分の授業に置き換えて実践するだけでも授業改善されると思うのです。こういったことを含めながら体育授業をすることで、効果的に、効率的に、そして魅力的にということを忘れずに授業できるのではないかと考えています。（図15）

最後に図1を再び見ます。私の「論と証拠と満足度」

図13　ライフスキル獲得に関連する4つの経験

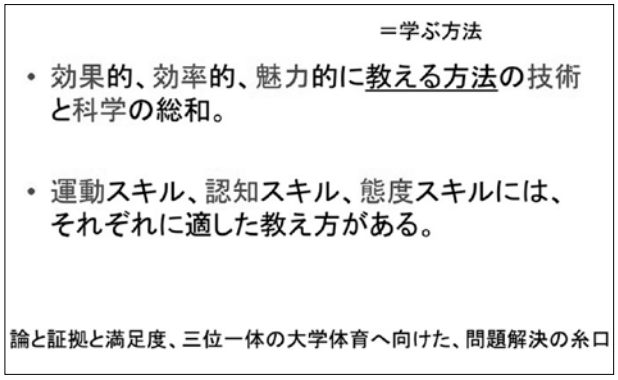


図14　代表的なインストラクショナルデザインモデル (1)

図15　代表的なインストラクショナルデザインモデル (2)

曲線のここの最後のところ（2015年度）が少しだけ上がっています。これは、いま紹介したインストラクショナル・デザインというところに私が行き着いたということで、大学体育の存在意義を説明する「論」と学生「満足度」を少し改善できそうだという見込み感を表しています。来年から、私は鹿屋体育大学との共同学位プログラムのなかで、大学の体育教員の養成を行う運びとなっております。このインストラクショナル・デザインを授業研究や演習授業の中に組み入れながら、自分を磨くために、学生を磨くために、しばらく打ち

込んでいきたいなと思っています。以上です。今日はどうもありがとうございました。

村山：木内先生ありがとうございました。先生はご自分でグラフを作られていましたけど、24年の間にかなりの大学教育に関する研究をされておりまして、大変多くの業績をお持ちで、また違った観点で私も聞いたことのないような言葉もたくさん出てきておりますので、また最後に総合討論でいろんなことをお聞きしたいと思っております。ちょっと時間が押しておりますが、何かこの場でご質問ある方いらっしゃいますか。

関根謙（慶應義塾大学文学部長）：慶應大学の関根です。今日はどうもありがとうございます。お聞きしたいのは、ライフスキル獲得への寄与の段階で顕著な効果がみられなかったということをおっしゃっていたと思うのですが、これ非常に面白い感じがします。もう少し説明をいただければと。

木内：質問ありがとうございます。ライフスキル獲得に寄与するとされる4つの経験、これに目を向けさせることには成功したわけですけども、それだけだったのだと理解しています。私としてはこれらライフスキル獲得に寄与する経験に関するネタをいろいろ仕込んだつもりではあったのですが、まだまだ不十分だったのだということです。学生も確かにこういう部分もあるね、こういう経験はしたね、ということでは変化してはくれましたけど、この変化も劇的ではない。確かにある程度の効果サイズはありますけども、そんな顕著なものでもない。なので、これがもっと高いそれぞれの経験の変化率をもってすれば、ひょっとしたらライフスキルも変わってくるのかもしれません。4つの経験に目を向けさせただけで、それぞれの中身自体がまだまだ足りなかったんだろうなというところです。ちょっと不十分な回答かもしれませんが……。

村山：ここが大事なところかもしれませんけど、この4つの項目は島本先生が開発されたものですよね。それでライフスキルのアンケート自体は、例えば10のライフスキルのチャートからいったら、先生オリジナルで変えたのですか。島本さんの質問紙を？

木内：慶應大学で使われている、島本先生の「アスリートのためのライフスキル10項目」ではなくて、同じく島本先生の「日常生活スキル評価尺度大学生版」のほうを使っています。アスリートのためのライフスキル評価の10項目の方が、敏感に反応するのでないかと思っています。

村山：わかりました。ありがとうございます。それでは、時間もありますので次へ進めさせていただきたいと思います。先生ありがとうございました。じゃあ、続きまして田簑先生お願いいたします。

●体育が育てる大学生――ミャンマーの伝統スポーツ「チンロン」を教材として――

田簑健太郎（流通経済大学・大体連関東支部長）

流通経済大学の田簑と申します。本日は、現在大学体育連合関東支部の支部長をさせていただいていつ関係から、お声掛けいただきありがとうございます。

まず、お断りさせていただかなければならないと思うことがあります。それは、これまでお二人の先生がご発表をされました。私も一番前で聞いておりましたが、

大きく違うなと思うのは、私の専門は今日の資料の方に書いていただいておりますけれども、歴史とスポーツ人類学が専門でございまして、ちょっと視点がこれまでの先生と違うかな思っております。ご容赦いただきたいと思います。

たまたま現在関東支部長をやらせていただいている関係で、毎年研修会を開催する中で、どのようなことが今の教養体育をお持ちの先生中心に必要かと、そういったことを考えながら研修会を開催させていただいていたという経緯をまずお話させていただきたいと思います。本日は体育が育てる大学生ということで、実は私の勤めております流通経済大学で、ニュー・スポーツ実習、ゼミ、それ以外に今日参加していただいておりますが、一般体育を持っていただいている先生に、ミャンマーの伝統スポーツなんですが「チンロン」というものをやってもらっています。たぶん、チンロンと言っても、今日ここにご参加の方は全くどのようなスポーツかわからないという状況だと思いますの、後で映像を見ていただければと思います。

まず、本学の状況で恐縮ですが、流通経済大学は2つのキャンパスに約5000名が在籍しており、全部で5学部ございます。建学の理念、これもあまり知られていないのですが、もともと物流の日通が作った大学でして、学校法人は日通学園と申します。その日通が作った、流通経済大学の建学の理念は「流通経済一般に関する研究と教育を振興して、わが国経済の飛躍的発展を図るとともに、深く人文科学を攻究し、教養ゆたかな、視野の広い指導的人材を育成して、国民経済の健全化と福祉の増進を図る」となっています（図16）。ホームページにも載っています。そういったところで、いわゆる体育・スポーツの専門学部であるスポーツ健康科学部を設置して、大学名が経済大学、学部にスポーツ健康がある、なんという大学だと。普通はそう思われると思います。ところが、平成16年4月にスポーツ健康学部を開設したんですけれども、すでにありました4学部では教養体育が必修でした。ずっと必修でやっていたんですけれども、2004年4月に千葉県の新松戸にキャンパスを開設しました。その新松戸のキャンパスの敷地が狭いものですから、スポーツ関係の施設が作れないということで、龍ケ崎にいる学生は必修で新松戸にいる学生は選択でということはなかなかできないものですから、徐々に選択になって、今も選択の

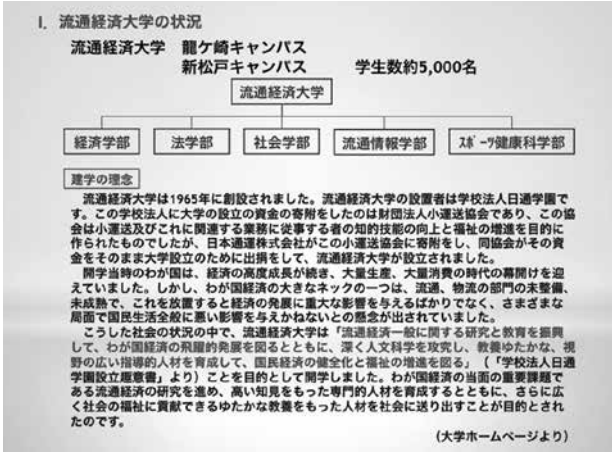


図16　流通経済大学の理念

状況です。では、スポーツ健康科学部の方は、いわゆる体育系の学生が入ってきているのかというと、実はそうでもないというか、そうは言い切れない。と言いますのも、入試そのものに従来の体育系大学とは違って実技という試験科目を課しておりませんので、実際に授業・実技などをやりますと、かなりレベルの差が生じる。ですので、実技担当の先生方は非常に頭を悩ませているところだと思います。これは専門学部であってもそういう現状です。つまり、専門学部だからといって、教養体育、一般体育とまったく異なる高いレベルでは決してないと言うことです。ちなみに、スポーツ健康学部に限らず入学者の多くは地元の茨城県、千葉県出身者でございます。

こうした大学において普段、学生たちに授業をしているわけですが、感じることがあります。これはあくまで科学的な分析をした訳ではないのですが、この流通経済大学に勤めてちょうど10年ですけれども、この間、学生をみていて、あるいは学生と接していて、現場の感覚としましては、非常に自己中心的な学生が多いなと。

そして、関東支部長として、また以前も事務局長として関東支部の活動に携わっていたのですが、これまでの体育授業と大学体育連合の取り組みを簡単にみてみると、中学、高校で実施されている実技科目、この延長が非常に多いなと感じます。大学生ですからもう少し高度なというところで戦術を学生が主体になって考える、あるいは生涯にわたってスポーツに親しむ姿勢・態度これを育成する、さらにはマナー・ルールそういったものを高校生までには十分でなかった部分を、大学でやっていくんだという話しもよく聞いておりました。

私は体育系大学出身ですけれども、学生時代にはそ

のような話しをしてもらった記憶があります。それから大学体育連合の取り組みとしまして、同じように全国研修会、それから関東支部でもやってまいりました、あるいはそれ以外の支部でも毎年研修会をやっているんですけれども、これまでに全国研修会で実施されたスポーツ振興はゴルフ、ボードセーリング、ノルディックウォーキング、パラグライダー、スナックゴルフ、タラソテラピーなどがあります。関東支部でもやってまいりました。ちょうど関東支部は当時の理事、本日も見えられていますけれども、いろいろなことをやろうということで、日本舞踊、インドア競技、テニス、ヨガ、コーディネーショントレーニングを研修会としてやってきました。これらは、総称していうと従来のスポーツ種目ではない“目新しいスポーツ”を研修会の種目として採用してきました。（図 17）

特に、2、3 年前だったと思うのですが、東海支部でやったときにはパラグライダーをやっておられました。実際、大学体育の授業でパラグライダーができるかどうか、かなり難しい状況ではあると思うのですが、そういったことがされました。で、今回、私のところの授業で導入している「チンロン」をここで見ていただきたいと思います。あまり授業の映像で良いのがなかったので、youtube ででているものです。基本的にチンロンは 6 名で行うスポーツです。

＜映像＞　チンロンの実際を上映

全部見ると、かなり時間がかかりますので、十分ではないのですが、いまのがチンロンです。なぜこのチンロンを授業で導入したのかといいますと、まずチンロンは 1500 年の歴史をもつといわれています。そして、6 人一組で行う、それから 6 種の基本技と応用、つま先、インサイド、ひざ、足の裏、かかと、アウトサイドといった部分を使って行います。何よりもいま映像を見ていただいた際に、選手に注目をしていたと思うのですが、実は周りにものすごい観客の数の方いらっしゃいます。ミャンマーですので、現代的な遊びがありません。したがって、チンロンがあるとものすごい数の方が見に来られる。チンロンの楽しさ、醍醐味は観客を楽しませることにあります。ボールを落とさないだけであれば、ふつうに蹴ればいいのです。しかし、いろんな蹴り方をしていたのがおわかり頂けたと思うのですが、あれは見ている方にすごい技をみせる、そうするとみている方もものすごい拍手をするんですね。

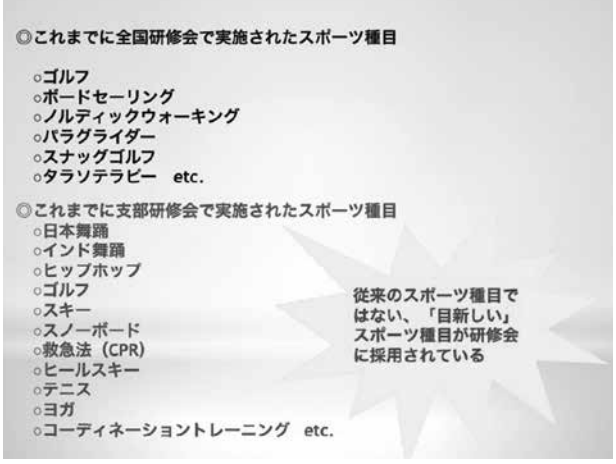


図 17　取り組んで来たスポーツ種目

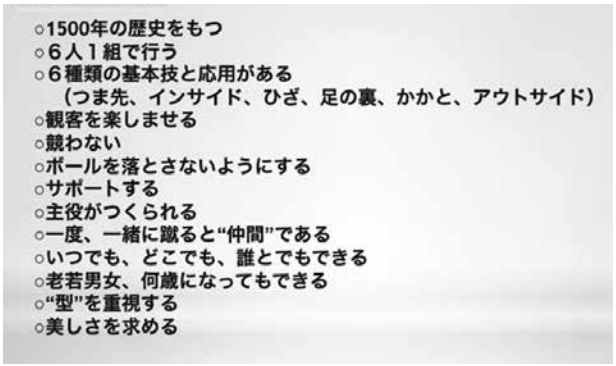


図 18　チンロンの特徴

基本的には競わない。「ワインチン」というのが先ほどの映像で、祭りがポエというんですけれども、それがチンロンの一番の楽しみです。しかも、真ん中に 1 人入って蹴っているようにみえたと思うのですが、実はルールは決まっておりません。誰かが真中で蹴るしかないんだ、あるいは蹴らなければならないということは全くなく、流れの中で 1 人が蹴る。蹴っていると勝手にメンバーの中の 1 人が中心になる。それを主役と呼んでいるのですが、主役が作られる。周りの人間はサポートする。加えて、ひとたび一緒に蹴ると仲間意識が非常に強い。というのは、ミャンマーに行けばそれを感じることができます。いつでもどこでも誰とでも蹴ります。今風だと思いますね。歳も関係なく、何歳になってもできるというのも特徴だと思います。もうひとつの特徴は「型」。これは日本の柔道や剣道をイメージしていただければわかりやすいのですが、実は、チンロンは型を非常に重要視します。それともう一つは美しく蹴る。このことが重要になります（図 18）。こういった特徴をもっているチンロンを授業の中でやってみようということで、簡単ですが、授業の中でどのように導入したのかご紹介したいと思います。

まず型の練習を少しさせます。90分間すべてを型の練習をさせますと次の授業から学生が出てこなくなりますので、最初は少しだけやりまして、次に2人組でちょっと蹴って、技をお互いにやってみて、4人組でやって、最後に6人組で蹴る。技がたくさんありますので、5、6個を2人組やチームで練習します。（図19）

補足ですが、もう一つチンロンを授業に導入しようと思ったのが、先ほど蹴っていたボールが籐でできていることです。籐で作られているため、サッカーボールのようにバーンと力一杯蹴ると一発で籐が折れてボロボロになります。ですから、丁寧に扱う、折れたらテーピングで巻いてまた補修して使って、どんどん使っていくとどんどん柔らかくなって蹴りやすくなる。これは物を大切にするということを授業の中で簡単に伝えることができると思います。時間もあまりなくなっていると思いますが、これまでの教養体育の目標を全く否定するつもりもなく、新しい試みとして、伝統スポーツを取り入れてみるのはどうかということで、関東支部の研修会でもやらせていただきました。そして、授業でもやっています。特に東大や京大でも、学生さんがなかなか留学しない、そういった状況はニュースで出ていますのでご存知の方も多いと思いますが、じゃあ、日本にいながら逆に外国の、あるいは民族固有のスポーツを授業に持ち込んでそこで経験してもらって、興味を持ってもらう。先ほど、つま先、それからインサイドという言い方をしましたけれども、普段、授業のときには、きちんと「チービャー」、「チークィン」、「ドゥ」などのミャンマー語を使って教えます。ただそれ以外のことまでミャンマー語を使いますと学生が全く理解しませんので、ポイント、ポイントだけミャンマー語でやると、少しミャンマーに興味を持ってもらえる。実は10月の終わりから11月はじめにかけて、チンロンの第1回のアジア大会がありました。日本代表として、大慌てでチームを作りまして、代表選手団をおくってきました。私も一緒に行きましたが、うちの学生も2名。たぶんチンロンをやっていなければミャンマーには絶対に行かない。でも2名が行って、そこで生活をしてミャンマー料理を食べて帰ってきた。ひとつの授業でしたけれども、そういった外国に対して興味を持つ、あるいはそこの民族のスポーツを理解するということが少しできたかなぁと思います。

最後になりましたが、チンロンを中心に社会に対して興味を持つ、あるいは歴史に対して興味を持つ、そして経済に、いまミャンマーのことを知ったら経済が必ず出てきます。最後のフロンティアという言葉が必ずでてきます。そういったことにも興味を持つ。当然、チンロンをやるとものすごい運動量です。これまでの一般体育、教養体育が目指してきた健康ということもキーワードで、チンロンが他の分野、つまりもっと違う言い方すると、スポーツが違う分野ともっともっと密接に結びついていけるのではないか。そうすることによって、大学生がおのずとしっかり育っていくのではないか、あるいは教養体育・一般体育の必修ということをもう一度真面目に考えていいのではないかと思うのが、私の意見です（図20）。長くなりましたけど、ありがとうございました。

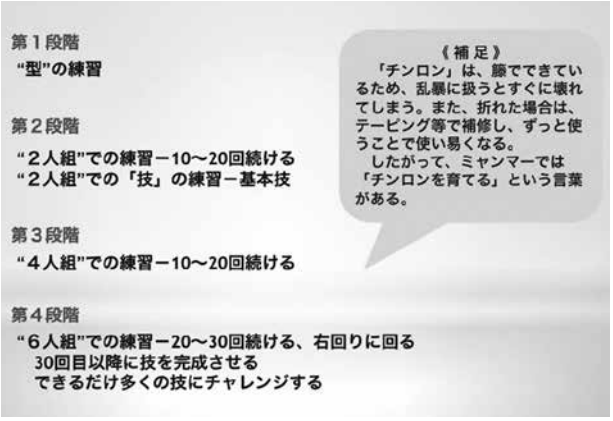


図19　チンロンの授業への導入

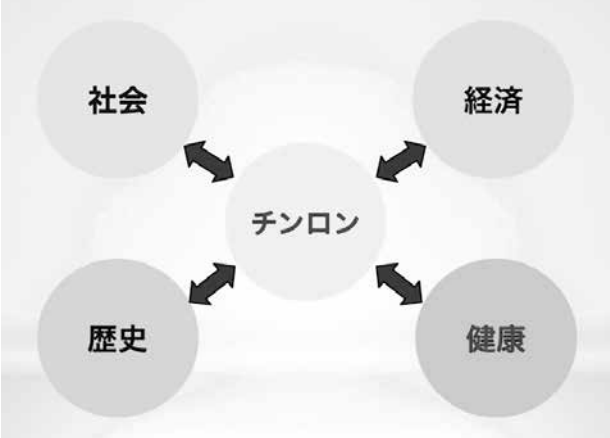


図20　チンロンを通した教育のイメージ

村山：田簑先生ありがとうございました。チンロンはですね、後ろの受付の所に置かせていただきました。私も大学体育連合の研修でやりまして三つ譲っていただきました。今、一個は学生が気に入って持ってっちゃってるんですけど。国際化であったり、グローバルというキー

ワードが出てくる中で、まだ小さな取り組みかもしれませんが、とてもヒントがあるなと思いまして、私もぜひこの話をしてくださいという風に田簑先生にお願いをした次第であります。簡単に質問があれば受けますけども、時間が押してますので。よろしいですかね。また後ほどいろいろとお聞きしたいと思います。田簑先生ありがとうございました。それでは、4人目最後になります、慶應大学の石手先生お願いします。

●活力ある塾生の育成

石手靖（慶應義塾大学体育研究所所長）

只今、ご紹介頂きました慶應義塾大学の石手と申します。昨年10月より前任者から引き継ぎ、体育研究所の所長をしております。その立場もあって今日、最後に4番バッターとしてお話をさせて頂きます。先ずはこのようなチャンスを頂きありがとうございます。それから主催者の一人として、こんなに多くの皆様に慶應義塾大学の日吉キャンパスにお越し頂き本当にありがとうございます。重ねて御礼申し上げます。

今日は「大学生をどう育てるか～教養体育からの発信」ということで、シンポジストの先生方と事前に2回程打ち合わせをしました。絶対に一人ずつの講演にならないようにということで、一人15分ずつ4人で1時間という予定でした。が、もうすでに3人で1時間が経っていますけども。結局一人ずつの講演会になってしまいました（笑）。そこで私からは最後ということでシンポジウムですから、フロアの方とディスカッションをしたいので少し手短にお話をしていければと思います。

私が今日お話をするのは、一つは慶應義塾大学が実際に行っている教養体育についてです。あまり慶應義塾大学では教養体育という言葉は使いませんけれども、我々が実施している授業についてと、少しでも多くの塾生に履修してもらいたいということで作りました「当世塾生気質（かたぎ）」というパンフレットについてです。それから体育の授業ではなく、体育・スポーツの要素で塾生を育てるという試みをしていますので、そのイベント、特に最近行った特徴的な2つのイベントを紹介します。それから二つ目は、少し慶應義塾の歴史を振り返りまして、慶應義塾の体育会、そのあり方、その発足当初の目的とかをお話して、その伝統が今も息づいているのではないかというような話をします。大学は人格の形成の場として機能しなくてはいけないということをお話したいと思います。

図21は体育研究所で数年前から掲げています目的・目標です。「未来を切り拓くための行動力に溢れた塾生を育てる」という、これは我々所員一同、授業とかイベントとかいろいろな場面で「行動力」ということをキーワードにしていこうというものです。ここにありますように、塾風の涵養、要するに慶應義塾大学で学んでいるという、そこに誇りをもってもらいたいし、多くの先輩達がいる大学ですのでその学風というものを感じてもらいたい。そのように考えております。

図22の左側にあるように、身体運動教育の場として体育実技。キャンパスの内外のスポーツ振興ということで、後でお話をしますスポーツ大会あるいは施設の開放とかの授業以外の場面で慶應義塾大学は体育の教育に取り組んで、体育の意味を学生に伝える、そういうスタンスでいます。先程お話した先生方からも体育の授業は「選択か、必修か」という話題がありましたけれども、慶應義塾大学は今、日吉のキャンパスでは選択です。しかし、必修だから学生が取らなくてはいけないという姿勢ではなくて、選択でありながら多くの学生にその重要性を理解させて、それがスポーツであったり、あるいは健康運動の活動であったりという

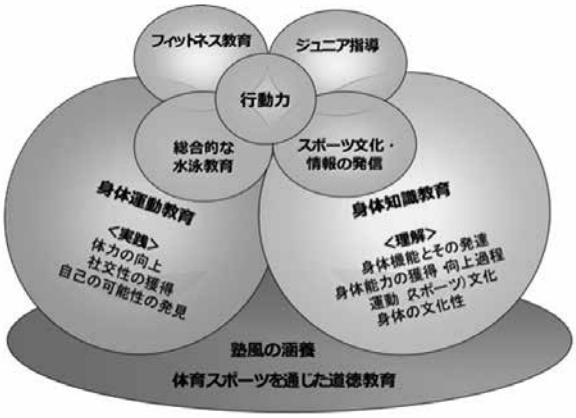


図21

「未来を切り拓くための行動力に溢れた塾生を育てる」

身体運動教育の場	身体知識教育の場
☆体育実技 ☆キャンパス内外のスポーツ振興 施設開放 スポーツ大会・セミナー 他機関との連携の場 学生総合センター 体育会	☆体育学講義・演習 ☆シンポジウム・セミナー・公開講座 ☆スポーツ科学に関する研究支援 授業、卒論などの支援 理工学分野、社会心理学分野　等

図22　身体運動教育と身体知式教育の場

ことで、前向きに授業に参加する。あるいはイベントに参加する。そういう場を提供するのが我々でなくてはいけないのではないか。そういう考え方です。また、図22の右側には、身体知識教育の場として講義・演習。例えばどうしたら痩せられるのだろうか。どうやったらテニスが上手くなれるのだろうかといったことです。その他に学生も参加できるようなシンポジウムなどを開催しております。

これが皆さんにお配りしています「当世塾生気質」という三つ折のパンフレットです（図23）。体育というのは重要なのですよ、ということが学生に伝わらないといけませんし、あるいは体育研究所と接点を持ってくれないと意味がありませんので、ここ2年間、新入学生には100%、在学生にも配っています。ここには実際に履修した学生のコメントとか、おおよそ3、4年になると三田とか信濃町とか矢上とかキャンパスが異なりますので、時間があれば日吉に来よう、行こう。日吉の体育は他のキャンパスからでも履修できますよ、ということを知らない学生が多いので、ここに写真を交えて入れてあります。ちょっと蛇足ですけれども、この「当世塾生気質－体育編－」、デザイナーの方と相談してネーミングしましたが、他の学部のある先生から「体育編以外はあるのですか？」と聞かれましたが、体育編しかありません（笑）。それから「当世“学生”気質」という坪内逍遥さんが書いた書物の題材をもじったわけなのですけれども、我々も発行した後で気がついたのですが、坪内逍遥さんは早稲田大学の出で配布してからこれは何か問題があるのかなと思っていましたが、今のところ何もないということでよかったなと思っています（笑）。中身になりますが、34種目の実技とか合宿を伴う種目とか講義とか演習、それらが簡潔にまとめられています。塾生に対して大学はこんなことをやっていますよというPRです。

次にこれは、先程言いました特徴的なイベントの1つの「KEIOフットサルアドベンチャー2014」というイベントのポスターで、ここ6年間程実施しています（図24）。体育研究所ではイベントをいくつか開催しますが、学生が企画運営をするということが基本理念です。当然教員の我々もお金（予算）であるとかアドバイスであるとか大学の施設を使いますので関わる点はいっぱいありますけれども、基本的に学生が中心になって企画をして実施するということです。このイベントは当初、

図23　パンフレット「当世塾生気質」

図24　KEIOフットボールアドベンチャー2014ポスター

単なるフットサル大会だったのですけれどもスタッフの学生達と話をしまして、フットサル大会に参加する学生に対して何か教えられることはないのか、ということでブラインドサッカーの試合をそこでして、あるいはアンプティーサッカー、片足を失った方などが杖を使って行うサッカーなのですけれども、それらの試合を見せて体験をしてもらって、何かを感じてもらう。そしてフットサル大会を終えようということです。だからアドベンチャーと銘打って、今年10月4日に久しぶりに天候に恵まれて開催できました。

図25の左上がアンプティーサッカー、左下がブラインドサッカーです。ブラインドサッカーは先日の世界選手権で日本代表チームは5位になりまして、ここ最近、メディアで取り上げられることが多いです。図25の右はフットサルアドベンチャーの参加者の集合写真です。自分達の大学の施設で教職員がサポートしますけれども、その年その年の学生スタッフが中心となっていろいろなことを企画して、いろいろな人に出会って、いろいろな体験をして、参加学生を取り仕切って、いろいろな人と触れ合いながら学ぶものを得る。そんなことを狙っています。

もう一つは、「KEIO CHALLENGER INTERNATIONAL TENNIS TOURNAMENT 2014」というイベントです（図26）。先日、錦織選手が準優勝した全米オープンなどのグレードのトーナメントの下のグレードのトーナメントなのですが、このグレードの大会を日本の大学で開催しているのは慶應義塾大学だけです。これは体育会の庭球部の部員が中心となって、日吉のテニスコートで行っています。ポスター（図26）の下中央に「ワイルドカード大会」と書いてあります。これは写真にある先日のアジア大会の金メダルの西岡選手や日本のトッププレーヤーの園田選手も出場する本トーナメントとは別に、一般の学生がエントリーできるワイルドカード大会というものを学生達が企画をして、その中で勝ち上がった者が大会期間中に本トーナメントの選手達と試合が出来る。そのような企画を今年は初めて行いました。この写真（図27）にコートの後ろで赤いトレーナーを着て立っているボールボーイがいます。試合のジャッジをするようなところは庭球部員がやりますけれども、この人達は部員が引っ張ってきたボランティアの学生達で、速やかにボールを拾ってくださいなどのきちんとした指導を受けた上、大会に参加しております。英語をしゃべれる学生も多いですから、海外のプレーヤーと話をしたり簡単な通訳をしたり、いろいろとキャンパスの説明をしたりして、先程と同じようにいろいろな人と出会って学んでいます。

さて、慶應義塾には「慶應義塾体育会」という組織がありまして、明治25年に発足しているわけなのですが、今、体育会と言いますと各大学のアスリート集団を指します。例えば就職の時なども、体育会系学生、というような呼ばれ方をします。しかし、明治25年の体育会発足の時は、学問をしている学生が三田の山（三田

図25　フットボールアドベンチャーの様子

図 26 「KEIO CHALLENGER INTERNATIONAL TENNIS TOURNAMENT 2014」ポスター

キャンパス）に約1,000人いまして、学問をしている合間を見て運動をしなさい、そうすると能率が上がります。運動をすることによってストレス解消、あるいは健康維持、身体を作ることによって馬力を持って勉強も出来ます。そういう考え方で慶應義塾が日本で始めて体育会という組織を作ったわけです。だから今で言うアスリートという意味ではなかった。1,000人が全員体育会費を納めて学問の合間に運動した。体育活動をした。段々とそれが昭和・戦後・平成になって、今日の話とは路線が外れますので話しませんが、大学対抗戦のはずがアスリート集団対アスリート集団、過剰な大学で

のアスリート育成やアスリートを入学させるというようなところがあります。

慶應義塾が組織した体育会の目的というのは、当初の会則では図28にありますように「本塾学生に完全なる身体の発育を得さしむるを以って目的とす」。その後何回か変わっていますが現行では、「スポーツにいそしみ義塾の発展に寄与しようとする塾生が、先輩塾員の協力もとに、技をみがき、体位の向上をはかるともに、品性を陶冶し、学生スポーツの本旨を全うするため協同すること」となっています。要するに、先程来の先生方のお話から大学の体育の授業というのは何が目的で、何が必要で、何の意義があるのだということを私も非常に勉強になりましたけれども、本質的には学問をきちっとするところが大学であるので、その学問の能率を上げる、あるいは三日三晩徹夜ができる体力をつくる。学問をするためにずっと辞書を引いていられるような集中力をつけるのだということが原点にある。こういう考え方もあるということを私は今日、このシンポジウムでお話をしたいと思いました。

今、日本の社会だけではなく国際社会で活躍できる人材を大学が輩出しないといけないという時代ですので、主体性とか積極性、チャレンジ精神、協調性とか柔軟性、こういうものをバランスよく備えた人材を育成する。体育というのは学生と教員の接する機会が多くありますので、教員の責任は非常に重いです。教員は皆同様でなくても良いと思いますが、教員がしっかりとしたバランスを持っていること、どんなに個性的であってもきちっとした広い視野とバランスを持っている教員が学生に接することによって、そうした人材の育成ができるのではないかなというふうに考えております。以上です。ありがとうございました。

図27　ボールボーイは庭球部員

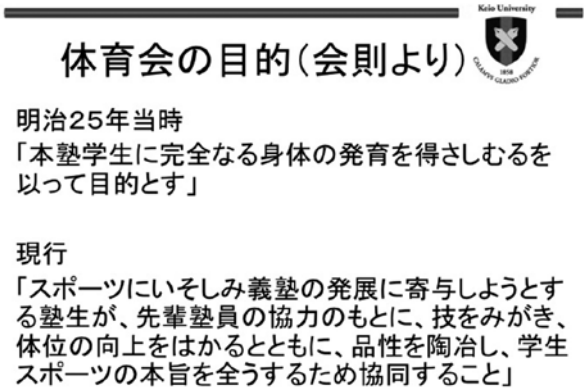


図28　体育会の目的

●全体討論

村山：では、後半の議論ということで、まずはディカッサントの関根先生にご意見いただきたいと思います。お願いいたします。お任せしますが、5分くらいだとありがたいです。

関根：ご紹介にあずかりました文学部長の関根です。どうぞよろしくお願いいたします。たぶん、まったく違う分野からということになると、アウェーでのお話しのような感じですけれども、今日は僕はちょっと感動しましたね。4人の方々のお話、とっても魅力的です。まず、なによりも。教員として大変な感動を覚えているという感じですね。ずっと振り返ってみますと、なんていいますか僕は非常に身体の弱い生徒だったんですね。記憶では僕は26歳くらいまでぜんそく持ちで時々発作が起きると、階段も登れないようなことが続いていました。ある時、それが突然ぱたっと消えるんですけれども、だから、僕の小さい頃の思い出はいつもスポーツとか運動とは無縁で、時々なにか調子がよくなって頑張ると必ず身体壊すというというような、虚弱体質だったんですね。ですから体育の先生方は僕から見ると怖い存在というのがありました。それが、僕は埼玉県でしばらく教員をやっていたんですけれども、埼玉県の教員になるあたりですから、後半にかけてだんだん体力がついてきて、いろんなことができるようになってきました。後半は柔道部の顧問なんかもやったりして、またそこで頑張りすぎて、硬膜下血腫、生徒に投げ飛ばされて頭の出血があって大変なことになったこともありました。でも、そのあとも柔道部の顧問は続けました。それから、やがてだんだんテニスに目覚めて、こちらに来てからはみなさんにもいろいろ教えていただいたり、テニスやそれからスキーと楽しい毎日を過ごさせて頂いているんですが、そういう体力というのは後でできてきたものだなと思っています。今日のお話の中で一つのポイントになっているのが、大学における必修としての体育というのが望ましいのか、あるいは先ほど石手さんがおしゃっていましたけれども、あえて必修ではなくて選択の中で自分の意志で意欲的に選ぶということ、そういうアプローチを導いていくのも大事なのではないかという議論もおうかがいしました。それもよくわかります。全く違う分野からのひとつ僕の体育に対する見方というのを今日はお話ししようと思って来たわけですが、それは肉体の発見ということです。かつては、例えば江戸時代だとか、はるか清朝とか唐の時代とか考えますと、体力のある者というのはもともと体力のある者で、ある技をもっている者というのはある技をもっているそういう人であって、それは鍛え上げてそうなっているとか、そういうことは全然問題ではない、そういう存在自体が問題だったんですね。そういう技や力があればいい。そして、そういうものを使うというだけです。で、後は使いつぶしということなんですが。それが近代の産業が発達する時代がやってきて、肉体というものが非常に大事なんだということに変わっていきます。で、そういうふうな肉体を育てていくということが同時に近代国家のテーマとして浮かんでくるわけですよね。ですから、例えば、ラジオ体操のような体操にしても、ドイツが強大な国家を建築していく中でその国民の体力向上を目指したときに、どうしてもそれは必要なものになってきて、系統的・科学的にそれに取り組むということになってきます。ただこの段階でもまだ大事なのは、それは産業社会を支えるための必要な要素として、因子としての人材の育成ですよね。そういう社会的なニーズによるものとして必要だったということです。それに対して今の時代における体育とはいったいなんなんだろうかという、そういう発想なんですけれども、僕の専門は中国文学なんですが、中国文学の中で、そのような肉体性に最初に目覚めるのは女性でした。女の人なんですね。例えば自分は子供を産むんだとか、あるいは自分の体はこんなに美しいんだということを自覚する、今は色々なジェンダーの問題がありますが、そのことが個人に目覚める文学の始まりになっている。個性とか自我とかいうことを考えるときに、その根底にあるのは肉体性の自覚ではないかと思うんですね。そのような肉体性というのは、今日いろいろなお話が出てきましたけれども万能なスポーツの名手であったり、あるいは特異な技能を持ったアスリートであったりということではなくて、その人その人に応じた自分の肉体の機能に対する自覚、それがあって初めてその肉体によって導かれる精神力というものに到達することができるんではないかということなんですね。バーチャルの世界のことを指摘された方もいらっしゃいましたけれども、バーチャルから

アナログへというのは非常に大事なことです。例えば今ものすごい勢いでテレビゲームだとかバーチャルリアリティのゲームが進んでいるわけですけれども、その中で彼らはある意味ではそういう経験を、ものすごい肉体をもった人物としての経験、あるいはその中での自分の意識というもの確認して楽しんでいるわけです。でもそれは、あくまでも空想の世界に過ぎません。そうではなくて、本当に自分の肉体性に辿りつかないと、その人の精神力の強固な発展には結びつかないということだと思うんですね。ですから皆さんおやりになっていることは、先ほどは石手さんが、徹夜しても大丈夫なような体力とか、学問の能率的な発展とかいう言葉をお使いになったと思いますが、僕はもっと根本的に、この自覚がない人には、たぶん近代的な思惟っていうのは無理なんではないかと思います。これは何故かというと、近代的な思惟というのは極めて個性的だからですね。極めて個性的で人間的で独自性のあるものでなければいけない。だとするならば、そのようなものを自覚するのは自分の肉体性に対する強い認識でなくちゃいけないだろうと思います。ですから、例えば身体に障害のある方、その方はそれなりのその自分の肉体の自覚っていうのがあって然るべきだし、老人には老人の、若い者には若い者のってことになっていくんじゃないかと思います。僕のように運動神経の鈍い男も、それなりの自分に対する自覚ってものが、この体育研究所、あるいは体育に繋がる先生方の色々な導きがあれば、そこのところがハッと気づいていく、そういう風な瞬間があるのではないかと思います。で、そういう意味で今日の先生方４人とも、たぶん学生とのいろいろな実践で鍛えられているんだろうと思いますが、とってもそういう魅力を備えた先生方で、このような先生方に教えて頂ける学生は、きっとずっとそのことを覚えていくのではないかなと思います。本当に学びの機会を与えていただいたと思います。どうもありがとうございました。

村山：ありがとうございました。大変、深いお話をいただきまして、私も一つの答えが見えたような気になりました。先生がおっしゃるように、強い肉体性への自覚というのを、単に、人間そのものの生きていくための根源であって、そこに気づかせられるかどうかという、何かすべてにつながる部分を一発で言い当てられたような気がいたします。その辺を皆さんとともに、もう少し深められたらと思います。関根先生のおっしゃるように、私も実際に今の学生に何か足りないんじゃないかとか、こういうことを導いた方がいいなという思いがありまして、じゃあ何ができるんだろうということを考えています。先生方、例えば今のお話も含めて実際に大学生に今どんなことを感じたり、どんなことが足りないんじゃないかとかですね、先ほど自己中心的というキーワードがあったり、精神面でも身体も不健康、弱いんだということがあったり、コミュニケーション能力がないといわれますけれども、実際のところですね、学生にどんなインセンティブを与えたいとお思いか、その辺をもう少し一言ずついただきましょうか。あの、徹夜の達人の師岡先生から。

師岡：まさしく本日三日目の徹夜に入っておりまして、一時間しか今日は寝ていないんですが、本日は皆さん目が覚めるような素晴らしい発表で、大変勉強になりました．それで、私の発表の中で言い足りなかったことを二つ申し上げたいと思います．先ほど、関根先生から「生きる力を作る体育」といったお話しをいただきましたが、もう一つ「厚生」という考え方があると思います。厚生労働省の「厚生」という言葉は、中国の古典『書経』に出てくる言葉で、「厚く生きる」という意味で、ただ生きるだけでは動物、ネコやイヌと変わらないが、我々人間は個性を持ち、多種多様なやりたいことをして楽しみ、心豊かに個性的に生きることができるわけです。やりたいことをやって、有意義に生きるというのが厚生、厚く生きる、という意味だったのです。日本レクリエーション協会は戦前は日本厚生協会という名前で厚生省管轄団体だったのです。私が体育必修論者というのは、スポーツの本当の意味を知っているからです。私の授業をとるとスポーツの嫌いな子が変わる。なぜか？　IOC 公認スポーツにチェスとブリッジが入っているの知ってると聞くと、「えー」とみんな言うんですね。皆さんはご存じだと思うんですけど、スポーツの語源 deportare は「普段と違うところに心と身体を運ぶ」という意味で、身体を動かすという意味はもともとの意味にはなかったのです。英語の辞書でも日本語の辞書でも「スポーツ」という言葉の意味を調べたことがある子はまずいません。そこで、辞書をひかせるんですよ。そうするとまず「運動競

技」と書かれていますが、そのあとは、「気晴らし、慰め、暇つぶし」、「ふざける」って意味まで載っています。体育会の人が聞いたら怒っちゃうかもしれませんが、本来スポーツはそういう文化なのです。音楽を嫌いな人はまずいませんが、ヘビーメタルとクラシックは全然違う音楽です。でも同じ音を楽しんでいることには変わりがない。だから、チェスもブリッジもがスポーツなのだから、スポーツを嫌いな人はいるわけがないのです。それじゃ、なんでスポーツ嫌いがいるかと言えば、学校体育で習ったスポーツやオリンピックや国体にとりあげられているものしかスポーツと思わないからなのです。今日はミャンマーのスポーツもご紹介ありましたけれども、スポーツは自分で作ることもできるし、実に幅が広いのです。いまグローバル人材育成が各大学に課せられていますが、グローバル人材育成で一番必要なのは何かって言ったら、国際的な教養だと思います。音楽・芸術・スポーツに対する知見とか、やはり自分でそれを楽しめることが重要だと思います。スポーツをする・見る・支える、何らかの形で関われる力を持っていることが人間としての魅力として、人と人、国際人としてのコミュニケーション力に繋がります。だからスポーツに対する学生の認識を変えることがまず必要と考えます。

健康観についても、自分なりの健康観があっていいのです。授業の中で「今こういう科学的知見があるよ、でもそれはあくまで参考として自分らしいウエルネスなライフスタイルを作ればいい、そのために自分自身に相談してデザインしなさい」が基本的スタンスです。「ウエルネスと身体」で基本的な健康・体力の正しい知識を身につけるために学生全員に履修させその上で、自分らしいライフスタイルを、生き方を作っていく機会にして欲しいのです。ある意味初年次教育として、「ウエルネスと身体」は、大学の教育理念を具現化させる基礎を構築する科目であり、この科目を履修しなければ、上智大学の卒業生とは言えないという内容が詰まっていると自負しております。

各大学でも体育はそのくらい重要な科目であるという誇りを持つべきと、私は思っております。長くなりましたけれども、一言付け加えさせていただきました。ありがとうございました。

村山：学生には健康についての予備知識がない状態で入って来てるんですね。

師岡：学生に健康についての予備知識があまりない者が多数いることは過去のうちの調査の結果です。選択科目にすると、意欲的な学生は来ても、本当に学んでほしい学生は来ないのが現状です。ですから必修にすることが必要なのです。1年生での保健体育は、内容にもよりますが、履修してもしなくても良い科目ではないと私は思っています。よく、体育会所属の学生に無条件で体育の単位を与えてしまう大学がありますが、これは大間違いです。保健体育の価値を自ら冒涜しているようなものだと思います。社会人なってメタボになる人は、意外と体育会出身の学生が多いのです。卒業後、大きく変わってしまうライフスタイルに備えての健康教育が必要なのです。今まで自分がやってきた以外のスポーツ、個人でも出来るスポーツや、体力レベルの違う人とも一緒に楽しむ方法を知ること、ウエルネスなライフスタイルの基礎知識を持っていることは極めて重要なのです。一日中ずっと座りっぱなしの会社の生活でどんどん太り、30代前半の男性がメタボになるケースが増えています。だからこそ、本当は体育会の学生ほど保健体育の授業は必要なのです。

村山：木内先生は初年次教育とかに関わっていますけど、その辺りはどうですか。今の学生の入学生のレベルとかいろんなことに課題があると。

木内：私はまだ筑波大学に来て一年経っていなくて、長い間大阪工業大学に勤務しておりましたので、学生のイメージとしてはいまだにやっぱり大阪工業大学の学生のイメージが非常に強いです。筑波大学に来て今で9ヶ月ですが、違う部分と同じ部分があると感じています。違う部分は、筑波大学の学生は書かせたら強い、ということです。私が授業の中で言ったキーワードをきちんと拾って、カカカっと書いてくる。さすがだな、と思ったりします。その一方で、体育授業の中で発揮されるべき、社会的なスキル、コミュニケーションスキル、いろんな人と協同して物事を成し遂げていく、そういうことに関しては大阪工業大学も筑波大学も全く変わらないなということを実感しています。なぜそういうことが起きているかというと、やはり高校の時まで、小中高の体育で何も学んでないということなの

かなと……。身体活動を通じて、スポーツ活動を通じて、心身の健康とか社会性を高める科目が体育なのだと、そういう意識自体が学生にないということですね。体育でどういう学力を育てるべきかということもあると思うのですけど、その前に体育がどうして学校の中の科目として、ちょっと他の科目とは異質ながらも大学まで日本ではあるのかという、そういう位置づけを伝えるのは、もう本当に大学の偏差値レベルとは全く関係なく全国一律でやるべきものなんじゃいかなというふうに思います。それが初年次教育としての体育でもあると考えています。

村山：田簑先生も一言お願いします。

田簑：先ほど師岡先生のお話で、私だいぶ傷ついたというか……自分自身がもともと体育系できまして、メタボで、現在ですね、もう入院も何度かしております。だから普段やっぱりスポーツは大切だな、動かないとなと、学生には言うんですけど、自分自身が全然実行していない。すごく申し訳ない気持ちでおります。

関根先生のお話を聞いて、私は歴史と人類学ですので、近代国民国家の話のところで、いわゆる体育がその近代国民国家に果たす役割は非常に大きなものがあって。先生先ほど自分の肉体に対する自覚、すごくあの改めて勉強させていただいたなという風に思っています。先ほど発表させていただいた時にミャンマーの伝統スポーツを授業に取り入れたそういう流れを少しお話しさせていただきましたが、実は私自身のチャレンジでもあったということなんです。というのも私自身がいわゆる体育大学で競技スポーツをやって、卒業して大学院を出て、体育大学に勤めてきて、今三校目になるんですけれども、やっぱり一生懸命まじめにやることに相当ウェイトを置いてやってきました。授業をやっていて学生がまじめにやらないと、なんでやらないんだこのやろう、ってものすごい怒ってた若い時期もありました。ところが、師岡先生にスポーツの語源をお話いただきましたけれども改めて思い返した時にもっともっとやっぱりスポーツって可能性があって、実は流通経済大学のスポーツ健康科学部を設置、開設する時に私は一生懸命文言を書いていちおう申請させていただいたんですが、生命、と書いていのちの尊厳というのをキーワードに挙げさせていただきました。それはやはりスポーツを通して自らのいのちを最大限輝かせることがやっぱり学生にはしてほしいなと。そのことと先ほど関根先生にお話しいただいたことっていうのは、自分の中ではかなり近いなと思いながら聞かせていただきました。ほんとに漠然とした意見ですけど、自分自身の、まだまだ若いんですが経験を通じて、今ミャンマーのスポーツをやらせていただいているということでございます。

村山：なかなか論点が絞りきれませんが、フロアの方とも議論をしたいと思います。私が最初に問いかけようと思ったのが、現場で実際に大学生にどんな課題を感じているかということ。そして、理論ではかなり理屈をならべてこれだから体育ができると言っていますが、実際に今の学生にそれを合わせてやっているのかとか、これでできるのかっていうところが重要だと思います。例えば木内先生が言っているような学び方・教え方みたいなところが次に出てきて、そのへんが実際どうなんだろうと。ここでいいことだけ言ってもできなければいけないので、フロアの皆様からも現場でこんな風に課題を感じて、私はこういう風に解決しているとか、こういうポリシーでやってるっていうようなことがあればぜひご意見をいただきたいと思います。あと例えば皆さんの話の中で、例えば師岡先生のウェルネスっていうことでいくと、スポーツはしていませんと言いましたが、スポーツをしていればいい訳ではない。でもスポーツの語源は教えるんだが、石手先生は授業だけが教育じゃないでしょうと言っています。今、大学で大学生を育てるっていう上で体育とかスポーツの場面場面でこんなことが利用できるってたくさん言ったんですけど、本当にできるんだろうか。このようなことを皆さんどんな風に感じられたか、ぜひご意見をフロアからもいただきたいと思います。いかがでしょうか。

水野：医科歯科大学の水野といいます。大学の体育っていうのはそういう意味では石手先生がおっしゃったみたいに、教科体育だけが大学体育ではないですよね。大学っていうキャンパスの中で行われる体育活動は全て、それは課外活動も含めて、公開講座なんかも含めていろんなイベントが、大学で行われているそこの中に学生が一緒に生きる空間としてあって、そこで

いろいろ学んでいく。もちろんその中には教科の体育もあるし、それは必修であったり選択であったりっていうことはあると思いますけど。僕はあまり教師とか学生とかっていうことは別にして、やっぱり自分がスポーツをやってきたり、関根先生の言葉を借りれば少し身体の気づきに関しては自分なりに勉強したりその価値を自分もある程度では学んできたんで、それを後輩というか若い人たちに伝えて少しでも役に立てたらいいかなと思っています。そういう意味や、存在を触れ合っていく中でお互いが、それこそ身体のリベラルアーツじゃないけど、やっぱり気づきの中から自分のこれからの人生やライフスタイルをデザインしていく。大学教育の今の問題は主体性の教育、主体性を持って。我々日本の教育ってどうしてもやらせる教育なので。うちも偏差値の高い学生がたくさん来ますので、学んで、ある紙に書いて吐き出してということは非常にうまいんですが、それをじゃあどうやって自分で使っていくかとかいう話になると、まさにそれは問題になっていて、主体というか学生が自分で考えて、っていうことが今の学生に求められている、これは共通の、学歴とか大学のレベルとかとは別に大学生だったらそういうことができてないといけないんじゃないかという問題意識というか、みんなの中でそういう共通性を持って我々がそれにどういう働きかけができるかとか、どういうことをしていくとその辺が育つか、みたいなところが、今、今求められている大学教育の課題だと思うんで、体育もそれに対して何ができるか。まあそこには木内先生が言われた生きる力みたいなものはキーワードになるんだろうなと思いますし、それの原点は関根先生が言われたみたいな身体の気づきっていうか、自覚みたいなものだという風に思います。

村山：ありがとうございます。他にはいかがでしょうか。

戸田晴実（日本ダイエット協会）：日本ダイエット協会の戸田と申します。今日は貴重なお話しいただきありがとうございます。今日のテーマである、学校体育が今後どう発信していくのかと。私は師岡先生が言ったように、心とからだをどう育み、どう守るのかということが究極だと思ってるんですが、私はSFCの方でも栄養学で教鞭をとらせてもらいましたし、幸い今、全国の小学校、中学校、高等学校で食事教育という形でやっていて今現場で感じることがあります。それからもう一つ、企業であるいは老人ホームで呼ばれていますので下は小学校から上は70歳代まで全部の声を聞けているんですが、師岡先生が99%保健体育の意味合いが理解できていないって言うのも非常に感じます。例えば日本国のパイロット、健康管理で僕が直接指導しても、あとはどうやって自分の健康を守りますかという問いに対して、明確に答えられないです。電通の局長も答えられないです。そうするとやっぱり教育だなっていうのは感じたので、上智大学のようなウェルネスをぜひ小学校、中学校、高等学校でもやるべきだなと非常に感じています。それが意見です。以上です。

村山：ありがとうございます。せっかくですのでもう少し議論したいと思いますが。

植田史生（慶應義塾大学体育研究所）：慶應大学の植田です。今日はシンポジストの皆さん、本当に素晴らしい話をありがとうございました。それぞれにその通りだと、納得しております。ただ、高校時代までにできてないからっていうお話がずいぶん出ておりましたけれども、これは関根先生がいらっしゃるのでお聞きしたいと思うんですけど、これは体育だけの問題ではなくて、いわゆる学部の中でも各科目で高校までの勉強の仕方と、いわゆる大学の入学試験との関係があって、それで大学に入ったら必ずもう一回勉強させなきゃいけないんだと。私が思うには、大学の入学試験のやり方に問題があるんじゃないかという想いを持っているんですけど、いかがでしょうか。

関根：総合的な入試も考えなければいけない、その通りだと思いますが、なかなか現実的には難しいことでもありますが。体育の今の問題と直接関係するかどうか、極端な例をちょっとお話ししたいと思うんですけれども。僕中国をやっておりますので、中国での学校教育を見ていてつくづく思うんですけれども、上手な子しかやってないんですよね。上手な子を育てる。あるいは才能のある子を徹底的に。これはもうものすごく徹底的な訓練で、水泳にしてもびっくりするくらいですよね。そういうお金のかけ方も違います。それはその子、だけですよね。学校全体でたくさんの子どもたちがいて、その子たちどうするの、って言ったら、この子た

ちは能力がない、能力がない子をなんで教えるのかっていう答えで、あとはテニスにしても、ランニングにしてもそうですけど、100m、400mを走れない子を走らせたってしょうがないでしょ、っていうことですよね。それがいまだに続いているから、例えば大学での体育教育っていうのはたぶんほとんどもうないがしろにされてるし、逆にそこに登場してくるのは軍事教練ですよね。9月に新入生を全部一ヶ月間とか、軍に入れるっていうシステムがもうでき上がってます。そういう風な、それは体育ではないとは思いますけれども、根本的にこのそれぞれの人に応じて、それぞれの人が人生をもっと豊かに暮らすためにはこのようなことをしなければいけないし、それは楽しいんだということを教えられる機会っていうのはないわけですよね。そのような、あなたの肉体が素晴らしいんだよっていうことを、そういうカリキュラムって言うか発想がない。僕自身も振り返ってみると小学校だとか中学校ってそうだったのかなって思いますけど、そうは教えられてない気がするんですよね。何かやっぱり優れた子だけのものになってたんじゃないかなと思います。今日のシンポジストの皆さんが各大学で一生懸命やられていることは全くそうではないわけですよね。これはもう僕の考え方が非常に古いんだろうと思いますけども、今の学生たちはそういう先生たちに恵まれて本当に幸せだなと思います。

植田：先生ありがとうございました。私が申し上げたいのは、ハーバード大学と縁がありましてハーバード大学の先生と話をしたら、ハーバード大学はハーバード大学に入ってくる大学生をとると。いろんな角度からとる。その中で学生が自分の進むべき方向を見つけて勉強していく。だからそこに余裕が出てくるので、ウェルネスも自分でやると。日本は学部を受けてきて、学部の縛りがあるので、必修だとか選択だとかっていう縛りがあるのでそこに乖離しているとこがあるんじゃないかっていうことを、さっきお話をお聞きして感じたところです。当たってるかどうか分かりませんけど、ありがとうございました。

村山：あっという間に時間が過ぎますが、いろんな問題がまた出てきているかなとは思いますが、そもそも大学の枠組みで考えると今のような入学とかですね、私冒頭にちょっと書きましたが、大学生は勉強しないと言われている訳ですよね。そのシステムを使って、でも社会に出る完全な道具として大学が機能をしなきゃいけないことになっていますね。でも学びを深くすれば、石手先生が言うように、本当に大学が学問の場であれば、それに対してからだを考える時間が必要になるはずで、それが健全な人間の育成のはずなのにそこは無視して。でも学問もさせないでですね、それでなんとか学生を育てようって言っているのはとても空虚な感じがするわけですね。どこかにズバッとメスを刺して変えられるものなら変えた方がいいというようなことはかなり多くの人が考えてると思うんだけれどもシステム上変えられないと。ですから必修であるか、必修でないかなんていうことがどうしても議論になってしまう。でも、本質的に考えれば関根先生が言うように肉体に気づかせる場面をどう作るか、カリキュラムがそうなってない。水野先生がおっしゃるように主体的にそれを考えさせるっていうことを、日本の大学は考えていない。ここになかなか答えが出ないところで、でも我々はなんとかしよう、しようと言っているだけに留まらずに、なんとかこの先、もう一歩次の手をうってやはりこれを変えた方がいい、という風に私は思っております。なかなかまとまらないところではありますけど、私としましては、この四名のお話の中に十分な要素があると思いました。これをなんとかまとめていく方法を引き続きこの体育研究所と関東支部などで続けられたらなと今思っているところです。最後にまとめをしたい方、いらっしゃいますか。

師岡：先ほどハーバード大学の話が出ましたが、アメリカの大学は大体構内にキャンパスレクリエーション施設と運営組織があり、年間30ドル位払えば一年間自由にいろんな施設を使い習うこともできるし、校内大会に参加もできるんですよ。日本の大学はほとんどそんな施設を持っていない。うちの学生が必修賛成と書く理由のいくつかは、必修でなければ一般学生が身体を動かす時間も場所も確保できない日本ならではの理由もあるのです。スポーツ基本法ができて「スポーツすることは人権」と謳われてはいるもののスポーツをやる場所がないのが現状です。この矛盾をなんとかするためにも、大学の体育の時間確保と施設の早朝・夜間の一般貸し出しも検討すべきと思っています。

村山：想定内とは言いながらも、もう少し議論ができるなと思っていたんですが、やはり時間が足りません。この続きはこのあと時間がある方と懇親をしたり、また引き続きですねこういった研究と称しながらも現場的な活動に結びつく議論をする場を作りたいと思っております。できれば毎年恒例にしまして、こういった形のシンポジウムをやっていくことを考えておりますが、テーマがあちこちいかない形で、やはり大学における大学生教育をコアにして続けていければなと思っておりますので、またぜひ機会を作りまして、お運びいただきたいと思います。大変雑駁な司会で申し訳ございません。時間となりましたのでシンポジウムを以上で締めさせていただきたいと思います。最後にシンポジスト、ディスカッサントの先生方にもう一度盛大な拍手をお願いいたします。本日はありがとうございました。

2. 文献抄読とトピックの検討

本グループでは、大学体育、大学教育の21世紀的課題に関する関連書籍・学術論文の抄読を行い、議論を交わしてきた。対象とした文献のリストは以下に示す通りであり、およそのテーマ・トピックごとにグループ化した。今回はこれらのグループから「グローバリゼーション」「日米英大学比較」「授業デザイン」のキーワードを抽出し、再度文献内容を考証し、まとめを行った。今後さらに文献を増やし、他のキーワードを設けながら幅広く文献考証を進めていく予定である。

検討した文献リスト（テーマ別）

体育・大学教養体育

小林勝法，大学教育の質保証と大学体育の課題，体育の科学，vol.60, no.8，2010

小林勝法，山口一美，大学教養体育のFDプログラムの体系化，教育研究所紀要 第21号，2012

杉山　進：大学体育の教養について，体育・スポーツ哲学研究，31-2，p87-93，2009

伴　義孝，体育とは何か――大学改革論議からの発信――，関西大学出版部，1996

玉木正之，スポーツ　体罰　東京オリンピック，NHK出版，2013

友添秀則・岡出美則（編），教養としての体育原理　現代の体育・スポーツを考えるために，大修館書店，2005

グローバリゼーション

吉田　文，グローバリゼーションと大学：「広田照幸他編，グローバリゼーション，社会変動と大学」岩波書店，2013

広田照幸，日本の大学とグローバリゼーション：「広田照幸他編，グローバリゼーション，社会変動と大学」岩波書店，2013

松繁寿和，グローバル化による競争環境の変化と求められる人材：「広田照幸他編，グローバリゼーション，社会変動と大学」岩波書店，2013

日米英の大学比較

苅谷剛彦，グローバル化時代の大学論①「アメリカの大学・ニッポンの大学 TA，シラバス，授業評価」，中央公論新書，2012

苅谷剛彦，グローバル化時代の大学論②「イギリスの大学・ニッポンの大学 カレッジ，チュートリアル，エリート教育」，中央公論新書，2012

授業デザイン

東北大学高等教育開発推進センター編，大学における「学びの転換」とは何か　特色ある大学教育支援プログラム（特色GP）東北大学シンポジウムⅡ，東北大学出版会，2009

佐藤浩章編、大学教員のための授業方法とデザイン，玉川大学出版部、2010

木野　茂，大学授業改善の手引き　双方向型授業への誘い，ナカニシヤ出版，2005

アラン・ブリンクリ他，小原芳明・監訳，シカゴ大学　教授法ハンドブック（The Chicago Handbook for Teachers）玉川大学出版部，2005

B.G.Davis, L.Wood and R. Wilson, 香取草之助　監訳，授業をどうする！　カリフォルニア大学バークレー校の授業改善のためのアイデア集　ABC's of Teaching with Excellence. Teaching Innovation and Evaluation Services, University of California., 東海大学出版会，1995

須藤敏昭，大学教育改革と授業研究――大学教育実践の「現場」から，東信堂，2012

大学改革・大学教育

苅谷剛彦，高等教育システムの階層性――ニッポンの大学の謎（エニグマ）：「広田照幸他編，大衆化する大学――学生の多様化をどうみるか ――，社会変動と大学」，岩波書店，2013

前田明洋，ナレッジ・コモンズ―グローバル人材を育むキャンパス空間――，日経BP社，2013

岡部光明，「大学生の品格」プリンストン流の教養24の指針，日本評論社，2013

田中毎実，“なぜ「教育」が「問題」として浮上してきたのか”：「広田照幸他編　教育する大学――何が求められているのか」，岩波書店，2013

吉見俊哉，“大学に、未来はあるか？　――討議のための素描”：「広田照幸他編　教育する大学――何が求められているのか」，岩波書店、2013

(1)「グローバリゼーション」の大学教育への作用

岩波書店から2013年～14年にかけて発刊された「シリーズ　大学：全7巻」の編集委員の一人である広田照幸氏は、このシリーズの発刊に際して以下のように述べている。

「**資本・情報・労働力が国境を越えて移動するグローバリゼーションが急速に進展している。**そうした大きな社会・経済の変動は，大学のあり方に根底からの変化を迫ってきている。～中略～　大学が「象牙の塔」として，大学の外の動きに対して超然としていることは，もはやできない。しかし同時に，「知識基盤型社会への対応」「学習者本位の教育サービス」「ガバナンスの必要性」「効率化の必要性」など，近視眼的な改革キイ・ワードに振り回されるだけでは，大学がもつ多様な発展可能性が見失われてしまう。」

つまり、現在の大学はグローバリゼーションという世界の動きと対峙することが必要不可欠のようである。しかし、そもそもグローバリゼーションとはどのようなもので、なぜ大学にもそれによる幾多の課題が突きつけられているのか？　この点を上記のシリーズの第1巻「グローバリゼーション，社会変動と大学」の吉田、広田の論述からまとめてみる。

1）グローバリゼーションとは？　その歴史的文脈

吉田によれば、1990年頃より経済・政治・文化や情報などの過程が国境を越えて拡張し、ある場所で生じたことが他の場所に重大な影響を及ぼすようになったことを指してグローバリゼーションと呼ぶことができるという。これは、自由市場競争が物理的福利を生む、生産性向上が社会病理を解決する、という経済パラダイムである「新自由主義」によって1980年代より英米を中心に強調されてきた。また米国では1970年代以降「新保守主義」が政治的潮流として支配的であるが、自由主義や民主主義の輸出を目的とした対外強硬政策の主張や小さい政府で自由競争を貫く点で「新自由主義」と共振する。

1980年代の英国・サッチャー政権、米国・レーガン政権の経済戦略として採用され、このグローバリゼーションが拡大した。具体的に、対内的には小さな政府、規制緩和、市場原理による自由化、民営化を進めながら、やがてそれらが教育・医療・福祉などの公共領域にも適用されることになった。また、対外的にはIMF、世界銀行、米財務省が発展途上国の債務危機対策として採用し、世界貿易機構（WTO）、経済協力開発機構（OECD）もこれらの推進機関へ変容した。このようにして教育領域、すなわち大学にもグローバリゼーションが波及し、公共領域に市場原理を導入することが進行した。グローバリゼーションを促進するアクターの活動として大学に影響力を持つものが「国家・国際機関・教育産業」であるという。

我が国の大学教育におけるその例として、2000年代の小泉政権が民営化を進めたが、大学にも同様に国立大学の独立行政法人化が進められた。これは「国家」というアクターによる作用である。

2)「国際化」「グローバリゼーション」「イデオロギー」

広田は以下を引用し、「国際化」と「グローバリゼーション」はコントロール（制御）の点で異なる概念であると述べている。「いかなるアクターやその集団といえども、グローバリゼーションとその影響を制御することはできない。しかし国際化はグローバリゼーションにより社会や組織に課された多くの要求に対応するための戦略で、高等教育においては学生達をグローバル化した世界に関与していく準備をさせるための1つの方法である」（アウトバック2010）。従って、国際化をはかることはグローバリゼーションの波が押し寄せる最中の対応策の一つであり、その波のことではない。

また、広田は「グローバリゼーションの捉え方には価値や物語が含まれる」「グローバリゼーションの支配的な描かれ方にはネオリベラルなイデオロギーが染込み、特定の世界像・社会像・組織像（及びそれらの変容）を下敷きにしている」としている。つまり、グローバリゼーションは現実であると同時にイデオロギーでもある。グローバリゼーションの諸言説は現実を描く側面と規範や価値や信念や物語を含みこんでいる（Rizvi & Lingard 2010）。

このイデオロギーによって、大学においては、多くのアクターから民間経営手法の行政セクターへの導入と評価に基づく資源配分、アカウンタビリティや効率性の協調、民営化、市場化、学生消費者主義等（ローダー他2012）、などの要求が求められてきている。その有効性については、必ずしも実証されていない「教義」に過ぎない側面が多いが、その席巻によって大学内に排除・無力化されるものがある。こうして、旧来の望ましい大学

像と新米のネオリベラルなそれとの対立が生じている。

また、教育政策の変容として、旧来の「政策借用」「政策学習」の他に国外からの様々な政策転移メカニズムが生じた。

・「調和化」国権限を他のレベルの政体に一部移譲、合意により政策実施　EU が典型
・「普及」研究調査による様々なアジェンダが設定され、各国がそれに取組む　OECD
・「標準化」国際機関が世界標準として参照されるべき基準を定める
・「押し付け」特定政策の押しつけ　世界銀行の構造調整

国家の外側にある「作動可能な場」が直接でない形態の権力を行使し、外発的に政策転換・立案を迫り、その転換は政策過程だけでなく政策目標に及ぶ（Dale 1999）。こうして、1990 年代以降「教育政策のグローバル対応」を迫られることとなった。これは、UNESCO、OECD、ILO、世界銀行、EU 等の活動と同時に、教育の市場化・商品化といえる（Martens ら 2007）。

3）グローバリゼーションによる大学の変容

上述のように、グローバリゼーションは大学教育において「商品化・標準化・評価」の問題を生じさせている。

・商品化

大学が富を生むため、各種アクターが大学を利用し、大学教育を商品化（顧客ニーズ・期待に沿うもの）する。

→　私学化進行、短期型総花的教育増大、廉価、就業機会への期待
→　伝統的領域・職業に直結しない領域が衰退　学問の継承性から保護すべきか？
→　教育内容が粗悪か否かは使用前にわからない　夜逃げ大学などの事実が存在

従来、教育機能とは「学生の社会化と認知的能力の向上」とされてきたが、消費者とみなされた学生に誰が社会化の役割を担い、将来につながる認知的能力向上を意図した教育を行うのか？（Gibbs 2010）、という問題がある。

・標準化

まず、大学教育のパッケージ化が進行している。これは、営利大学の教育プログラムやｅラーニングの教育の定型化のことであるが、大学教員の役割を変える、従来の「教授の自由」がなくなる、学問の場でなくなる、という批判もある。

次に、これと並んで、アメリカ型大学教育の普及が国際的に進行している。アメリカ型の大学教育モデルにより自国大学を改革後、米の認証団体の認証を受け大学の地位向上指標とする動向が強まっている。これは、自国文化の衰退と表裏一体と言える。このモデルに対する認証団体に AACSB（ビジネス教育分野）、ワシントンアコード（技術者教育の協定）がある。また、EU のボローニャ・プロセス（大学間単位互換・学生流動性確保）はアメリカ標準化に対抗するもの（Malamud 2010）、である。

・評価

新自由主義が大学に求めるものの１つとして「アカウンタビリティー」がある。成果の明示のみならず成果に対する評価が加えられ、さらに次の税金投入の指標となる。PDCA（Plan Do Check Act）サイクルが重視され、そのサイクルが短期化している。

質保証もアカウンタビリティの一環である。しかし、教授と学習について、教授は教育内容と方法の質保証は可能（果たすべき役割）であるが、教授が学生の学習成果を保証するものではない（学習成果評価に工夫必要）といえる。また、アカウンタビリティの正当性を判断する者とされる「ステークホルダー（利害関係者）」は多様である。学生・保護者・政府・産業界・地域等、大学人のピアレビューのみではない。従って、大学は誰に対して大学活動を認めてもらえばよいのか、という問題もある。

4）まとめ

吉田と広田は以下のようにそれぞれまとめている。

吉田

短期的視野を長期的視野に拡大する必要があり、現在的価値のみで評価してはならない。

大学の固有の機能は、次世代の育成、次世代への学問の継承であろう。

> “高等教育における新自由主義の政策の代替策がないように見える時代において、またわれわれ大学人が学生とともに創造的な思考をする時間が少なくなっていると感じる時代において、学生（そして我々自身）に、この感覚は社会的に構築されたものだと自覚させることが重要である。”（Canaan

2006）

大学人は、次世代を担う学生に対し、世界を批判的に見る目を持たせること、政府や雇用者が学生に対し求めていることの意味が何であるかを理解させることを教育の目標に据えることで、アカウンタビリティや評価を逆手に取れる。（Canaan Shumer 2008）

つまり、大学人のコミュニティの形成、そこでの未来的議論が必要。大学人の持つ知が問われている。

広田

歴史的に、「大学のあるべき姿」に関する「古い理念」が「質」を支える重要なイデオロギーだったのではないか、そのイデオロギーを無効化させて取って代わろうとする近年のネオリベラルな大学像は究極の理念や哲学に欠けており、多くの問題があり、かつ「古い理念」はまだ死んでいない。

古い理念を鍛え直し、別のグローバリゼーションの可能性、マス化ユニバーサル化の学生の変化への配慮等への課題解決をする新しい理念哲学を作り出さねばならない。

(2) 日米英の大学教育システムの比較

グローバル時代の大学論①　アメリカの大学・ニッポンの大学（刈谷剛彦）

グローバル時代の大学論②　イギリスの大学・ニッポンの大学（刈谷剛彦）　より

1) アメリカの大学・ニッポンの大学

・アメリカの大学と日本の大学を比較しながら、TA、シラバス、授業評価などアメリカの大学の特徴をまとめたものである。

①日本では、入学者選抜のしくみの中で作られた「受験学力」を、どのようにして大学教育に相応しい学力に変換していくのかに問題がある。「偏差値学力」を、応用力のきく、洞察力と、思考力、批判力を備えた学力に変えていくことが、日本の教育課題であると考えている。大学教師養成の根幹ともいえるTA制度の導入やシラバス導入により、その授業が学生たちに、いつ、何を、どのように要求するか、その要求に基づく学生たちの学習の成果をどのように評価するのかについて、文書を通して明示的に確認するための文書であり授業評価の方法についても詳しく記載しておくことが重要である。

②日本では、入学者選抜の仕組みの中で作られた「受験学力」を、どのようにして大学教育に相応しい学力に変換していくのかに問題がある。そして、企業の雇用主が大学の成績を採用基準に用いていると考える学生は日本よりアメリカに多い。高校以下の教育は大学受験の影響のために、「本来の教育」ができていない。しかし、大学における4年間の教育によって、受験勉強とは異なる学習をどれだけ学生たちに与えることができるか、外部からの強制によらない「学習」を可能にする条件が日本の大学には備わっている。

③学生たちからの質問や質疑応答をほとんど含まない講義形式の授業は、まさしくモノローグ（独り言）的なコミュニケーションの典型であり、対照的にアメリカの大学の授業はダイアローグ的コミュニケーションを中心に展開する。

2) イギリスの大学・ニッポンの大学

①オックスフォード大学は「カレッジ制」という仕組みを残している。（2012年現在38のカレッジがある。）そして、オックスフォードの指導の中心は「チュートリアル」と呼ばれる、教師と学生との一対一の対話である。

②オックスフォードでは入学選抜に必ず面接がある。このことは、はたしてこの学生は受け入れて鍛えるだけの価値があるかどうか、それを面接で確認した上でなければ合否を決めない。そして、「生涯にわたって社会に貢献できる人間になるだろうか、といった観点から、学生の能力や適正を見抜こうと教師も必死になる。それともうひとつ、カレッジに入って仲間と共同生活をするのだから、うまく仲間たちと付き合えるかどうか、その言葉遣いもまた、適切、正確さ、品位を持っているかどうか、周りに悪影響を及ぼす虞はないかどうかが評価の基準になる。

③日本は「体験学習の場」としての大学であり、イギリスは「学問の場」としての大学である。日本でエリート的な機関とみなされるような大学を含めて、自身の裏づけとなるような教育と学習の実績があるのかないのか、が問われるべき論点である。

・日本の大学は「主体的に学ぶ力」の育成が望まれる。

－専門教育を他の先進国並みに修士課程にまで引き

上げ、それと同時に、就職活動の早期化によって実質３年間にも満たなくなっている大学の学部教育の充実を図ることである。

－秋入学→春卒業の１年半ないし２年半の修士課程コースを設置し、より高度な大学院教育の充実を図る。

－学部学生の入学定数を大幅に削減し、そこで生じる余力を大学院教育の充実に回す。

－大人数の講義形式の教育からも解放され、きめ細かな応答型の教育が可能になる。

－受験戦争も現在の学部中心から大学院入試へとシフトする。

－４年間の学部教育でしっかり学んだ、優れた学生を選び出し、さらに１年半ないし２年半の高度な専門教育を受けさせた後で、社会に出す。

以上のことから次の２点が重要と思われる。

＊大学受験制度が高校以下の教育を「本来の教育」から遠ざけている。

＊大学教育を「学問の場」としての大学教育にしていく。

(3) 大学教員のための授業のデザイン

小林ら（2012）は、「近年では、教育学の基礎も学ばず、教育実習も経験していない、さらには体育学を体系的に学んでいない教員や大学院生が増えてきている。保健体育の教員免許首都機に必須な教育を受けていない者が大学教員になった場合、数多くの不安を抱えたまま授業をすることになり、教育の質保証の観点からみて看過できる問題ではない」と述べている。また、初めて大学で授業を行う教員以外でも、教員としてさらにキャリアを積む上で授業改善を希望する大学体育教員がより良く授業を改善できないだろうかと考える。そこで、「大学講義の授業デザイン」に関する関連書籍を参考に、講義の授業デザインが実技の授業で応用できることはないだろうかと考え、以下にまとめた。

1) シラバスについて

佐藤ら（2012年）は「授業の目的」について当該授業の存在意義を書くべきであると述べており、「到達目標」の書き方は、授業終了の段階でできるようになってほしい行動を書き、いずれも学生を主語として書くことが重要だと示している。また、木野ら（2005年）は科目の目標を明示、学生への期待も込めてうまくいけば達成できるかもしれないという目標を示しておくことが必要であると述べている。さらに、刈谷(2012年)はアメリカの大学と日本の大学を比較して、シラバスは単なる授業紹介ではなく、文書を通じて明示的に確認しあうための文書であるとし、シラバスは「事務的連絡文書」「法的契約書」「学術情報文書」「学習指導書的文書」としての役割を合わせもつものでなければならないと述べている。つまり、シラバスではあらかじめ授業の目的、到達目標を明確にすることが大事であり、単なる授業紹介であってはならならず、それは体育実技の授業でも重要である。

2) 授業方法と展開

学生が主体となるような授業方法、例えば、体験・参加によって学生が主体的に考えられるきかっけを作る、また少人数のグループ活動によって参加の機会を持たせる（佐藤ら、2012年)、教壇での講義という学生への一方向型の授業で終わらず、学生と教員および学生同士の間での双方向型の授業（木野、2005年)、ディスカッションを奨励し、研究分野の最新の進展について論じ、魅力のある授業展開を行う、ジャーナルに投稿する論文を作成するように講義を（序論、本論、結論を）構成し、できるだけ箇条書き表現を使う、毎回の講義ごとにその目的を述べる、何が重要であるかを学生に見きわめさせる（B.G.Davis ら、1995年)、キーワードを明示し、講義の中で扱うキーワードの数を極力少なくし、講義の冒頭で学生が把握できるようにする（佐藤ら、2012年）ことなどが挙げられている。さらに、授業の工夫の仕方について、B.G.Davis ら（1995年）は話すスピードや声のトーンを変える、また、面白く・刺激的な課題を出題する。例えば論争の的となっているようなトピックスを出題したり、学生によるパネルディスカッションを行うことを挙げている。佐藤ら（2012年）は、講義ではゆっくり話す、子音をはっきりと長めに発音する、口を開けて明瞭に話しをする、キーワードは特にゆっくり言うことが大事であると述べている。 これらのことを考えると、体育実技の授業では、学生が主体となることは比較的容易ではあるが、授業展開がワンパターンになりがちであり、これは学生にとって魅力的な授業であるとは言えない。魅力的な授業を展開するためには、体育の実技においても、

授業構成や授業ごとの目的を明確にすることは必要であると考えられる。また、授業の工夫について、実技では特に師範することが重要であり、毎回の授業の中で最も重要なことに対してはっきりと注意を向けさせる必要がある。そのためには、教員の話し方、見せ方は学生の理解度にも繋がる重要なポイントとなる。

3）学生との接し方・理解度の確認

学生との接し方について、紙ベース・メール・対話等を用いて学生と教員の双方向のコミュニケーションを図る（木野。2005 年）。授業を理解できない学生を個別に援助する、学生一人ひとりとかかわる、教室以外の場でも学生側から接することができるようにしておく、（B.G.Davis ら、1995 年）。学生の多様性に配慮する。例えば、授業中に人権侵害（ハラスメント）をしない、セクハラに当たるかどうかは受け手が判断する、セクハラ以外にも「出身地」「宗教」「学力」「年齢」などを根拠に学生を不愉快にさせる言動はしない、アカデミックハラスメントにも気をつける（佐藤ら、2012 年）。また、学生の理解度の確認については、頻繁に小テストを行う、講義の終わりに感想・意見を提出させる、講義中の学生とアイコンタクトの量を増やす（B.G.Davis ら、1995 年）。授業アンケートを利用する、初回・中間の授業でアンケートを実施し、学生の学習状況を聞くことにより、教員の独りよがりになっていないかを確認する（木野、2005 年）ことなどが示されている。つまり、学生と教員の双方向のコミュニケーションにより、学生の理解度を確認しながら、授業を理解できていない学生には個別に対応することが不可欠であり、決して教員の独りよがりの授業になってはいけないということである。このことは体育の実技でも重要であり、学生が課題に対してどのくらい向上したかを常に知らせることが、学生の理解度に繋がるため、建設的なアドバイスやコメントが大切であると考えられる。

4）授業の振り返り

授業の振り返りについては、ビデオ録画により自己分析をして授業中には気づかなかった点（説明の仕方、声の大きさ・明瞭さ、視線の向き、顔の表情など）が見えてくる、自己分析は学生の視点から自ら授業を捉えなおすことができる、あるいはコンサルタントによる分析を行い、授業の不十分なところを補う、振り返ることにより授業全体をデザインし直すための反省材料を得る（佐藤ら、2012 年）。授業をオープンにし同僚教員から意見をもらう、また、既習生に以前との授業を比較してもらう（木野、2005 年）と述べている。実技の授業では師範することと同時に、学生を集団で行動させることが必要である。限りある授業時間内で大勢の学生を集団で行動させるには、客観的に授業を振り返ることにより、不十分な点は補い不必要な点は削除するなどして、自らの授業全体を捉えなおして次の授業の反省材料を得ることが重要であると考えられる。

5）まとめ

「大学講義の授業デザイン」に関する関連書籍を参考に、講義の授業デザインが実技の授業で応用できることはないだろうかと考えまとめてきた。これまで出版されている書籍は講義の授業デザインについては多数あるが、具体的な実技の授業デザインに関する書籍は極めて少ない。しかしながら、体育実技においてこそ授業方法や授業デザインが大学の新任教員や若手教員のために必要であると思われる。なぜならば、体育実技の教員には師範や集団行動といったスキルが必要だからである。課題は多いが今後実技に関する授業デザインを作成する必要があると考えられる。

参考図書

木野茂「大学授業改善の手引き　双方向授業への誘い」ナカニシヤ出版．2005 年.

B.G.Davis ら「ABC' s of Teaching with Excellence　授業をどうする！カリフォルニア大学バークレー校の授業改善のためのアイデア集」東海大学出版. 1995 年.

苅谷剛彦「グローバル化時代の大学論①　アメリカの大学・ニッポンの大学」2012 年 .

佐藤浩章ら「大学教員のための授業方法とデザイン」玉川大学出版部　2012 年.

2014 年度
慶應義塾大学体育研究所基盤研究報告書

2015年3月31日発行
編集・発行　慶應義塾大学体育研究所
代表者　石手　靖
〒223-8521　横浜市港北区日吉4-1-1
TEL.045-563-1111（代表）
http://www.hc.keio.ac.jp/ipe/
制作　慶應義塾大学出版会
印刷・製本　株式会社太平印刷社

©2015 Keio University Institute of Physical Education
著作権者の許可なしに複製・転載を禁じます。